

平安京左京八条三坊四・五町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条三坊四・五町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、ターミナル整備工事に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 21 年 12 月

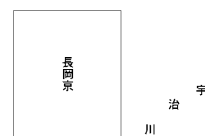
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条三坊四・五町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区東塩小路釜殿町他地内
- 3 委 託 者 近畿日本鉄道株式会社 鉄道事業本部 大阪輸送統括部長 丹羽 彰
- 4 調査期間 2008年5月8日～2007年9月8日
2008年11月26日～2008年12月26日
2009年2月12日～2007年5月11日
- 5 調査面積 2,450 m²
- 6 調査担当者 辻 裕司・木下保明・長戸満男・大立目 一・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「島原」・「五条大橋」・「梅小路」・「京都駅」を参考にして作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI (ただし、単位 の「m」を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに遺構の種類を前に付け、通し番号を付した。ただし、建物や柱列など、まとまりのある遺構は別に番号を付した。
- 12 遺物番号 遺物種類ごとに通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 13 本書作成 辻 裕司・木下保明・長戸満男・大立目 一・布川豊治
付章:竜子正彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査および報告作成にあたり、下記の方々の御協力を得た。記して謝意を表する次第である。

伊藤淳史(京都大学)、鋤柄俊夫(同志社大学)、鈴木久男(京都産業大学)、仲 隆裕(京都造形芸術大学)、西山良平(京都大学)、野口 実(京都女子大学)、藤田勝也(関西大学)、美川 圭(摂南大学)、山田邦和(同志社女子大学)、李 永一(日本地学研究会) 五十音順/敬称略



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	（辻）	1
2. 位置と環境	（辻）	3
3. 遺 構		7
(1) 1区の遺構	（辻）	7
(2) 2区の遺構	（長戸）	19
(3) 3区の遺構	（木下・布川）	28
(4) 4区の遺構	（大立目・長戸）	34
4. 遺 物		39
(1) 遺物の概要	（大立目・長戸）	39
(2) 平安時代の土器類	（大立目・長戸）	39
(3) 鎌倉時代の土器類	（大立目・長戸）	44
(4) 室町時代の土器類	（大立目・長戸）	58
(5) 瓦類	（布川）	61
(6) その他の遺物	（布川）	66
5. ま と め	（長戸）	68
(1) 平安京左京八条三坊四・五町の変遷について		68
(2) 町尻小路について		71
(3) 周辺調査との関連について		72
6. 付章 出土した種実同定	（竜子）	73

図 版 目 次

巻頭図版 1	遺跡	調査地遠景（西から）
巻頭図版 2	遺構	1 2区泉 100（北から） 2 1区建物 146（南西から）
図版 1	遺構	調査区割図（1：500）
図版 2	遺構	1区 第3面遺構平面図1（1：150）
図版 3	遺構	1区 第3面遺構平面図2（1：150）
図版 4	遺構	1区 第2-2面遺構平面図1（1：150）

図版 5	遺構	1区	第2-2面遺構平面図2 (1:150)
図版 6	遺構	1区	第2-1面遺構平面図1 (1:150)
図版 7	遺構	1区	第2-1面遺構平面図2 (1:150)
図版 8	遺構	1区	第1面遺構平面図 (1:200)
図版 9	遺構	1区	北壁断面図 (1:100)
図版 10	遺構	1区	建物 146 平面図 (1:80)
図版 11	遺構	1区	建物 146 断面図・雨落溝立面図 (1:40)
図版 12	遺構	1区	建物 160・300 実測図 (平面図 1:80、断面図・立面図 1:40)
図版 13	遺構	1区	柱列 1～4 実測図 (1:80)
図版 14	遺構	1区	土坑 104・137・400・401・429・440・463 実測図 (1:50)
図版 15	遺構	1区	土坑 52・76・86・100～102・226・269・333 実測図 (1:50)
図版 16	遺構	2区	第3面遺構平面図1 (1:150)
図版 17	遺構	2区	第3面遺構平面図2 (1:150)
図版 18	遺構	2区	第2面遺構平面図1 (1:150)
図版 19	遺構	2区	第2面遺構平面図2 (1:150)
図版 20	遺構	2区	第1面遺構平面図 (1:200)
図版 21	遺構	2区	東壁・セクション断面図 (1:50)
図版 22	遺構	2区	北壁断面図 (1:100)
図版 23	遺構	2区	北壁断面図土層名
図版 24	遺構	2区	セクション断面図 (1:50)
図版 25	遺構	2区	池 160-2 平面図 (1:80)
図版 26	遺構	2区	池 160-1 平面図 (1:80)
図版 27	遺構	2区	池 160-1・160-2 水域範囲図 (1:100)
図版 28	遺構	2区	池 160 断面図1 (1:50)
図版 29	遺構	2区	池 160 断面図2 (1:50)
図版 30	遺構	2区	泉 100 実測図・等高線図 (1:50)
図版 31	遺構	2区	建物 1・柱列 4・5 実測図 (1:80)
図版 32	遺構	2区	井戸 55・199・200・304・316 実測図 (1:50)
図版 33	遺構	2区	井戸 348・356、土坑 132、溝 227、落込 361 実測図 (1:50)
図版 34	遺構	3区	第3面遺構平面図1 (1:150)
図版 35	遺構	3区	第3面遺構平面図2 (1:150)
図版 36	遺構	3区	第2面遺構平面図1 (1:150)
図版 37	遺構	3区	第2面遺構平面図2 (1:150)
図版 38	遺構	3区	第1面遺構平面図 (1:200)
図版 39	遺構	3区	北壁断面図 (1:100)

- 図版 40 遺構 3区 南半北壁断面図 (1:50)
- 図版 41 遺構 3区 セクション断面図 (1:50)
- 図版 42 遺構 3区 泉 433 実測図 (1:50)、井戸 188・235、土坑 448、集石 445 実測図 (1:40)
- 図版 43 遺構 3区 泉 241 実測図 (1:80)
- 図版 44 遺構 3区 井戸 89・196・451 実測図 (1:50)、井戸 93 実測図 (1:40)
- 図版 45 遺構 3区 建物 70・99 実測図 (1:80)
- 図版 46 遺構 3区 建物 131・161 実測図 (1:80)
- 図版 47 遺構 3区 土坑 105・459 実測図 (1:50)、土坑 122・162・163・173・296・419 実測図 (1:40)
- 図版 48 遺構 4区 第3面遺構平面図 (1:150)
- 図版 49 遺構 4区 第2面遺構平面図 (1:150)
- 図版 50 遺構 4区 第1面遺構平面図 (1:200)
- 図版 51 遺構 4区 北壁・東壁・西壁断面図 (1:100)
- 図版 52 遺構 4区 地業 106 実測図 1 (1:60)
- 図版 53 遺構 4区 地業 106 実測図 2 (1:60)
- 図版 54 遺構 4区 柵 1、Pit53・92・135、土坑 101・154・176 実測図 (1:50)
- 図版 55 遺構 4区 土坑 35・36・99・120・122・124・133 実測図 (1:50)、土坑 72 実測図 (1:80)
- 図版 56 遺物 1区建物 146・土坑 393・溝 416・柱穴 65、2区落込 361・3区泉 443・土坑 448 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 57 遺物 1区土坑 137、2区井戸 55・石敷 180、4区井戸 167 出土土器実測図 (1:4、146のみ 1:8)
- 図版 58 遺物 1区土坑 86・102 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 59 遺物 1区土坑 52・100・101・271・400、3区土坑 196、4区土坑 122 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 60 遺物 2区泉 100、4区整地層 100・112、4区土坑 120・176 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 61 遺物 1区土坑 108・153・333、2区溝 159 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 62 遺物 2区路面 150-1・井戸 348、3区土坑 58・296、4区土坑 35 出土土器実測図 (1:4)
- 図版 63 遺物 四町・五町出土軒丸瓦拓影・実測図 (1:4)
- 図版 64 遺物 五町出土軒丸瓦拓影・実測図 (1:4)
- 図版 65 遺物 四町・五町出土軒平瓦拓影・実測図 (1:4)
- 図版 66 遺物 五町出土軒平瓦拓影・実測図 (1:4)
- 図版 67 遺構 1 1区北 第3面全景 (東から)
2 1区南東 第3面全景 (西から)

- 図版 68 遺構 1 1区南中 第3面全景(西から)
2 1区南西 第3面全景(西から)
- 図版 69 遺構 1 1区 建物 146(東から)
2 1区 建物 146(西から)
3 1区 建物 146 地業(南西から)
- 図版 70 遺構 1 1区 建物 160(西から)
2 1区 建物 160 礎石(西から)
3 1区 建物 160 雨落溝北拡張区(南から)
- 図版 71 遺構 1 1区北 第2面全景(西から)
2 1区南東 第2面全景(西から)
- 図版 72 遺構 1 1区南中 第2面全景(西から)
2 1区南西 第2面全景(西から)
- 図版 73 遺構 1 1区 井戸 252(南東から)
2 1区 柱列1 柱穴 286 礎板(西から)
3 1区 柱列1 柱穴 289 礎板(南から)
4 1区 柱列1 柱穴 274 礎板(東から)
5 1区 土坑 400・401(西から)
6 1区 土坑 440(南から)
- 図版 74 遺構 1 1区北 第1面全景(西から)
2 1区南東 第1面全景(西から)
- 図版 75 遺構 1 1区南中 第1面全景(西から)
2 1区南西 第1面全景(西から)
- 図版 76 遺構 1 2区北 第3面全景(西から)
2 2区南 第3面全景(西から)
- 図版 77 遺構 1 2区北 池 160-2(北西から)
2 2区南 池 160-2(南西から)
3 2区南 池 160-2 景石 394(北東から)
- 図版 78 遺構 1 2区南西 第3層下層(南から)
2 2区 落込 361(北から)
3 2区北 第2面全景(西から)
- 図版 79 遺構 1 2区南東 第2面全景(西から)
2 2区南西 第2面全景(西から)
- 図版 80 遺構 1 2区 泉 100 甕・石敷(南から)
2 2区 泉 100 甕・曲物(西から)
3 2区 泉 100 断面(北西から)

- | | | | | | | |
|------|----|---|------|-----------|--------|--------|
| | | 4 | 2区 | 泉100 | 木枠 | (南から) |
| | | 5 | 2区 | 泉100 | 完掘状況 | (西から) |
| 図版81 | 遺構 | 1 | 2区北 | 池160-1 | | (北西から) |
| | | 2 | 2区南 | 池160-1 | | (南西から) |
| 図版82 | 遺構 | 1 | 2区 | 井戸316・348 | | (北から) |
| | | 2 | 2区 | 井戸356 | | (北から) |
| | | 3 | 2区 | 井戸304 | | (南から) |
| | | 4 | 2区 | 溝227 | | (東から) |
| 図版83 | 遺構 | 1 | 2区 | 井戸55 | 曲物検出状況 | (南から) |
| | | 2 | 2区 | 井戸200 | | (北から) |
| | | 3 | 2区 | 井戸199 | | (北から) |
| | | 4 | 2区北 | 第1面 | 全景 | (西から) |
| 図版84 | 遺構 | 1 | 2区南東 | 第1面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 2区南西 | 第1面 | 全景 | (東から) |
| 図版85 | 遺構 | 1 | 3区北 | 第3面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 3区南 | 第3面 | 全景 | (東から) |
| 図版86 | 遺構 | 1 | 3区 | 泉443 | | (西から) |
| | | 2 | 3区北 | 泉241 | | (北西から) |
| 図版87 | 遺構 | 1 | 3区南 | 泉241 | 下面 | (西から) |
| | | 2 | 3区南 | 泉241 | 泉湧出部 | (南から) |
| 図版88 | 遺構 | 1 | 3区北 | 第2面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 3区南 | 第2面 | 全景 | (西から) |
| 図版89 | 遺構 | 1 | 3区 | 建物99 | 南半と柱穴群 | (北西から) |
| | | 2 | 3区 | 土坑459 | | (東から) |
| | | 3 | 3区 | 土坑419 | | (北から) |
| 図版90 | 遺構 | 1 | 3区北 | 第1面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 3区南 | 第1面 | 全景 | (東から) |
| 図版91 | 遺構 | 1 | 4区北 | 第3面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 4区南 | 第3面 | 全景 | (東から) |
| 図版92 | 遺構 | 1 | 4区 | 井戸167 | | (東から) |
| | | 2 | 4区 | 溝201 | | (南から) |
| | | 3 | 4区 | 溝212 | | (南から) |
| 図版93 | 遺構 | 1 | 4区北 | 第2面 | 全景 | (西から) |
| | | 2 | 4区南 | 第2面 | 全景 | (東から) |
| 図版94 | 遺構 | 1 | 4区北 | 地業106 | 上面 | (北東から) |

- 2 4区北 地業106 下面(北東から)
- 図版95 遺構 1 4区南 地業106 西辺(南から)
2 4区南 地業106 東辺(南から)
3 4区南 地業106 西辺底面(南から)
4 4区南 地業106 東辺底面(南から)
- 図版96 遺構 1 4区北 第1面全景(西から)
2 4区南 第1面全景(西から)
- 図版97 遺物 3区泉443・1区建物146 出土土器
- 図版98 遺物 2区落込361 出土土器
- 図版99 遺物 2区路面150-2・1区第4層下層・3区第2層・3区第3層 出土土器
- 図版100 遺物 1区井戸252・1区土坑137 出土土器
- 図版101 遺物 4区井戸167・3区泉241・1区土坑136・1区土坑86 出土土器
- 図版102 遺物 1区土坑86・1区土坑102・1区土坑145 出土土器
- 図版103 遺物 3区土坑105・4区土坑154・2区池160・1区土坑52 出土土器
- 図版104 遺物 1区土坑52・1区土坑100・1区土坑101 出土土器
- 図版105 遺物 1区土坑101・4区土坑122・1区土坑400・3区井戸89・4区Pit92 出土土器
- 図版106 遺物 4区土坑99・4区土坑101・4区土坑120・4区土坑176・4区整地層112・
2区泉100 出土土器
- 図版107 遺物 1区土坑108・1区土坑153 出土土器
- 図版108 遺物 1区土坑153・1区土坑333・3区溝63・1区井戸109 出土土器
- 図版109 遺物 4区土坑124・1区土坑367・1区土坑76・2区井戸316・2区井戸356・3
区土坑296 出土土器
- 図版110 遺物 3区土坑296 出土土器
- 図版111 遺物 2区路面150-1・2区井戸348・3区土坑162・2区溝227・2区土坑297 出土
土器
- 図版112 遺物 輸入陶磁器
- 図版113 遺物 四町出土軒丸瓦
- 図版114 遺物 五町出土軒丸瓦1
- 図版115 遺物 五町出土軒丸瓦2
- 図版116 遺物 四町出土軒平瓦
- 図版117 遺物 五町出土軒平瓦1
- 図版118 遺物 五町出土軒平瓦2
- 図版119 遺物 ガラス製品・石製品・木製品
- 図版120 遺物 銭貨・壁土・白色円礫

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (西から)	2
図 3	作業風景 (西から)	2
図 4	周辺調査地点配置図 (1 : 5,000)	4
図 5	1区 調査区南北断面図 (1 : 80)	8
図 6	1区 土坑 179 ~ 181・187 実測図 (1 : 50)	10
図 7	1区 溝 416・471 断面図 (1 : 50)	13
図 8	1区 柱列 5 ~ 7 実測図 (1 : 50)	15
図 9	1区 井戸 109・252 実測図 (1 : 50)	16
図 10	2区 池 160-2 景石 203・204 実測図 (1 : 20)	20
図 11	2区 景石 203・204 (西から)	21
図 12	2区 景石 204・土器出土状況 (南から)	21
図 13	2区 池 209 実測図 (1 : 80)	27
図 14	3区 柱列 83・114・168・177 実測図 (1 : 80)	33
図 15	4区 井戸 167 実測図 (1 : 50)	35
図 16	1区 柱穴 65 出土緑釉白地黒搔落し牡丹花瓶	41
図 17	1区 建物 160・第 4 層下層、2区 路面 150-2 出土土器実測図 (1 : 4)	41
図 18	3区 第 2・3 層、4区 土坑 74・第 2 層出土土器実測図 (1 : 4)	43
図 19	1区 井戸 252 出土土器実測図 (1 : 4)	44
図 20	1区 土坑 137 出土輸入緑釉皿	45
図 21	1区 土坑 136、3区 泉 241 出土土器実測図 (1 : 4)	46
図 22	1区 土坑 145、2区 井戸 199、3区 土坑 105・路面 227-2、4区 土坑 154 出土土器実測図 (1 : 4)	47
図 23	2区 池 160 出土土器実測図 (1 : 4、283 のみ 1 : 8)	49
図 24	3区 井戸 89、4区 Pit92・土坑 99・101 出土土器実測図 (1 : 4)	51
図 25	1区 井戸 109・土坑 269、2区 井戸 200、3区 溝 63・土坑 324 出土土器実測図 (1 : 4)	55
図 26	4区 土坑 124 出土土器実測図 (1 : 4)	56
図 27	1区 土坑 367、2区 土坑 132、3区 柱穴 383 出土土器実測図 (1 : 4)	56
図 28	1区 土坑 76、2区 井戸 316・356、3区 土坑 459 出土土器実測図 (1 : 4)	57
図 29	2区 溝 227、3区 土坑 162・173 出土土器実測図 (1 : 4)	59
図 30	2区 土坑 297 出土土器実測図 (1 : 4)	60

図 31	ガラス・石製品実測図（1：4）	66
図 32	木製品実測図（1：4）	67
図 33	主要遺構配置図（1：2,000）	69
図 34	自然遺物	75

表 目 次

表 1	周辺調査概要表	5
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	39
表 4	出土軒瓦の構成（点数）	61
表 5	自然遺物一覧表	74
表 6	掲載土器図面一覧表	76
表 7	出土土器の構成（破片数）	77
表 8	掲載土器類観察表	80
表 9	掲載軒瓦観察表	92

平安京左京八条三坊四・五町跡

1. 調査経過

調査地は、京都市下京区東塩小路釜殿町他地内に所在する。調査区域は、JR 京都駅と近鉄京都駅間の近鉄敷地内にあたり、東西約 215 m の範囲に及び、平安時代の条坊では平安京左京八条三坊四・五町跡に相当する。この場所に近畿日本鉄道株式会社（以下「近鉄」という。）が近鉄京都駅ターミナル整備工事を計画したことにより、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって、平成 17 年（2005）3 月に建物建設対象地内に 5 箇所の特レンチを設定して試掘調査が実施された。調査の結果、平安時代後期から鎌倉時代の園池跡や町尻小路側溝などの遺構および当該期の遺物が検出されたことから、文化財保護課が発掘調査の指導を行い、委託を受けた財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、平安時代後期から末期にかけての貴族や皇族の邸宅跡や、町尻小路などの検出を主目的とし、さらに周辺遺跡で検出されている縄文時代から近世に至る重層した遺跡が検出される可能性も高く、これらについても目的の一つとした。

また、調査地北側に位置する中世の手工業生産遺跡は、現在の京都駅ビルを含む一帯で検出されており、当遺跡が四・五町に展開するか興味のもたれるところでもあった。

調査地の現況は南側に近鉄京都駅に伴う擁壁があり、調査地内は平坦面を呈するが、西方には

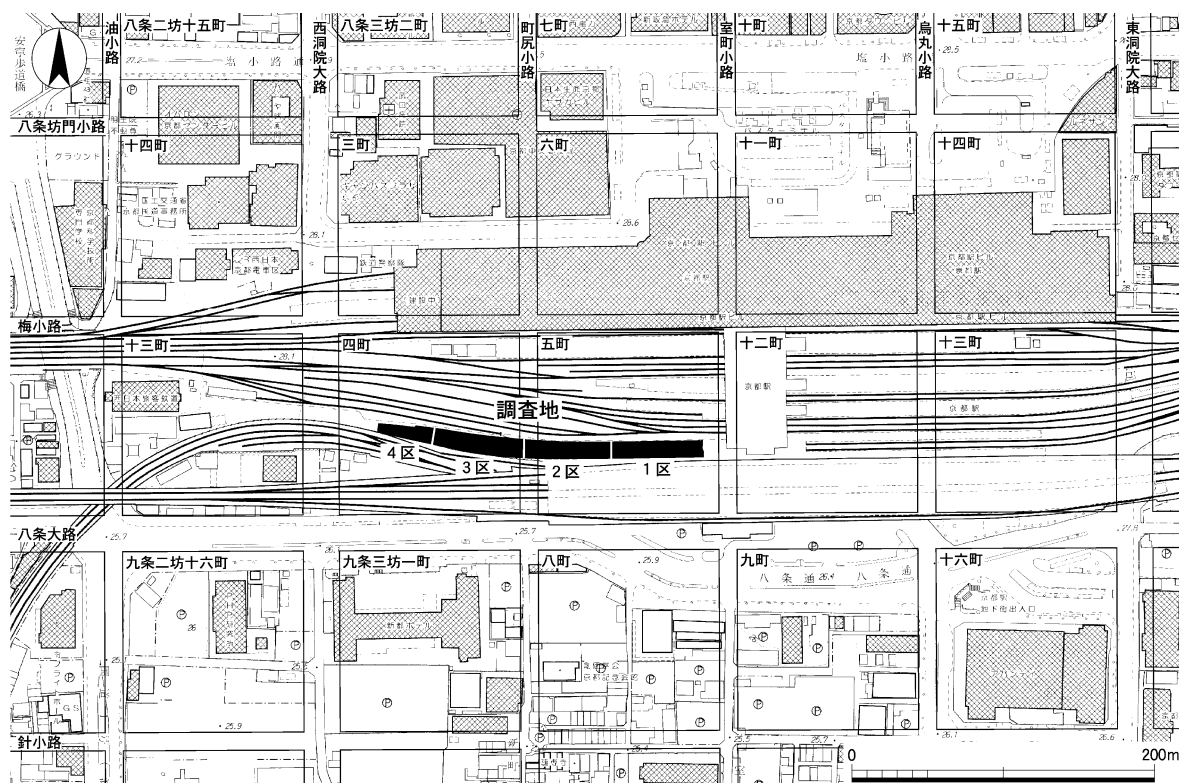


図1 調査位置図（1：5,000）

近鉄京都駅下に南北通路があり、その北口から東西に上がる緩やかなスロープが設けられている。また、JR および近鉄の敷地に沿って西方が北寄りに曲がり、弓なりの形状である（図1）。

調査の工程は、工事計画の工程に従い、調査対象地が先に実施する北半と、後に実施する南半に大きく分けられた。まず、北半の発掘調査を行うに際し、南半を工事ならびに調査に伴う作業域とした。北半の発掘調査終了後、直ちに基礎敷設工事が実施され、終了後は、北半を工事ならびに調査に伴う作業域として南半の発掘調査を実施するといった工程である。

当該地は文化財保護課による試掘調査から盛土の厚さが約 2.5 m にも及ぶことが判明しており、発掘調査ならびにその後の本体工事に際し、予め北側に鋼矢板、中央部に H 鋼が敷設されていた。北半の調査では鋼矢板・H 鋼間は重機掘削が終了した箇所から順次並行して支保工により土留めがなされた。南半の調査は中央部の H 鋼から南側の擁壁に伴う攪乱坑までの範囲であり、土留めの必要がなかった。調査範囲は南北幅約 11 m、東西延長は約 215 m に及ぶ。

発掘調査区は、これら工事工程ならびに調査方法を基にして調査対象地内を東側から約 60 m 間隔で区切り、東から 1～4 区の調査区を設定した。

平安京跡における各調査区の位置は、1 区が左京八条三坊五町西二・三・四行北五・六門、2 区が同五町西一・二行北五・六門、3 区が同四町西三・四行北五・六門、4 区が同四町西一・二・三行北五門に該当し、2・3 区間には条坊路である町尻小路が南北に通る。

調査工程は、第 1 回目が北半の 1～4 区、第 2 回目が南半の 1 区東部、第 3 回目が南半の 1 区西部および 2～4 区の合計 3 回にわたり実施した。第 1 回目は、平成 20 年（2008）5 月 8 日から 1 区の重機掘削を開始し、同年 9 月 8 日に終了した。第 1 回目の発掘調査に伴う排土は、調査区に沿って設置したベルトコンベアで 4 区西側まで移動し、仮置きした。第 2 回目は平成 20 年（2008）11 月 26 日から重機掘削を開始し、同年 12 月 26 日に終了した。第 3 回目は平成 21 年（2009）2 月 12 日に 1 区西部から重機掘削を開始し、同年 5 月 11 日に調査を終了した。

1～4 区とも重機掘削後、人力による調査を進めた。図面・写真等の記録についても各調査区ごとに行った。また、重要な遺構は写真測量を用いた。各調査区とも調査面ごとに文化財保護課の検査・指導を受けた。発掘調査に際しては、上記調査区分に従って実施しており、本報告についても各調査区ごとに分けて報告することとする。



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景（西から）

なお、北半の調査を実施していた平成20年(2008)8月2日(土)には、調査成果を市民に広く周知する目的から現地説明会を開催した。説明会では午前10時と11時に2回の説明を行い、猛暑にもかかわらず約300名以上の参加を得た。

2. 位置と環境

調査地は平安京の南東部に位置している。鴨川に形成された扇状地の中でも南端の南西方向の舌状に伸びる最も新しい塩小路層と呼称されている礫層の扇状地が遺構の基盤層を形成している。

調査地周辺の平安京遷都前の遺跡としては、調査地南側に展開する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡とされている烏丸町遺跡がある。

平安京遷都後、当該地は平安京城となるが、周辺の調査では、南西方向に延長する自然流路や湿地状の堆積などが検出されるにとどまり、開発はあまり進んでいなかった可能性が高く、平安時代の遺構密度は低い。また、治承二年(1178)のいわゆる次郎焼亡の範囲は八条坊門小路以北であり、調査地までは及んでいないと考えられる。

調査地以北の三坊の発掘調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての柱穴や井戸などが広範囲にわたり検出されており、井戸などから鏡・銭・仏具などの鋳型を含む鋳造関係の遺物が出土している。また、甕蔵や備蓄銭なども検出されていることから、職人層の他に酒屋・油屋・借上・土倉などの裕福な商人層の存在も考えられる。

調査地周辺の歴史的環境は、上記の既調査成果だけでは、各時代の様相が必ずしも明らかではない。以下では文献史料を辿ることによってその空白を補っておきたい。

文献史料によれば、調査地周辺の開発が明瞭になるのは平安時代後期で、八条大路周辺に平清盛の「西八条第」など、平氏関係の邸宅が形成され、調査地である八条三坊五町には白河院の近臣で絶大な権力をふるい「夜の関白」と呼ばれた藤原顕隆など貴族の邸宅が建ち始めた時期である。また、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけては、調査地の東に位置する八条三坊十三町には鳥羽上皇と中宮美福門院得子の膨大な所領を相続した八条院暲子内親王の「八条院御所」が存在し、周囲には院庁・御倉などの付属施設が建ち並んでいた。

しかし、平家一門が没落したことや、建暦元年(1211)の八条院崩御後は町屋化が進み、正和二年(1313)に八条院御所跡を含む近辺の所領が一括して東寺に寄進された頃には、職能民の町「八条院町」として変貌を遂げていった。その様相は前述したように既往の調査成果によく反映されている。

八条院町の衰退過程は不明な点が多いが、南北朝の戦乱に巻き込まれ、焦土化したことを契機に町としての衰退が始まり、室町時代後期、応仁元年(1467)の応仁の乱以降には農村化したものと考えられている。その後、調査地は東塩小路村に属し、桃山時代には豊臣秀吉によって築かれた御土居跡の外側に該当する。そして、江戸時代を経て、明治10年(1877)に七条停車場(現京都駅)が建設され、今日に至っている。

調査区の位置する八条三坊四・五町の沿革について関連する文献記事を記しておく。

調査区西半、四町については、康治年間（1142～1144）、四町西南部に関白藤原忠実が丈六の阿弥陀如来を安置して「阿弥陀堂」を建立したが、仁安四年（1169）には荒廃したため他の場所に移転し再建している（『兵範記』同年二月三日条）。

四町東部は、貞応二年（1223）五月三日付『後高倉院庁下文抄写』によれば、前述した八条女院の散在所領地の一部であり、四町東北側を「梅小路南町」、東南側を「八条北町」と記載している。この記事では南北2つの町の境が「五門内」となっており、さらに「丈・尺・寸」で町の範囲を厳密に再規定していることから、平安時代の住居表示方式である「四行八門」制が徐々に形骸化していることが窺われる。

正和二年（1313）、八条院町は後宇多院によって東寺に寄進され、東寺領八条院町となる。八条院領の所領標示を条坊保制と四行八門制に従って示す『八条院在所注文』によれば、同町内の八条院領は「一同坊二保四町（四・三・二行内、八・七・六・五門内、一・二・三・四・五門内、四・三行内）北南両所（梅小路南 南北廿二丈、町小路西 東西廿丈、八条北 南北十二丈九尺三寸、町小路西 東西十九丈）西面両所（按察局預）」と記されている。この記事から四町東側の北と南で奥行き異なる2つの区画で構成されていたことがわかり、四町内の八条院町の範囲が確定したことになる。四町西部については文献史料は明らかでない。

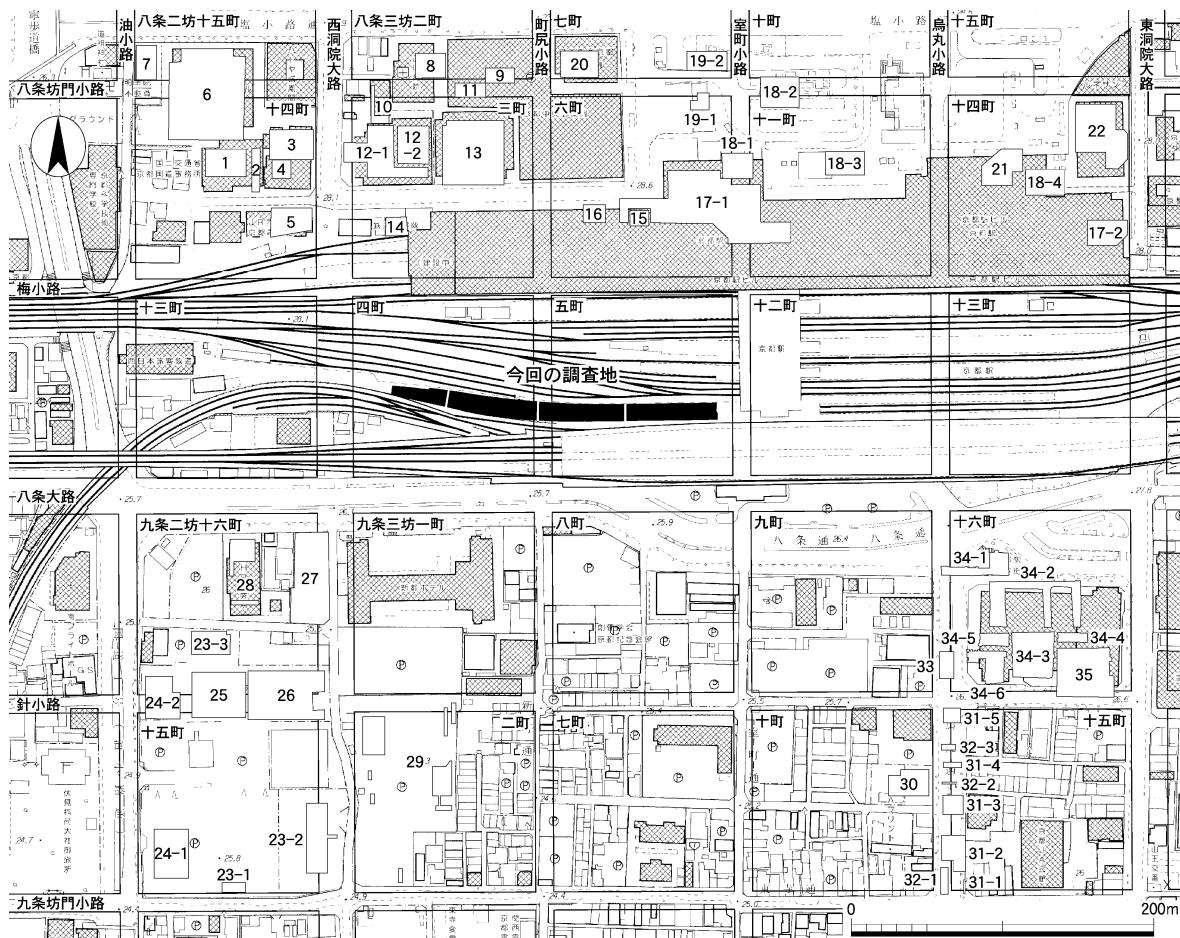


図4 周辺調査地点配置図（1：5,000）

表1 周辺調査概要表

番号	条坊地点	条坊・区画関連	宅地関連	整地・耕作・ 流路・湿地関連	墓関連	鑄造関連	参考文献
1	八条二坊 十四町		平安後期の建物、石敷遺構(建物地業・地鎮)、鎌倉～室町の土坑・柱穴・井戸	池	室町の木棺墓	室町の鑄型・埴塙・鉾滓	『平安京左京八条二坊1』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
2	八条二坊 十四町	平安後期以降の北三・四門界溝	平安前期の溝・土坑、平安後期の溝、鎌倉の井戸、室町前期の土坑		室町前期の木棺墓・犬墓	室町の鑄型・埴塙	『平安京左京八条二坊』『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002
3	八条二坊 十四町		平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柵・柱穴	平安前期の池状、室町以降の耕作地	鎌倉～室町の木棺墓	鎌倉の鑄型・埴塙・羽口	『平安京左京八条二坊1』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
4	八条二坊 十四町		平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑	江戸の耕作溝		鎌倉の鑄型・埴塙	『平安京左京八条二坊2』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
5	八条二坊 十四町	西三・四行界溝	平安前期の土坑、平安後期～室町前期の井戸・溝・土坑・柱穴	室町後半以降の耕作溝		鎌倉の鑄型・羽口	『平安京左京八条二坊』『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997
6	八条二坊 十四・十五町	平安後期～室町の八条坊門小路路面・両側溝	平安後期の井戸・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴		鎌倉～室町の埋喪・木棺墓	鎌倉～室町の埴塙・鑄型・羽口・鉾滓	『平安京左京八条二坊2』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
7	八条二坊 十五町		平安後期～室町の井戸・土坑・柱穴	平安前期の流路、平安中期の園池		平安後期の鑄型、室町の埴塙	『平安京左京八条三坊十五町』株式会社日開設計コンサルタント 2007
8	八条三坊 二町		鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴				『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981
9	八条三坊 二町	平安後期の八条坊門小路北側溝	平安後期の井戸				『平安京左京八条二坊跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-1』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
10	八条三坊 三町	平安の八条坊門小路北側溝	平安の土坑、鎌倉～室町後期の井戸・土坑・柱穴	古墳の砂礫層、室町後半以降の耕作溝		鎌倉～室町の鑄型・埴塙	『平安京左京八条三坊2』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
11	八条三坊 三町		鎌倉の井戸				『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981
12	八条三坊 三町	室町後期の西洞院川	平安前期の土坑・溝、平安後期の土坑、鎌倉～室町前半の溝・土坑・井戸・甕掘付土坑群	江戸の耕作地		鎌倉～室町の鑄型・埴塙・羽口	『平安京左京八条三坊1』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
13	八条三坊 三町	平安後期～鎌倉の西二・三行界溝	平安後期～室町前半の井戸・溝・土坑・柱穴、石敷遺構・溝・埋喪土坑群	平安中期の流路、桃山～江戸の耕作溝		鎌倉～室町の鑄型・埴塙・羽口	『平安京左京八条三坊1』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
14	八条三坊 三町	鎌倉の西一・二行界溝	平安前期の柱穴、鎌倉の井戸・柱穴・土坑・溝	古墳の砂礫層、平安前期の流路、江戸の耕作土		鎌倉～室町の鑄型・埴塙・羽口・鉾滓	『平安京左京八条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-10 2005
15	八条三坊 六町		平安後期の土坑、鎌倉の土坑、室町の溝				『左京八条三坊』『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984
16	八条三坊 六町	鎌倉～室町の区画溝	鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴	江戸の耕作土		鎌倉～室町の鑄型・埴塙	『平安京左京八条三坊』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
17	八条三坊 六・十一・十四町	平安後期～室町前半の室町小路路面・両側溝	平安中期～後期の井戸・溝、鎌倉～室町の建物・堅穴状遺構・井戸・溝・土坑・柱穴	平安中～後期の流路・湿地、室町後半の耕作溝		鎌倉～室町前半の埴塙・鑄型・埴塙・羽口・鉾滓	『平安京左京八条三坊2』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
18	八条三坊 六・十一・十四町	平安の八条坊門小路路面・両側溝、室町小路路面・東側溝	平安の井戸・土器溜、鎌倉の溝・土坑、室町の溝・土坑・井戸	平安の包含層			『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査-』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
19	八条三坊 六・七町	平安後期～室町の八条坊門小路路面・北側溝	平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴	平安前～中期の流路、桃山以降の耕作地		鎌倉～室町の鑄型・埴塙・羽口・鉾滓	『平安京左京八条三坊1』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
20	八条三坊 七町	鎌倉～室町の八条坊門小路北側溝	奈良～平安中期の井戸、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・土坑・柱穴	古墳～奈良の流路、江戸の耕作地	室町の墓	室町の埴塙	『平安京左京八条三坊』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
21	八条三坊 十四町		平安後期の土坑、鎌倉～室町前半の溝・土坑・井戸	平安前の流路(後期に埋め立て整地)			『No.69』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982
22	八条三坊 十四町	平安後期～室町後半の北一・二門界、北二・三門界溝・柵	平安後期～鎌倉の溝、鎌倉後半～室町前半の建物・井戸・土坑・柱穴・堅穴状遺構・埋喪	平安中期前の湿地(後期に埋め立て整地)			『平安京左京八条三坊2』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
23	九条二坊 十五・十六町	平安後期の北五・六門界溝と北六・七門界溝と西二・三行界・柵	平安後期の溝・柵・土坑・柱穴、鎌倉～室町の井戸・柱穴	砂礫層から弥生・古墳の遺物、耕作地			『平安京左京九条二坊』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

番号	条坊地点	条坊・区画関連	宅地関連	整地・耕作・ 流路・湿地関連	墓関連	鋳造関連	参考文献
24	九条二坊 十五・十六 町		桃山の御土居から多量の木製品	砂礫層から古墳 の遺物、近世の 耕作地			『平安京左京九条二坊』『平成3年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995
25	九条二坊 十五・十六 町	平安後期～鎌倉の針小 路両側溝、西二・三行 界溝	平安前期の建物、鎌倉～室町の 井戸・柱穴	耕作地			『平安京左京九条二坊1』『平成4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995
26	九条二坊 十五・十六 町	平安後期～鎌倉の針小 路北側溝	平安後期～鎌倉の井戸・柱穴	弥生・古墳の砂 礫層、近世以降 の耕作溝			『平安京左京九条二坊』『平成5年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
27	九条二坊 十六町		平安後期～室町の井戸・土坑・ 柱穴・池状遺構(景石・洲浜状)	砂礫層から弥生 ・古墳の遺物、 耕作地			『平安京左京九条二坊2』『平成4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995
28	九条二坊 十六町		平安前期の池状・土坑、平安後 期～室町後半の柱穴・井戸・土 坑・溝・園池	鎌倉末以降の耕 作地		鎌倉の羽口・ト リベ	『平安京左京九条二坊』『平成10年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2000
29	九条三坊 二町	平安後期～鎌倉の針小 路路面・南側溝	平安後期～鎌倉の池・白砂・柱 穴、鎌倉前半～室町後半の柱穴 ・井戸・土坑・溝	室町後半以降の 耕作地			『平安京左京九条三坊』『平成9年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
30	九条三坊 十町		平安前期の建物・土坑、鎌倉～室 町の建物・塀・井戸・溝・土坑	平安前期の池・ 遺水、室町以降 の耕作地		平安前期の羽口	『平安京左京九条三坊十町』古代文 化調査会 2006
31	九条三坊 十五町	平安後期～鎌倉の烏丸 小路東側溝	平安前期の井戸、平安中期の土 坑・溝・柱穴、平安後期～鎌倉 の井戸・溝・土坑、室町後期～ 江戸の濠	縄文晩期の小窪 み、弥生後期の 溝、室町～江戸 の耕作土			『平安京左京九条三坊』『昭和59年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987
32	九条三坊 十五町	平安後期～室町の九条 坊門小路北側溝、烏丸 小路東側溝	平安中期の土坑、平安後期～室 町の土坑・柱穴	室町の耕作溝			『平安京左京九条三坊』『昭和60年 度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
33	九条三坊 十六町		平安後期の柱穴・井戸・土坑、 鎌倉の井戸・土坑、鎌倉～室町 の柱穴				『左京九条三坊』『昭和56年度京 都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
34	九条三坊 十六町		飛鳥の井戸、平安後期～室町の 建物・欄・井戸・土坑・溝、三 彩陶枕出土	耕作土			『平安京左京九条三坊跡 京都駅南口 第一種市街地再開発事業に伴う埋 蔵文化財調査概報』昭和54年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
35	九条三坊 十六町		平安後期～室町の建物・欄・井 戸・土坑・溝	縄文晩期の堆積 土、耕作土		平安後期～鎌倉 の鋳型・埴場・ 羽口	『平安京左京九条三坊跡 京都駅南口 地区第一種市街地再開発事業に伴 う埋蔵文化財調査概報』昭和55年 度(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981

調査区東半の五町については、大治二年(1127)、前述した権中納言の藤原顕隆が邸宅内に「八条堂」を建立し、丈六の五大尊を安置している。同年、鳥羽上皇が顕隆の子顕能の「八条町尻第」に御幸しているが、これらは同じ邸宅を指すと考えられている。平治年間(1159～1160)、この邸宅は美福門院得子とその御所として受け継ぎ、得子を准母とした二条天皇の仮皇居ともなる。治承五年(1181)、五町では権大納言の平頼盛(平清盛の異母弟)が美福門院御所の跡地を相続した八条女院に請うて「八条室町亭」もしくは「池殿」と呼ばれた邸宅を新造した(『拾芥抄』、『吉記』)。頼盛亡き後の建久五年(1194)に火災の記事があるが、まもなく再建されたようである(『玉葉』)。その後、『玉葉』建暦元年(1211)五月十日条には「八条院春花門院御此所云々」とあり、順徳天皇が方違のため「八条院殿」に移御していたことが記されている。

参考文献

横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店、1994年収録。

山田邦和「左京八条」同上収録。

『京都市の地名』平凡社、1979年の該当箇所。

中村研「八条院町の成立と展開」『京都「町」の研究』法政大学出版局、1975年収録。

川嶋将生「東寺領八条院町の構造と生活」『中世京都文化の周縁』思文閣出版、1992年収録。

隴谷寿「平安京左京八条三坊周辺の様相」『平安貴族と邸第』吉川弘文館、2000年収録。

3. 遺 構

今回の調査で検出した遺構総数は 1596 基である。本書では、これらのうち主要な遺構と土層について掲載する。遺構の種類は建物、柱列、柱穴、柵、地業、泉、池、路面、溝、井戸、集石、土坑、Pit、落込などがある。なお、町尻小路は本来 1 条の条坊路として報告すべきであるが、2・3 区の 2 調査にわたり検出したため、各調査区ごとに報告している。

検出遺構の時代別の数量的傾向としては、数量的に鎌倉時代の遺構が多数を占める。左京八条三坊四・五町の歴史を解明するうえで注目される遺構の種類としては、建物・地業・泉・池がある。

(1) 1 区の遺構

1) 基本層序 (図版 9、図 5)

1 区の基本層序は、堆積土層が概して水平堆積を示しており、現地表から盛土・砂礫層・第 1 ～ 4 層・基盤層である砂礫層が堆積する。まず、現地表から約 2.5 m までは鉄道敷設に伴う盛土層・砂礫層が堆積し、汽車土瓶などが多量に包含される。砂礫層下は、近代の耕作土層となる。近代の耕作土層下には第 1 層が堆積しており、この第 1 層上面を第 1 面として調査を開始した。第 1 層から第 4 層は、断続的ではあるが 1 区の全域に分布し、ほぼ水平堆積を示すが、Y=-22,120 で検出した南北方向を示す近代以降の溝を境に約 0.15 m の段差があり、東側が高く西側が低い。第 1 層は西側では暗オリーブ褐色砂泥、東側では黒褐色砂泥が主に堆積し、径 0.2 ～ 3 cm の礫・炭

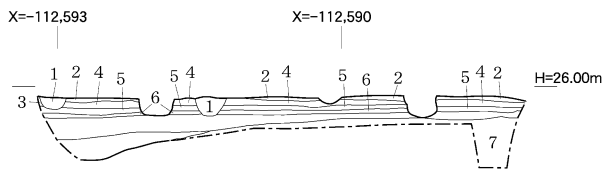
表 2 遺構概要表

時 代	1 区	2 区	3 区	4 区
平安時代	建物146*・160*・300、 溝416*・471、 土坑137*・179～181・ 187・290・393*、 湿地189	建物 1、 柱列 2・3、 池160-2*、 路面150-2*、 溝190 (東側溝)、 落込361*	泉443*、 井戸188・235、 集石445、 土坑448*	井戸167*
鎌倉時代	柱列 1～5・6*・7、 井戸109*・252*、 土坑52*・76*・86*・ 100*・101*・102*・ 104・108*・136*・ 145*・153*・226・ 269*・270・271*・ 333*・367*・400*・ 401・440・463	柱列 4・5、 泉100*、 池160-1*、 井戸55*・199*・200*・ 304、 溝159 (東側溝)*、 土坑132*、 石敷180*	建物99・161*、 泉241*、 路面227-2*、 溝63 (西側溝)*、 井戸89*・93・196*、 土坑105*・324*・419	柵 1、 地業106、 溝80・201・212、 土坑36・72・74*・ 84・99*・101*・ 120*・122*・124*・ 133・154*・176*、 Pit53・92*・135 整地層100*・112*
室町時代		路面150-1*、 溝227*、 井戸316*・348*・356*、 土坑297*	建物70・131、 柱列83・114・168・ 177、 柱穴303、 路面227-1、 井戸451、 土坑58*・122・162*・ 163・173*・296*・ 459*	土坑35*
江戸時代	耕作溝群、区画溝	耕作溝群、区画溝56、 池209	耕作溝群、区画溝	溝 1～9

(*印は遺物掲載遺構)

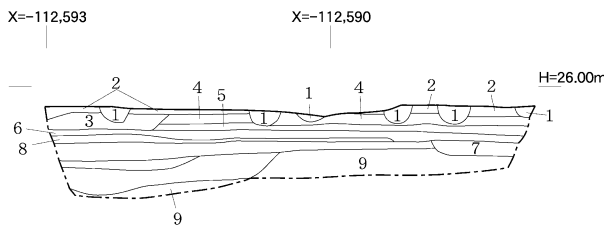
を含み、耕作土層と考えられる。先の段差は耕作地境に従った段差であろう。第1層上面で室町時代から江戸時代にかけての耕作に伴う溝を多数検出した。第2層は西側ではオリーブ褐色砂泥、東側では暗褐色砂泥が主に堆積し、径0.2～2cmの礫を含む。整地土層と考えられる。第3層は西側では灰黄褐色砂泥、東側では暗灰黄色粗砂および、にぶい黄褐色微砂が主に堆積し、径0.2～5cmの礫・炭を含み、東半の第3層は粗砂・細砂が多く含まれる。第2層ならびに第3層上面では鎌倉時代に属する柱列・井戸・土坑などを多数検出した。第2層上面を第2-1面、第3層上面を第2-2面とした。第4層は西側では暗灰黄褐色砂泥、東側では暗灰黄色粗砂が主に堆積し、径0.2～4cmの礫・炭を含む。整地土層と考えられる。第4層も第3層同様、東側にいくにしたがつて粗砂・細砂が多く含まれる。また、後述する建物146西側には第4層上面に建物外縁に対する化粧土層と考えられる土層が堆積しており、建物160では建物構築時と考えられる整地土層が堆積している。第4層下は、当遺跡の基盤層となる自然堆積土層の粗砂・細砂を含む砂礫層となる。この砂礫層上面に調査区西側から東端にかけて湿地堆積土層（湿地189）が分布する。湿地堆積土層はY=-22,140付近で肩口を検出しており、概して西側は浅く、東ならびに南側に向って深く

Y=-22,128セクション西壁



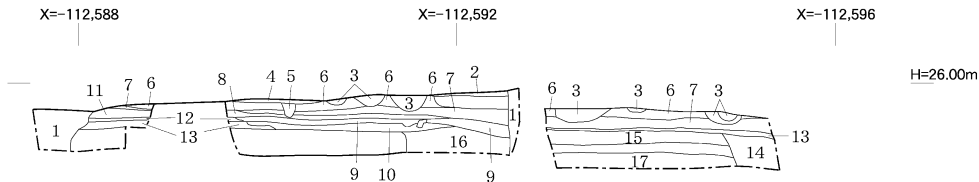
- 1 φ0.2～0.5cm礫・炭含（耕作溝）
 - 2 5Y2/2 オリーブ黒色砂泥、φ0.2～0.5cm礫含（第1層）
 - 3 2.5Y6/2 灰黄色泥砂、φ0.2～7cm礫含（第1層）
 - 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ0.2～3cm礫・炭含（第2層）
 - 5 5Y4/2 オリーブ黒色砂泥、φ0.2～5cm礫含（第3層）
 - 6 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂、φ0.2～4cm礫・炭含（第4層）
 - 7 5Y3/1 オリーブ黒色砂礫、φ0.2～12cm礫多量含（基盤層）
- 2.5Y3/2 黒褐色砂泥～5Y3/2 オリーブ黒色砂泥、φ0.2～5cm礫・炭含（湿地189）

Y=-22,108セクション西壁



- 1 φ0.2～4cm礫・炭含（耕作溝）
 - 2 2.5Y6/2 灰黄色泥砂、φ0.2～7cm礫含（第1層）
 - 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ0.2～4cm礫・炭含
 - 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ0.2～3cm礫・炭含（第2層）
 - 5 5Y4/2 オリーブ黒色砂泥、φ0.2～5cm礫含（第3層）
 - 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂、φ0.2～4cm礫・炭含（溝147）
 - 7 2.5Y3/3 暗灰黄色粗砂、φ0.2～15cm礫・炭わずか含（土坑179）
 - 8 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂、φ0.2～4cm礫・炭含（第4層）
 - 9 5Y3/1 暗灰黄色砂礫、φ0.2～8cm礫（基盤層）
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト～2.5Y3/1 黒褐色シルト φ0.2～8cm礫わずか含（湿地189）

調査区東壁



- 1 攪乱
 - 2 盛土
 - 3 φ0.2～2cm礫・炭わずか含（耕作溝）
 - 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ0.2～3cm礫わずか・炭含（第1層）
 - 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ0.2～1cm礫・炭含（耕作溝）
 - 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ0.2～2cm礫含（第2層）
 - 7 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂、φ0.2～5cm礫わずか含（第3層）
 - 8 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂、φ0.2～3cm礫わずか・炭含（第3層）
 - 9 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ0.2～5cm礫・炭含（解体後整地土）
 - 10 2.5Y3/2 黒褐色粗砂、φ0.2～3cm礫わずか・炭含（雨落溝解体後埋土）
 - 11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂、φ0.2～7cm礫含（地業）
 - 12 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ0.2～2cm礫・炭含（建物整地）
 - 13 5Y4/2 灰オリーブ色粗砂（第4層）
 - 14 2.5Y5/1 黄灰色砂礫、瓦含（土坑290）
 - 15 2.5Y5/2 暗灰黄色砂（第4層）
 - 16 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫、φ0.2～7cm（遺構）
 - 17 2.5Y5/1 黄灰色砂礫、φ0.2～7cm、細砂含（洪水堆積、基盤層）
- 2.5Y3/1 黒褐色シルト、φ0.2～5cm礫わずか・炭含（湿地189）

図5 1区 調査区南北断面図（1：80）

なる。平安時代前期から後期に属する遺物が出土しており、五町に開発が及ぶ直前まで湿地状態であったことを示す。第4層上面ならびに自然堆積層上面を第3面として調査した。

2) 遺構の概要

1区は平安京左京八条三坊五町内の東半に位置し、四行八門では西二・三・四行北五・六門に該当する。遺構は平安時代から江戸時代に属するものを486基検出した。第3面上面で検出した遺構には、湿地、建物、土坑、溝などがある。第2面上面で検出した遺構には、建物、柱穴、井戸、土坑、溝などがある。第1面上面で検出した遺構には、耕作に伴う溝などがある。次に、主要な遺構について概要を示す。

3) 平安時代の遺構 (図版2・3・67・68)

平安時代に属する遺構には、建物、溝、土坑、湿地状遺構などがある。

湿地 189 (図版9、図5) 1区第3面の西部から東端にかけて検出した湿地状堆積を示す遺構で、主に5町東半域に広がる遺構である。北および南側へはさらに調査区外へ広がる。Y=22,124付近で立ち上がる。堆積土層は、東端に向って順次深くなる。西側では厚さ0.05～0.2m、東側では最も厚く堆積する箇所では0.43mである。2層に分かれ、上層が黒褐色シルト層で粘質があり炭を含む。下層は黒褐色シルト層で細砂を含む。東側ではその中間に径0.2～6cmの礫を多く包含する黒褐色シルト層が厚さ約0.1m堆積する。遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、木製品などが出土した。平安時代後期前半(11世紀末～12世紀前葉)にかけての土器類が含まれ、埋没年代は土師器皿の形態から12世紀前葉に属すると考えている。

土坑 179～181 (図6) 1区第3面の東部で検出した土坑群である。

土坑 179は東肩口が土坑 180に接して検出した。北は調査区外へさらに広がる。平面形は遺存する箇所では楕円状を呈する。検出面での現存規模は、東西1.05m、南北0.9m、深さ0.27mある。土坑内には径20～25cmの河原石が埋め込まれる。

土坑 180は平面形が南北に長い楕円形を呈し、北は調査区外へさらに広がる。検出面での現存規模は、東西1.2m、南北2.0m、深さ0.17mある。土坑内には径12～27cmの河原石がやや密に埋め込まれる。

土坑 181は土坑 180の南東方向にあり、平面形は南北に長い歪な楕円形を呈する。検出面での規模は、南北1.36m、東西0.66m、深さ0.22mある。土坑内には径13～17cmの河原石や割り石が埋め込まれる。これらの土坑は、次に示す建物 146の周囲に広がる整地土層を除去した時点で検出した。また、河原石や割り石以外には出土していないことから、建物建設に伴い廃材を投棄した土坑の可能性が高い。平安時代後期の土坑群である。

土坑 187(図6) 1区第3面の中央部で検出した主軸方向が北北西から南南東を示す石列を伴った土坑である。北はさらに調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、長さ1.5m、幅約0.5m、深さ約0.25mあり、底面に径15～40cmの河原石を据える。河原石の上面はほぼ平坦である。

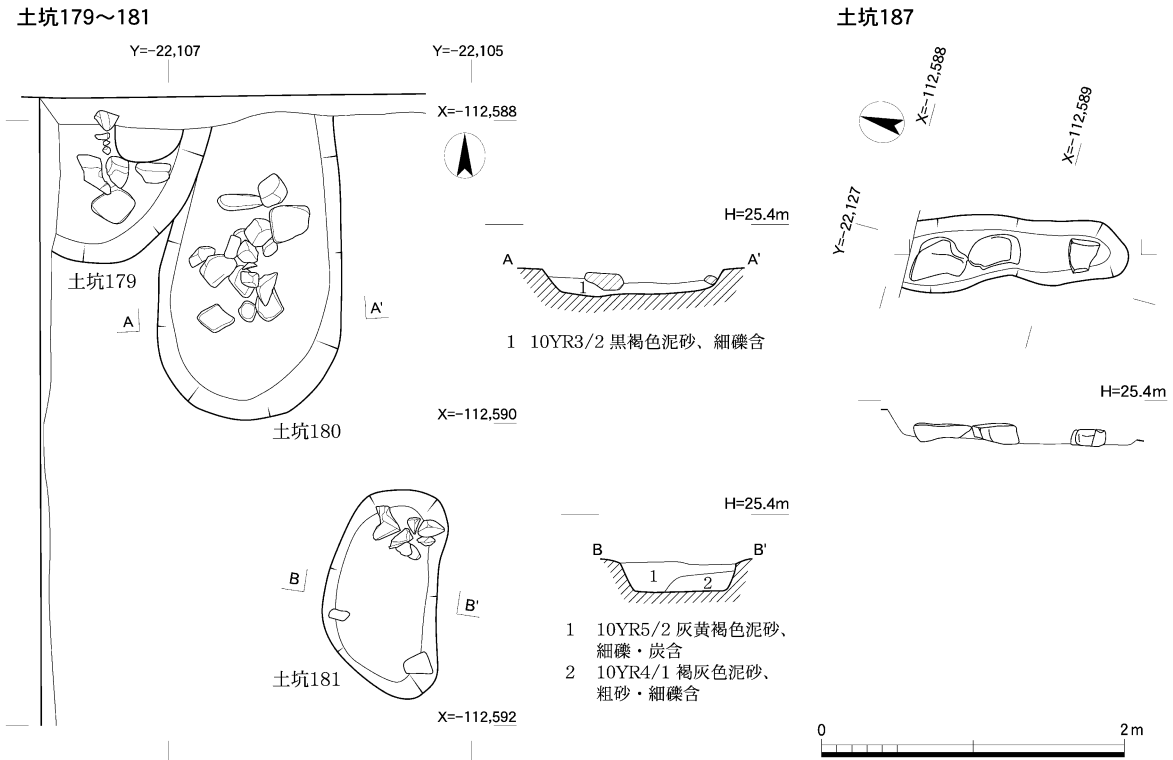


図6 1区 土坑179～181・187実測図(1:50)

土坑290 1区第3面の南東端で検出した土坑である。東・南肩口は攪乱により削平を受ける。検出面での現存規模は、東西約2.4m、南北約0.9m、深さ約0.5mある。埋土は粗砂を多量に包含するオリブ黒色ないし灰色シルト層で、平安時代の瓦が出土している。

土坑137(図版14) 1区第3面の東部で検出した土坑である。掘形の平面形は方形を呈し、検出面での規模は、一辺約1.5m、深さ0.55mある。埋土中に平安時代後期から鎌倉時代初頭(12世紀後期～13世紀初頭)にかけての土師器を多量に包含している。

建物146(巻頭図版2、図版10・11・69) 1区第3面の東半で検出した雨落溝を伴う建物である。建物の南端部を検出したにとどまり、大半は調査区外の北側へ広がる。現存規模は東西13.1m、南北4.2mある。南縁部の雨落溝や礎石などは後世の削平を受けているが、遺存状態は比較的良好である。建物の周囲には雨落溝を巡らし、身舎相当箇所には礫を盛り上げた地業がある。地業の縁に沿う箇所や雨落溝寄りには複数の礎石が据え付けられる。建物146は、後述する雨落溝の規模や構造などから、西側が正面となる建物を想定している。また、五町域における建物146の位置は、南縁では張り出し箇所を除く雨落溝が北五・六門界に、西縁雨落溝が西三行の東西中心にそれぞれ相当する。主軸方向はほぼ座標北を示す。

雨落溝は建物の西縁から南縁および東縁で検出した。いずれも平たい河原石を上面に用いて縁石ならびに化粧石とする。西縁雨落溝は、両縁石および西側に化粧石を伴い、東側縁石では8石、西側縁石では4石、化粧石は7石をそれぞれ検出した。縁石間の内法は0.5m、西側縁石から化粧石外縁間は0.5mある。南縁雨落溝は、北側縁石では7石(西端の1石は西縁雨落溝縁石と重複)、南側縁石では5石検出した。縁石間の内法は0.35mある。南縁雨落溝の東半は南に張り出し、平

面形は南西隅で鉤形に折れ曲がる形態を呈する。西縁雨落溝南端からの距離は、内法で約 2.7 m 東へ延長し、南折して 1.2 m 延長し、さらに東折する。南張り出し箇所雨落溝は、西縁西側縁石（北端の 1 石は南縁雨落溝縁石と重複）および東側縁石とも 4 石検出した。縁石間の内法は 0.35 m である。南縁の北側縁石（西端の 1 石は西縁雨落溝縁石と重複）および南側縁石は 2 石検出した。縁石間の内法は 0.2 m である。東縁雨落溝は、東側縁石では 8 石、西側縁石では北側拡張箇所検出したものを含めて 12 石検出した。縁石間の内法は 0.4 m である。以上のように、西縁雨落溝は内法規模も広く化粧石を伴うことから、建物 146 の正面を西側とした根拠である。

西縁雨落溝東肩口の東、南縁雨落溝北肩口の北 1.1 m で据付穴 195 を検出した。平面形は円形を呈し、現存規模は径 0.4 m、深さ 0.06 m である。底面に径 8 ～ 14 cm の礫を詰めており、礎石据付穴の可能性もある。また据付穴 195 の東 2.4 m で土坑 197 を検出した。平面形は歪な楕円形を呈し、現存規模は長さ 1.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.06 m である。底面に径 6 ～ 24 cm の礫をまばらに詰める。このうち径 24 cm の礫の東 1.9 m で据付穴 198 を検出した。掘形は不明瞭であるが、平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は径 0.4 m、深さ 0.06 m である。底面に径 21 cm の礎石と考えられる平たい河原石を据える。また、据付穴 195 の南 0.7 m、南縁雨落溝の北肩口付近で径 23 cm の礎石と考えられる平たい河原石を検出した。同様に据付穴 195 の東 9.8 m、東縁雨落溝の西肩口付近では南北方向に並ぶ 2 基の礎石を検出した。礎石は平たい河原石で径 20 ～ 25 cm である。縁東石の可能性もある。

他には、据付穴 195 の南 2.4 m では据付穴 196 を検出した。平面形は円形を呈し、現存規模は径 0.4 m、深さ 0.06 m である。底面に径 8 ～ 16 cm の礫を詰める。さらに据付穴 196 の南 1.1 m では東西方向の礎石列を検出した。礎石列は 3 基からなり、径 16 ～ 27 cm の平たい河原石を据える。礎石間の距離は約 3.1 m である。ただし、据付穴 196 や礎石列は雨落溝の外側に位置しており、建物 146 との関連は不明である。

地業は、東西約 6.3 m、南北約 2.6 m の範囲で検出したが、東側は土坑 145 によって削平を受けた可能性がある。最も厚い箇所厚さ 0.24 m である。作業単位などは未検出であるが、概して外縁には大径のものを、内側には砂礫をそのまま積み上げた状況を呈する。礫は径 15 ～ 25 cm のやや大きいものを用いる箇所が 2 箇所ほどあるが、大半は径 2 ～ 10 cm のものである。地業の礫を除去した下面には炭層が堆積しており、この土層に密着した状態で平安時代中期後葉から平安時代後期後半（11 世紀後葉～ 12 世紀後葉）の土師器皿が出土した。

建物 146 は地業の位置や雨落溝などの配置から南北棟の建物であり、南北端は切り妻の建物であると考えている。また、西縁雨落溝に化粧石を伴うこと、溝の内法幅も雨落溝の中で最も広いことなどから、西を正面とした建物であると想定した。建物の規模は、地業範囲を考慮し、母屋は梁行 2.5 m で 2 間、母屋の南西隅を示す遺構は土坑 197 とした。土坑 197 - 据付穴 195 間は西庇で柱間 2.4 m、母屋東端想定線から東に位置する礎石列間の柱間 2.4 m を東庇と捉えた。また、軒の出は礎石列から東雨落溝芯間は長さ約 0.6 m、据付穴 195 - 西雨落溝芯間は約 1.2 m である。切妻の南には庇が付くと考えられ、軒の出を含め南雨落溝までの間は約 2.4 m である。

なお、建物 146 の西側には当該期の遺構はほとんどなく、空間が広がっていたのであろう。

建物 160 (図版 12・70) 1 区第 3 面の東端で検出した雨落溝を伴う建物である。建物の南西隅部を検出したにとどまり、大半は調査区外の北側・東側へ広がる。検出規模は東西 5.5 m、南北 3.8 m あり。建物および雨落溝は後世の削平を受け、遺存状態は悪い。建物の身舎相当箇所には礫を盛り上げた地業がある。地業の縁に沿って礎石据付穴がある。また、礎石据付穴に直交して雨落溝寄りに縁束石と考えられる礎石が据えられる。建物 146 東縁雨落溝と建物 160 西縁雨落溝心々間の距離は約 16.6 m、西縁雨落溝西端と室町小路西築地心想定線間は約 15.7 m あり。建物 160 は、後述する雨落溝の規模などから、西側が正面となる南北棟建物を想定しているが、室町小路との位置を考慮すると、室町小路と建物 160 間は狭小であるが、東西棟建物も含めて考えなければならぬ。また、五町域における建物 160 の位置は、南縁雨落溝が北五・六門界に、身舎西側桁行はほぼ西四行の東西中心に位置する。主軸方向はほぼ座標北を示す。

雨落溝は建物西縁・南縁で検出した。いずれも平たい河原石を上面に用いて縁石ならびに化粧を施す。西縁雨落溝は、東側縁石がすべて抜き取られ、西側縁石は拡張箇所を含めて南北方向に 4 石が遺存していた。西縁雨落溝の復元内法は約 0.4 m と考えられる。西側縁石のさらに外側に化粧石と考えられる石列が拡張箇所を含めて 6 石遺存しており、縁石と化粧石間にはやや小振りの河原石を詰め化粧石とする。西側縁石から化粧石間の外縁幅は約 0.5 m あり。河原石は径 30 cm 前後のものを使用しており、概して長軸を南北方向に据える。西縁雨落溝の底面に密着した状態で土師器皿が出土した。南縁雨落溝は、大半が後世の削平を受け、北側縁石 2 石、南側縁石 2 石を検出したにとどまる。縁石間の内法は約 0.38 m あり。縁石は径 38 ～ 55 cm のものを使用しており、長軸を東西方向に据える。

地業は、東西約 3.0 m、南北約 1.6 m の範囲で検出した。礫は径 15 ～ 25 cm のやや大きいものを用いる箇所が 2 箇所ほどあるが、大半は径 2 ～ 10 cm のものである。地業の礫を除去した下面には炭層が堆積しており、この土層に密着した状態で土師器皿が出土した。

礎石据付穴は、地業の南西隅と南東側で各 1 箇所検出した。南西隅の据付穴 191 は、掘形の平面形が円形を呈し、検出面での規模は、径約 0.6 m、深さ約 0.2 m あり。径 10 ～ 30 cm の河原石を詰める。南東側の据付穴 192 は、掘形が不明瞭で、断面観察でおおよその規模を確認した。平面形は円形と考えられ、掘形内には径 15 ～ 25 cm の河原石を詰める。礎石間の距離は、後述する縁束石の検出距離から約 2.3 m ありと考えており、母屋梁行の 1 間の規模を示すと想定している。

縁束石と考えられる礎石は、雨落溝の縁に沿って南西隅部で礎石 1、その東延長で礎石 2 および据付穴 193、同じく北延長で据付穴 190 の計 4 基を検出した。礎石は河原石を用いており、径 25 ～ 35 cm あり。概して長軸を延長方向に合わせる。礎石間の距離は、礎石 1 から据付穴 190 は 1.1 m、礎石 1 から礎石 2 は 1.15 m、礎石 2 から据付穴 193 は 2.3 m あり。縁束石から各雨落溝中心までの距離は、西縁・南縁とも約 0.45 m あり、この距離が軒の出となろう。遺構の時期は出土した土師器の形態から平安時代後期後半 (12 世紀後葉) である。

建物 300 (図版 12) 1 区第 3 面の東端で検出した建物に伴う雨落溝と考えられる南北方向を示

す石列である。河原石を3石検出した。北は調査区外へ延長し、東・南は削平を受ける。西縁は雨落溝の西側縁石と考えられる。南北方向に溝を掘り、西肩口に沿って径30cm前後の上面が平坦な河原石を南北方向に並べる。西側縁石東端は建物160西縁雨落溝の西側縁石東端から約5.5m東に、北端の河原石は建物160南縁雨落溝の南側縁石北端から約2.8m南に、西縁雨落溝と室町小路西築地想定線間は約10.6mある。

溝416(図7) 1区第3面の南東部で検出した東西方向の溝である。建物146の南に位置し、建物146と並行する。建物146南縁雨落溝心から溝416の溝心間は約4.8

mある。東西は後世の遺構によって削平を受けるが、延長はみられない。平安時代後期前半(11世紀末～12世紀初頭)の土師器が出土した。

溝471(図7) 1区第3面の西端で検出した南北方向の溝である。北は1区中央で途切れ、南は攪乱によって削平を受ける。溝心は西三・四行界から西約9mに位置する。検出面での現存規模は、幅0.4～0.5m、長さ約4m、深さ約0.16mある。平安時代後期の遺構である。

土坑393 1区第2-2面の中央東寄りで検出したやや大規模な土坑である。北肩口は調査区外へ広がる。平面形は北西から南東方向を示す楕円形を呈する。検出面での現存規模は、東西1.5m、南北2.0m、深さ約1.1mある。埋土は粗砂を含む暗灰黄色シルト、黒褐色シルトが堆積する。平安時代後期(11世紀末～12世紀前葉)に属すると考えている。

4) 鎌倉時代の遺構(図版4～7・71・72)

鎌倉時代の遺構には井戸、柱列、土坑、柱穴などがある。

柱列1(図版13・73) 1区第2-2面の東部で検出した東西方向の柱列である。柱穴355・274・286・289の4基の柱穴からなる。同規模ないし柱筋の通る柱穴は、これら以外に未検出であるが、平面形や深さ、礎板を据えるなど共通した形状を呈することから、柱列とした。主軸方向は座標東を示す。柱間は柱穴355から柱穴274間は約3.6m、柱穴274から柱穴286間は約6.1m、柱穴286から柱穴289間は約3.6mあり、柱間は広い。柱穴は平面形がやや歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.74～0.85m、深さ0.5～0.65mある。埋土は黒褐色砂泥から黄灰色砂泥が堆積し、柱穴355や柱穴274には焼土・壁土・炭などを包含している。また、各底面には礎板が据えられており、柱穴355の礎板は一辺24cm、厚さ5cm、柱穴274の礎板は長さ30cm、幅25cm、厚さ3cm、柱穴286の礎板は長さ28cm、幅25cm、厚さ2cmある。埋土は、黒褐色砂泥や黄灰色砂泥、オリーブ褐色砂泥などである。土師器・須恵器および瓦などが出土したが、土器は細片のため図示していない。土師器皿の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀前葉)に属すると考えられる。

溝471 H=25.5m

W 1 E

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト

溝416 H=25.5m

1 2 3 S N

1 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂、0.5～2cm礫含
2 2.5Y3/2 黒褐色粗砂、土器・瓦小片含
3 2.5Y4/2 黄灰色粗砂、シルト含、粘質

0 1m

図7 1区 溝416・471断面図(1:

柱列2 (図版13) 1区第2-2面の西部で検出した。柱穴173・113・161・175・166・95の6基の柱穴からなる東西方向の柱列で、柱間は約1.65 mが多い。主軸方向は座標東を示す。柱穴は平面形が概して円形を呈し、検出面での規模は、径0.29～0.44 m、深さ0.1～0.5 mある。埋土は黒褐色からオリーブ黒褐色の砂泥が堆積する。柱穴166からは土師器が出土したが、細片のため図示していない。土師器皿の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀前葉)に属すると考えられる。

柱列3 (図版13) 1区第2-2面の西部、柱列3の南約1.2 mで検出した。柱穴174・163・176・164・96の5基の柱穴からなる東西方向の柱列で、柱間は約1.8 mが多い。主軸方向は座標東を示す。柱穴は平面形が円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.21～0.40 m、深さ0.1～0.16 mある。埋土は黒褐色からオリーブ黒色の砂泥が堆積する。柱穴からは土師器・瓦器・瓦などが出土したが、細片のため図示していない。土師器皿の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀前葉)に属すると考えられる。

柱列4 (図版13) 1区第2-2面の東部で検出した。柱穴148・149・171の3基の柱穴からなる東西方向の柱列で、柱間は約2.4 mの等間である。主軸方向は座標東から約4度北へ振れる。柱穴は平面形が円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.3～0.5 m、深さ0.15～0.2 mある。柱穴149には多量の焼土を包含する黒褐色砂泥が堆積する。なお、柱穴149の南側に柱筋が通る柱穴91がある。柱穴149・91の柱間は2.25 mあり、南側に広がる建物の北側柱筋の可能性もある。柱穴からは土師器・須恵器および瓦などが出土したが、細片のため図示していない。土師器皿の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀初頭)に属すると考えられる。

柱列5 (図8) 1区第2-2面の東部で検出した東西方向の柱列である。柱穴141～143の3基の柱穴からなる。主軸方向は座標東に対し南へ約1度振れる。柱間は約2.4 mの等間である。柱穴は平面形が円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.35～0.6 m、深さ0.1～0.3 mある。埋土は主として黒褐色砂泥が堆積し、柱穴141～143とも多量の焼土層や炭を包含する。柱穴からは土師器・須恵器および瓦などが出土したが、細片のため図示していない。土師器皿の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀前葉)に属すると考えられる。

柱列6 (図8) 1区第2-1面の東部で検出した東西方向の柱列である。柱穴60・65・68の3基の柱穴からなる。主軸方向は座標東に対し南へ1度振れる。柱穴65は西四行のほぼ東西中心に位置する。柱間は約2.2 mの等間である。柱穴は平面形が円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.35～0.48 m、深さ0.2～0.3 mある。埋土は黒褐色泥砂や暗オリーブ褐色泥砂が堆積する。なお、柱列6の南側には柱筋が通る柱穴は未検出である。柱穴からは土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器などが出土しており、柱穴65からは輸入陶磁器黒搔き落し壺が出土した。細片のため大半は図示していないが、土師器皿の形態から鎌倉時代前期(13世紀前葉)に属すると考えられる。

柱列7 (図8) 1区第2-2面の西部で検出した南北方向の柱列である。柱穴451～453の3基の柱穴からなる。柱穴452の東半、柱穴453の南東半は攪乱によって削平を受ける。主軸方向

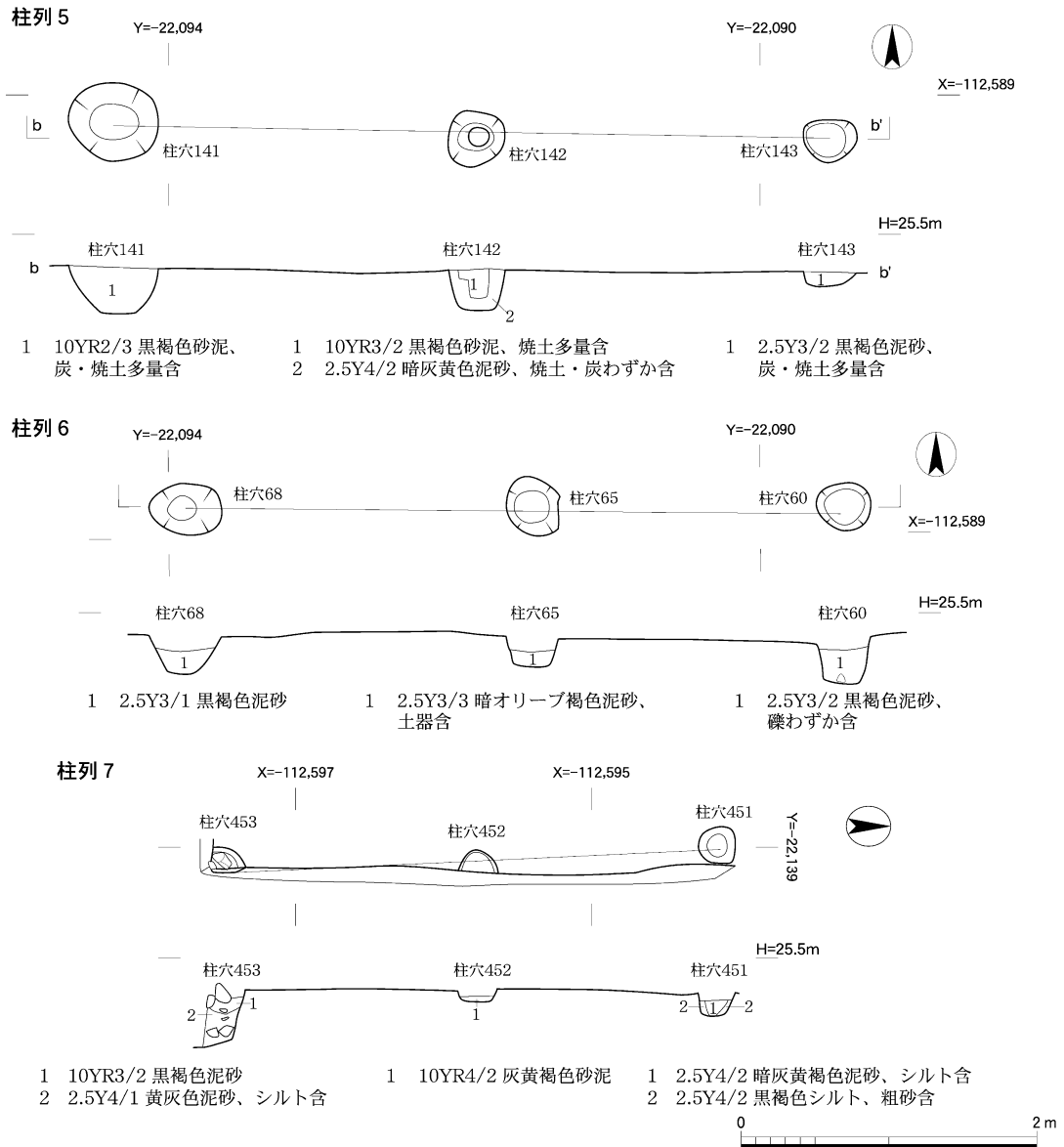


図8 1区 柱列5～7実測図(1:50)

は座標北に対し西へ約3度振れる。柱列の北および東西では柱筋の通る柱穴は未検出である。柱間は1.65m等間である。柱穴の平面形は概して円形を呈し、検出面での現存規模は、径0.25～0.27m、深さ0.09～0.38mある。柱穴453は最も深く、径8～13cmの礫が密に詰まる。埋土は暗灰黄色泥砂や黒褐色泥砂層が堆積する。柱穴からは土師器などが出土したが、細片のため図示していない。土師器の形態から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀前葉)に属すると考えられる。

土坑463(図版14) 1区第2-2面の西部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈する。検出面での規模は、長径0.77m、短径0.6m、深さ0.06mある。埋土は暗灰黄色砂泥が堆積する。検出面から鎌倉時代前期の遺構と考えている。

土坑270 1区第2-2面の東半南端、土坑226の東側で検出した土坑である。南半は攪乱によって削平を受ける。平面形は東西に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、長径1.8m、深さ0.54mある。埋土はオリーブ黒色シルトが堆積し、焼土ならびに赤変した壁土(図版120)が多量に

含まれる。鎌倉時代前期の遺構と考えている。

土坑 226 (図版 15) 1区第2-2面の東半南端で検出した土坑である。南半は攪乱によって削平を受ける。平面形は東西に長い楕円形を呈する。検出面での規模は、東西約 1.1 m、深さ 0.3 mある。埋土は黒褐色泥砂が堆積しており、径 1~17 cmの礫が多量に含まれる。鎌倉時代前期の遺構と考えている。

井戸 252 (図版 73、図 9) 1区第2-2面の南東端で検出した井戸である。掘形の平面形は西辺がやや膨らんだ歪な方形を呈する。掘形中央底面に曲物を利用した井戸側を据える。底面は基盤層の暗オリーブ色砂礫に達する。検出面での規模は、掘形は一辺 1.0~1.2 m、深さ 0.72 mある。井戸側は曲物を上下2段に積み上げて構築するが、腐食が進む。上段の曲物は上部が削平を受け、高さ約 0.1 m遺存していた。下段の曲物はほぼ完存しており、径約 0.4 m、高さ約 0.5 mある。井戸は土器および礫を使用し埋め戻される。底面から約 0.2 mまでの間には羽釜を、その上部には東播系須恵器甕の 25~30 cm大の破片を水平に重ね置きしており、井戸廃棄時に井戸側内を塞いだ状況が窺われる。さらに土器間および上部まで径 5~15 cmの礫を多量に埋め込む。井戸からは土師器・瓦器・瓦などが出土した。鎌倉時代初頭 (13世紀初頭) に属すると考えている。

土坑 401 (図版 14・73) 1区第2-2面の西端で検出した土坑である。平面形は歪な円形を呈し、検出面での規模は、径約 1.8 m、深さ 0.55 mある。土坑内には径 3~15 cmの礫を密に詰めるが、礫間に空隙はない。土師器などが出土した。鎌倉時代初頭 (13世紀初頭) に属すると考えている。

土坑 440 (図版 14・73) 1区第2-2面の中央西寄りで検出した土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈する。検出面での規模は、南北 1.35 m、東西 0.6 m、深さ 0.18 mある。土坑内には径 4~18 cm大の礫が密に詰まる。埋土は粗砂を含む暗灰黄色砂泥や暗褐色砂泥が堆積する。

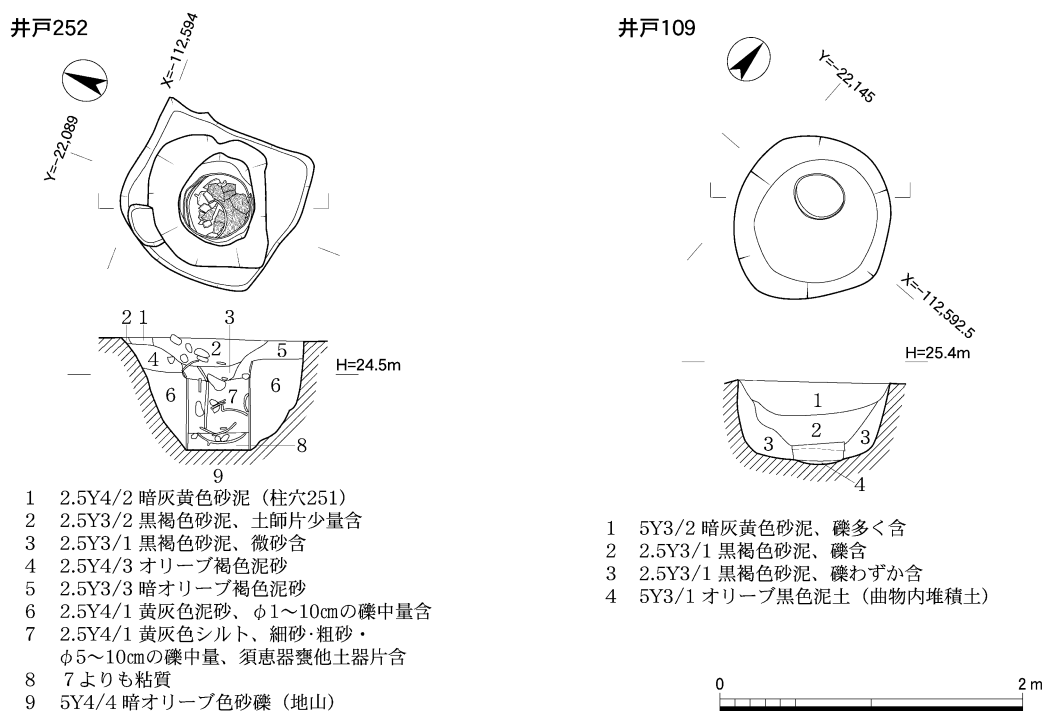


図9 1区 井戸 109・252 実測図 (1:50)

鎌倉時代前期（13世紀前葉）の遺構と考えている。

土坑 400（図版 14・73） 1区第2-2面の西端、土坑 401 と東西方向に並ぶ状態で検出した土坑である。土坑 401 との心々間の距離は約 3.6 mある。平面形は歪な円形を呈し、中央東寄りには後世の遺構により削平を受ける。検出面での規模は、径約 1.6 m、深さ 0.46 mある。土坑内には径 4～13 cmの礫を密に詰めるが、礫間に空隙はない。土師器などが出土した。時期は鎌倉時代前期後半（13世紀中葉）である。

土坑 52（図版 15） 1区第2-1面の北東隅、北壁際で検出した土坑である。北は調査区外へ広がる。平面形は遺存する箇所では歪な楕円形を呈する。検出面での現存規模は、長径 1.15 m、深さ 0.15 mある。埋土は炭を含む黒褐色砂泥が堆積し、土師器を比較的多量に含む。鎌倉時代前期中頃から前期後半（13世紀前葉～中葉）の遺構であると考えている。

井戸 109（図 9） 1区第2-1面の西端で検出した井戸である。平面形は歪な円形を呈し、検出面での規模は、径 1.0～1.2 m、深さ 0.56 mある。井戸側は曲物を積み重ねる形態と考えられ、底面北西隅で井戸側の最下部と考えられる曲物を検出した。曲物は土圧で歪み腐食が進むが、径 0.32 m、高さ 0.12 m遺存する。井戸からは土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。土師器皿の形態から鎌倉時代後期前半（13世紀後葉）に属すると考えている。

土坑 100（図版 15） 1区第2-1面の西部で検出した土坑である。東は攪乱を受け、北は調査区外に広がる。平面形は遺存する箇所では楕円形を呈する。検出面での現存規模は、南北約 0.6 m、東西約 0.6 m、深さ約 0.06 mある。土師器の細片が出土した。土師器皿の形態から鎌倉時代前期後半（13世紀中葉～後葉）に属すると考えている。

土坑 101（図版 15） 1区第2-1面の西端、土坑 100 の東側で検出した土坑である。北西部は攪乱を受け、北は調査区外に広がる。検出面での現存規模は、南北約 0.7 m、東西約 1.7 m、深さ約 0.05 mある。土師器が多く出土しており、土坑 100 とほぼ同じ年代であると考えられる。

土坑 102（図版 15） 1区第2-1面の西端、土坑 100 の南側で検出した土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈する。検出面での規模は、南北 1.83 m、東西 0.67 m、深さ 0.09 mある。埋土は炭をわずかに含むオリーブ黒色砂泥が堆積し、土坑内からはほぼ完形に復元できる状態の鎌倉時代前期（13世紀前葉）の土師器皿・椀が出土しており、土器を一括して投棄した土坑である。

土坑 104（図版 14） 1区第2-1面の西端で検出した土坑である。南半は攪乱を受ける。平面形は歪な円形を呈し、検出面での規模は、径 1.6 m、深さ 0.43 mある。土坑内には径 3～10 cmの礫を密に詰めるが、礫間に空隙はない。土師器などが出土したが細片であり、図示できない。鎌倉時代前期（13世紀前葉）の遺構である

土坑 333（図版 15） 1区第2-1面の中央東寄りで検出した土坑である。北肩口は調査区外へ広がる。平面形は長楕円形を呈し、検出面での現存規模は、南北 3.3 m、東西 2.25 m、深さ 0.3 mある。土坑中央西寄りに径 8～56 cm大の礫が集中する箇所がある。礫は河原石のほか割石も含まれる。埋土は炭を含む黒褐色砂泥や褐色灰色砂泥などが堆積する。鎌倉時代前期後半から後期前半（13世紀中葉～後葉）の遺構と考えている。

土坑 76 (図版 15) 1 区第 2-1 面の東端で検出した土坑である。平面形はやや歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、長径 1.7 m、短径 1.25 m、深さ 0.5 m である。埋土は暗灰黄色砂泥や黒褐色粗砂などが堆積する。上層では南半に径 3～22 cm の礫が集中する。下層からは完形に復元できる土師器が比較的多数出土した。鎌倉時代後期後半 (14 世紀前葉) の遺構と考えている。

土坑 86 (図版 15) 1 区第 2-1 面の東部、北壁際で検出した土坑である。西肩口は攪乱を受け、北へはさらに広がる。平面形は歪な楕円形を呈すると考えられ、検出面での現存規模は、径 1.6 m、深さ 1.17 m である。埋土は黒灰色砂泥や黄灰色粗砂などが堆積し、上層ならびに中層から多量の土師器が出土した。また、各層とも炭を含む。鎌倉時代前期 (13 世紀前葉) に属すると考えている。

土坑 145 (図版 10) 1 区第 3 面の中央、建物 146 東半上面の北壁際で検出した土坑である。北へは調査区外へ延長する。調査区内では、北壁から南へ延長し、建物 146 地業南端で西折する。土師器・瓦器・瓦などが出土した。鎌倉時代前期 (13 世紀前葉) に属する。

土坑 271 1 区第 2-2 面の南東部で検出した土坑である。平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈する。検出面での現存規模は、長軸 1.15 m、深さ 0.2 m である。埋土は礫を比較的多く含む黒褐色砂泥が堆積する。鎌倉時代前期後半 (13 世紀前葉～中葉) に属すると考えている。

土坑 153 1 区第 2-2 面の東部で検出した土坑である。平面形は北西から南東方向の長楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸 0.83 m、短軸 0.29 m、深さ 0.19 m である。埋土は黒褐色砂泥、黄灰色シルトが堆積し、中層からは土師器が多量に出土した。鎌倉時代前期後半から後期前半 (13 世紀中葉～後葉) に属する。

土坑 269 (図版 15) 1 区第 2-2 面の東部南端、土坑 270 の東側に近接して検出した土坑である。南半は攪乱によって削平を受ける。平面形は東西に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸 1.1 m、深さ 0.25 m である。埋土は暗褐色砂泥、黒褐色砂泥が堆積する。鎌倉時代後期前半 (13 世紀後葉) と考えている。

土坑 367 1 区第 2-2 面の中央東寄りで検出したやや大規模な土坑である。北肩口は攪乱によって削平を受ける。平面形は楕円形を呈すると考えられ、検出面での現存規模は、東西 1.4 m、南北 2.0 m、深さ 0.95 m である。埋土は粗砂を含む暗灰黄色砂泥、黒褐色泥砂が堆積する。鎌倉時代前期後半から後期後半 (13 世紀中葉～14 世紀前葉) に属すると考えている。

5) 室町時代以降の遺構 (図版 8・75・76)

第 1 層上面で室町時代から江戸時代にかけての耕作に伴う溝を多数検出した。耕作溝は Y=-22,120 以東では主に東西方向に延長し、以西では南北方向に延長しており、この箇所には耕作境界があることを示している。東西方向の耕作溝の主軸方向は座標東に対して南へ約 2 度振れる。また、東西方向の耕作溝の主軸方向はほぼ座標北を示す。

(2) 2区の遺構

1) 基本層序 (図版 21 ~ 24)

調査区の現地表面は標高約 28.1 m で、ほぼ水平に近い状態である。盛土は厚さ 2.0 m 前後の構内造成土である。盛土以下の現地表下約 2.2 m に近世から近代の耕作土が厚さ約 0.2 m 堆積しており、この耕作土までを機械で除去した。以下、標高 25.2 ~ 25.4 m (現地表下約 2.4 m) に厚さ 0.1 ~ 0.2 m の中世末から近世の黒褐色砂泥の耕作土、標高 24.9 ~ 25.3 m に厚さ 0.1 ~ 0.2 m のにぶい黄褐色系の泥砂を主体とする中世の整地層が認められる。遺構の基盤層となる自然堆積層は径 0.5 ~ 15 cm 大の礫からなる褐灰色砂礫で、標高 24.9 ~ 25.3 m (現地表下 2.7 m) 以下に堆積する。

2) 遺構の概要

2区は平安京左京八条三坊五町内の南西部に位置し、四行八門では西一・二行北五・六門に該当する。調査では平安時代から江戸時代までの遺構 395 基を検出した。種類は町尻小路路面・東側溝、池、泉、井戸、溝、土坑、柱穴などであり、遺構時期は平安時代後期から鎌倉時代後期に属する遺構が中心である。調査面は室町時代末頃から江戸時代にかけての耕作土上面を第 1 面とした。全体的に南西下がりの緩い傾斜面を呈しており、江戸時代以降にも存続する新町通中央部の区画溝や耕作関連の溝群を検出した。中世の整地層上面の第 2 面では室町時代から鎌倉時代の遺構、自然堆積層上面の第 3 面では鎌倉時代から平安時代の遺構を検出した。以下、古い時期の遺構から順を追って報告する。

3) 平安時代の遺構 (図版 16・17・76)

落込 361 (図版 33・78) 2区第 3 面の中央部西側で、後述する石敷 180 を伴う整地土上層の灰黄褐色泥砂を排土した段階で検出した。掘形が不明瞭で落込として扱ったが、整地に伴う埋土の一部である可能性もある。検出規模は南北 3.3 m、東西 1.0 ~ 1.2 m。標高は 25.00 m である。平坦面に完形品を多数含む土師器皿が重なり密集した状態で出土している。遺構時期は平安時代後期 (11 世紀末 ~ 12 世紀後葉) に属する。

路面 150 2区第 3 面の西部で検出した。四町側の 3 区と五町側の本区にまたがって検出した町尻小路の路面である。遺構全体としては中央部が南北方向の水路状に窪んでおり、東西両端部に平坦な石敷路面が施されている。水路状部分の深さは最深部で 0.6 m ある。

本区では標高 25.00 ~ 25.20 m に西下がりの傾斜をもつ東端部の路面 (路面 150) を検出した。路面上には堅く突き固めた石敷が薄く施されており、検出規模は幅 2.1 ~ 2.6 m ある。遺物は水路状部分を含む路面上層 (路面 150-1) から土師器、瓦器、須恵器、白色土器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土し、路面最下層 (路面 150-2) からは土師器、瓦器、白色土器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが少量出土した。遺構時期は出土遺物から判断して、平安時代後期後半 (12 世紀後葉) に形成され、室町時代前期前半 (14 世紀後葉) まで存続したと推定できる。ただし、

路面最下層からは平安時代後期中頃（12世紀前葉）の遺物が混入して出土しており、遺構の成立時期がこの時期まで遡る可能性もある。

溝 190 2区第3面の西部で検出した。先述した路面 150-2 の東側で検出した南北方向の溝で、町尻小路東側溝と考えられる。南半部では溝 395 がこれに対応する。検出規模は溝 395 を含め長さ 10.5 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mある。条坊復元の位置関係については、町尻小路東築地心想定線の座標 $Y=-22,196.12$ に基づく東側溝の西肩部が $Y=-22,198.67$ であるのに対して、溝 190 の西肩部は $Y=-22,194.10$ 前後であり、想定線よりも 4.6 mほど東に位置することになる。遺物は土師器、瓦器などの小片が少量出土した。遺構時期は路面 150-2 に対応すると考えており、平安時代後期後半（12世紀後葉）に属する可能性がある。

池 160-2（図版 25・27～29・77） 2区第3面の東部で検出した。後述する鎌倉時代の池 160-1 の下層に位置するが、池の北岸を示す状況ではなく、北東から南西方向を示す浅い水路の底面に景石を据えて白砂化粧を施した遣水の状態を検出している。検出規模は東西幅約 11.0 m、南北長は北東から南西方向に約 13.0 m、標高は北壁側で検出面 25.18 m、底面（白砂上面）24.78 m、深さは約 0.4 mあり、汀線を標高 24.90 mとすると水深は最大 0.15 m程と想定される。

白砂は底面付近の標高 24.80 ～ 24.90 m以下に厚さ 2 ～ 6 cmで灰白色から褐灰色の砂が認められる。東西幅は北側 5.0 m、南側 1.0 mある。埋土は白砂直上に微粒子で均質な炭を主体とした黒色泥土が東西幅 0.5 ～ 3.0 m、厚さ 1 ～ 6 cmで薄く堆積しており、部分的に 3 ～ 4 mmあるいは 4 ～ 8 mm厚の単位で白砂と互層に堆積していることから、炭層および黒色泥土が埋積した後も流水が継続していたと判断できる。

景石 203・204（図 10～12）は底面の東寄りに位置し、水路方向に沿って石材の長軸部を「く」字状に屈曲させて配置している。検出時の景石の大きさは、203 が長軸 60 cm、短軸 27 cm、高さ 17 cm（白砂面から）、204 が長軸 66 cm、短軸 37 cm、高さ 18 cm（同）。石材の種類は 203 が黒色チャート、204 が赤色チャートである。景石の据付状況は、掘形が不明瞭であるが、白砂排

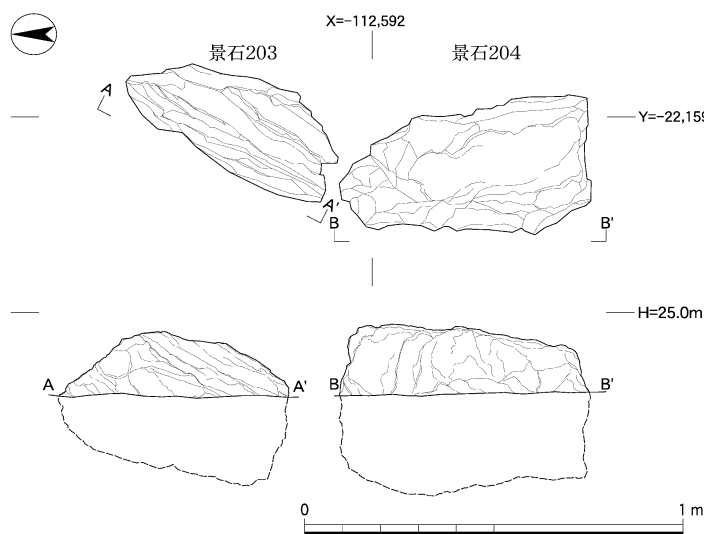


図 10 2区 池 160-2 景石 203・204 実測図（1：20）

土後の砂礫面では両景石の周囲に径 5 ～ 8 cm大の石でやや簡易な根固めを施し、流水によって根元の砂礫が浚われるのを防いだ細心の工夫や、景石 203 下部の北西側では径 10 ～ 15 cm大の石数個を根石状に据えた状態、景石の石材が縦方向に使用された設置状況などを確認した。完掘時の石材の規模は、203 が長軸 60 cm、短軸 36 cm、厚さ 27 cm、204 が長軸 66 cm、短軸 45 cm、厚さ 37 cmである。このよ



図 11 2区 景石 203・204 (西から)



図 12 2区 景石 204・土器出土状況 (南から)

うにやや扁平な石材を景石として縦置きに据えるため、短軸部分の半分以上を埋め込むことで安定感を確保して造作している。

景石 394 は景石 204 の南西方向 2.3 m の位置で検出した。検出時の大きさは長軸 78 cm、短軸 53 cm、高さ 18 cm (白砂面から) で、石質は礫岩である。石材の厚さは 42 cm で、景石 394 の西側に接して景石の抜き取り跡とみられる窪みが認められる。規模は北東から南西方向に長さ 1.5 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m あり、検出した 3 石の大きさを上回る景石が据えられていた可能性が高い。窪みの南東の肩部から斜面にかけて、景石 394 と同質の石材片が認められるが、景石 394 の破片でないことから、同様の礫岩が用いられていたと推測できる。

遺物は土師器、瓦が出土している。特徴的な出土状況としては、完形の土師器皿が白砂面では景石 203 北側で伏せた状態で 2 点、景石 204 西側で 1 点、白砂排土後の砂礫面では景石 204 の南東側に接して正位置の状態で 1 点検出した。遺構時期は平安時代後期後半 (12 世紀後葉) と考えられる。

なお、北壁および南北断面の土層観察では池 160 が新旧 2 時期だけに限らず、その間にも 1～2 回の修造が行われていた状況が窺え、北側では肩部を造成したとみられる焼土混じりの盛土、南側ではほぼ水平な底面に薄く敷かれた白砂が確認できた。

柱列 2・3 (図版 25) 2区第 3 面の東部、景石 204 の南で池に直交する状態で検出した。各々柱穴 3 基からなり、柱間 2 間の柱列である。柱列 2 は柱穴 208・171・201、柱列 3 は柱穴 172・173・393 からなる。柱間 1.9～2.0 m、柱列間 1.0 m。池を渡る橋の可能性はある。

建物 1 (図版 31) 2区第 3 面の東部で検出した。径 30 cm 前後の礎石を伴う柱穴 4 基 (柱穴 161～164) で方位に沿う。柱間 1.9～2.1 m。西柱列の南延長約 4.0 m に対応するとみられる柱穴 269 を検出。南東は池 160 に、西は攪乱により削平を受けており、全体規模は不明である。出土遺物から明らかにできないが、層位関係から遺構時期は池 160-2 以前と考えられる。

4) 鎌倉時代の遺構 (図版 16～19・78・79)

井戸 55 (図版 32・83) 2区第 3 面の中央部で検出した、方形木枠組の井戸である。上部は攪乱を受けており、最下段北・西辺の木枠と曲物を検出した。掘形の平面形は円形状を呈し、検出

規模は長径 2.0 m、短径 1.8 m、深さ 0.6 ~ 0.9 m。標高は検出面 24.60 ~ 24.90 m、底面 24.00 mである。木枠はほぼ正方位に設置している。残存する北辺の部材は長さ 85 cm、4 ~ 7 cm角の角材である。両端には長さ 4 ~ 5 cm、幅 3 cm前後で枘受けの凹型の欠き込みを入れる。西辺の部材北端にはほぼ同寸法の枘が残存しており、相方が接合されている。曲物は上下 2 段検出したが、腐食が著しい。下段の曲物は底面中央をほぼ円形に 0.2 ~ 0.3 mほど掘り窪めて据えており、木枠内では北西寄りに位置する。曲物の寸法は径約 40 cm、高さ約 30 cm、厚さ 0.2 ~ 0.3 cmある。曲物内面の南西側に縦じ目がある。上段の曲物の寸法は下段と同じく径約 40 cm、高さ 8 ~ 10 cmある。上段の曲物は下段のものより南東に 0.1 m前後偏る。上下段の曲物の偏りについては、別の曲物を据え直して改修したのか、曲物と木枠を共に改修したのか、堆積土からは判断しかねるが、改修されたことだけは間違いないようである。堆積土は木枠内に径 5 ~ 10 cm大の礫を多量に含む暗灰黄色砂泥、木枠より上位の掘形には黄灰色砂混じりで径 15 cm以上の礫を多量に含む黒褐色砂泥が認められる。上段の曲物内では上位に黒褐色粘質土と砂、下位に泥土混じりの暗灰黄色砂、上段曲物の掘形には鉄分を帯びた赤褐色砂礫と黄灰色砂礫が混在する。下段の曲物内では上位に鉄分を帯びた赤褐色粗砂と多量の大礫を含む暗灰黄色粗砂、下位に大礫を含む黄灰色粗砂、底面では黄灰色の粗砂と粘土が混在し、下段曲物の掘形には上位に暗灰黄色・オリーブ褐色砂礫、下位にオリーブ褐色の砂・細砂が堆積する。湧水の影響を受けたと思われる鉄分を帯びた赤褐色の堆積土が上段曲物の掘形と下段曲物内の上位に認められる。基盤層は細砂混じりの褐色砂礫層である。遺構時期は平安時代後期後半から鎌倉時代初頭(12世紀後葉~13世紀初頭)と推定される。

石敷 180 2区第3面の西部、標高 24.90 ~ 25.10 mで検出した。この遺構は湿地状の窪地を埋め立て整地したものと考えられ、落込 361 と同様におよその範囲は確認できるものの、明瞭な輪郭については不明確である。2区北では石敷 180、2区南では第3層下層とした整地土下層は、町尻小路東側溝の溝 190 以東に東西長約 18 mの範囲で確認した。上層は整地の化粧土とみられる層厚 0.2 m前後の灰黄褐色泥砂、下層の石敷 180 は層厚 0.2 ~ 0.3 mで、大きさが均一な径 10 ~ 15 cm大の多量の石を含む黒褐色砂泥、底面には部分的に厚さ 0.05 m前後の腐植土層が点在する。南側では X=-112,596 ライン付近を北東から南西方向に延長する自然流路の埋土として確認した。この状態は Y=-22,184 ラインに沿った断割りで検出することができた。時期は平安時代後期後半から鎌倉時代初頭(12世紀後葉~13世紀初頭)と推定している。

柱列 4・5 (図版 31) 2区第3面の中央部、石敷 180 上面で検出した東西方向の柱列 2 条である。北側の柱列 4 は柱穴 7 基、南側の柱列 5 は柱穴 5 基からなる。柱間は不明瞭である。柱列 2 条は約 3.3 ~ 3.4 mの間隔で並行しており、建物の可能性がある。柱列の東端中心に柱穴 177 があり、建物の東端を示す可能性がある。

井戸 199 (図版 32・83) 2区第3面の西部の北壁際で検出した、方形木枠組の井戸である。北辺部、全体の約 1/4 が調査区外にあり、最下段の木枠の南・東辺を検出した。曲物の痕跡は確認していない。掘形の平面形は方形状を呈し、一辺約 1.3 m、深さ 0.4 ~ 0.9 m、標高は検出面 24.30 ~ 24.50 m、底面 23.90 mである。木枠はほぼ方位に沿って設置しており、南・東 2 辺の

部材を検出したが、腐食により遺存状況はよくない。南辺の部材は長さ 71 cm、幅 10 cm、厚さ 2.5 cmの板材である。東端に長さ 2.5 cm、幅 5.0 cmの短めの杢が認められるが、西端は遺存しない。堆積土は木枠内に砂礫混じりの黒褐色シルト質砂泥、掘形には上位に細砂混じりの黄灰色泥砂、および固く締まった粗砂混じりのオリーブ褐色砂礫、中位に径 0.5 ～ 5.0 cmの礫が密に詰まる暗褐色泥土、下位に多量の粗砂を含む暗灰黄色砂礫が認められる。基盤層は暗灰黄色砂礫層である。遺構時期は鎌倉時代前期（13 世紀前葉）と推定される。

井戸 304（図版 32・82） 2 区第 3 面の中央部で検出した、方形木枠組の井戸である。遺構の大半が攪乱に削平されており、最下段の木枠を検出した。掘形の平面形は歪な円形を呈し、検出規模は長径 1.8 m、短径 1.6 m、深さ 0.9 m。標高は検出面 24.95 m、底面 24.10 mである。木枠は掘形の西寄りに位置し、やや西に傾いた状態で設置している。部材の長さは南北辺が 80 cm、東西辺が 85 cm、4 ～ 6 cm角の角材である。遺存状況がよくなく、四隅の杢組の状態については不明瞭である。南辺の木枠の一部に縦板の痕跡がわずかに残存している。堆積土は木枠上層に砂礫を含む暗オリーブ褐色シルト、木枠内に礫を多量に含む黒褐色泥砂が認められる。基盤層は細砂混じりの褐色砂礫層である。遺構時期は鎌倉時代前期（13 世紀前葉）と推定される。

池 160-1（図版 26 ～ 29・81） 2 区第 2 面の東部、平安時代の池 160-2 上面で検出した。池 160-1 は、北半は池の北端部分とみられ、東岸は東寄りに膨らみ、西岸は南西方向に蛇行する。検出規模は東西幅が北側 2.2 m、南側 13.4 m、南北長 10.2 m、標高は検出面 25.25 m、底面 24.95 m、深さ約 0.3 m、想定される水深は最大 0.15 m程である。

東岸の北東部では肩部を暗オリーブ褐色砂泥およびにぶい黄褐色微砂で形成しており、小規模ながら洲浜状の石敷を検出した。石敷は西下がりに緩く傾斜し、径 10 ～ 20 cm大の石を敷き詰めている。石敷の規模は幅 0.8 ～ 1.2 m、長さ約 4.0 m、傾斜角度は 12 度前後である。石敷の西端、つまり池北端の中央付近では、一辺 10 ～ 20 cm大の緑色片岩 4 石が拳大の石とともに密集している。護岸意匠の中で緑色片岩の使用例の一つとして注目しておきたい。東岸の他の部分は水際の地山砂礫層では大粒の石のみが露出し、汀線状を成している可能性がある。

西岸の北部では、突き固めた様な堅さをもつ比較的均質なにぶい黄褐色砂泥（粘質）が、やや直線的な南北方向の堤状を呈する状態で検出した。汀線の補強であれば東岸と同様に石敷を施すと思われるが、この状態も護岸の一種であろうと考えておきたい。

埋土はオリーブ褐色や暗灰黄色の細砂を主体として、部分的に黄褐色や暗灰黄色の泥砂が認められる。底面の土層は北側では比較的均質な黒褐色砂泥、南側ではさらに下層の焼土を多量に含む黒褐色泥砂が同一の平坦面を成して水平に堆積する。底面に散在する径 10 ～ 20 cm大の礫は護岸の石敷が崩れ落ちたものと考えられる。底面の中央付近では下層の池 160-2 の景石上面が見え隠れし、また東側では須恵器甕の大型片が 2 箇所出土した。

底面土層の下層には厚さ 0.15 m前後で炭・焼土を多量に含む黒褐色泥砂が互層状に堆積しており、出土遺物には二次的に熱を受けたものが多くみられる。さらにこの下層に池 160-2 の炭を含む黒色泥土が堆積している。

遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、石製品の他、1～3 cm大の水晶片6点などが出土した。これらは底面土層の下層に含まれていたものが多い。遺構時期は鎌倉時代前期後半(13世紀中葉)と推定される。

泉100(巻頭図版2、図版30・80) 2区第2面の東端部で検出した、泉の湧出施設とみられる遺構で、泉本体と溢れ出た湧水を受けたと考えられる周囲の浅い掘込からなる。泉本体の上面には焼締陶器の甕口縁部を設置し、周囲には石敷を施している。遺構内部は甕口縁部直下に曲物を配置し、下部には方形縦板横棧組の木枠を設けている。

泉本体の掘形は平面形が隅丸形状を呈し、検出規模は東西2.7 m、南北2.5 m、深さ1.3 m、標高は検出面25.20 m、底面23.90 mである。掘込の平面形は歪な楕円形を呈し、検出規模は東西3.8 m、南北6.6 m、深さ0.15 m、標高は検出面25.25 m、底面25.10 mである。掘込は泉本体の南西方向に広がっており、湧水を受け流下する方向を示すとみられる。

甕は口径48 cmの常滑産焼締陶器の大甕で、口縁部のみを意図的に用いている。口縁部は土圧により破損した状態で検出したが、破片が甕内の埋土から出土しており、口縁部は全周する。

石敷は甕口縁部を取り囲むように径5～10 cm大の石を密に敷き詰めている。石敷の平面形は歪な楕円形を呈し、検出規模は東西1.9 m、南北1.3 mある。石敷の中央部は深さ0.15 m前後で浅鉢状にやや窪む。石敷には土器・瓦類の破片が含まれており、検出面では須恵器(鉢・甕)、瓦器(羽釜)、焼締陶器(甕)、丸瓦、平瓦、三巴文軒丸瓦、剣頭文軒平瓦など20点程を確認した。

石敷の東半部検出面の約1.0 m²の範囲の石材は総数255石あり、多い順から砂岩114石(44.7%)、チャート95石(37.3%)、泥岩33石(12.9%)、石英閃緑岩5石(2.0%)、泥岩ホルンフェルス4石(1.6%)、輝緑岩2石(0.8%)、珪岩および花崗岩各1石(各0.4%)が認められた。砂岩・チャート・泥岩が圧倒的に多数を占めることから、近隣の鴨川水系中下流域の自然堆積層から粒の揃った礫を採取して敷き詰めたものであろう。

甕と石敷の配置関係は、鑑賞を目的として泉の表面を化粧した造形であろうと考えられ、湧水量の少ない場合でも石敷の窪みへ溢れ出た湧水の水面下に湧出口の甕口縁を見せるという趣向から工夫されたものと理解できる。

曲物は甕検出面下約0.5 mに据える。遺存状態が悪く、ほとんど原形を留めていないが、径約30 cm、現存高約20 cm(推定高約25 cm)、板厚は約0.1 cmある。甕口縁部と方形縦板横棧組の木枠を継ぐような導水管的機能を有していたと考えられる。したがって、断面観察からも想定できるが、甕下端から現存曲物間には同規模の曲物が据えられていた可能性が高いと考えられる。

方形縦板横棧組の木枠は腐食が著しいが、縦板・下段横棧・隅柱が遺存しており、上段の横棧も部分的に検出した。掘形の平面形は隅丸形状を呈し、検出規模は東西2.2～2.6 m、南北2.2～2.3 m、深さ1.2 mで、底面標高は23.90 mである。木枠の外辺は一辺約1.1 m。縦板は石敷検出面下約1.2 mに設け、縦板上端の高さは曲物上端の高さにほぼ一致する。縦板の現存長は70～80 cm。縦板の厚さは腐食で薄くなった中程の部分が厚さ約1 cmで、比較的遺存良好な上端および下端の部分では厚さ4～5 cm。縦板の幅は腐食により不明瞭であるが、40～60 cm幅とみられ、

一辺につき板材2枚を使用したと考えられる。横棧は上段の横棧が縦板下端から上方0.5 m前後、下段の横棧が縦板下端から上方0.1 m程に位置する。下段横棧は内側の一辺92 cm前後で、長さ102～107 cm、厚さ5～6 cm角の部材を用いる。東西方向の横棧では両端に長さ5～6 cm、幅2 cm前後の枅を、南北方向の横棧では同寸法の凹型の欠き込みを設け、相方を接合する。隅柱は北側両隅と南東隅で検出した。遺存状態は良くないが、一辺3～4 cm角の材を使用している。

遺構内堆積土は、甕と曲物の部分では黒褐色砂泥で礫・炭・焼土などを含む。木枠内の上層では黄灰色泥砂、中・下層では黄灰色から灰白色の微砂と細砂が厚さ5～10 cm単位でレンズ状の互層堆積を呈し、木枠内側には黄灰色粘土が付着する。木枠掘形の上層では褐灰色砂泥、下層では褐灰色砂礫、木枠下から底面には灰白色微砂が堆積する。遺構時期は平安時代末期から鎌倉時代後期前半（12世紀末～13世紀後葉）に属する。

なお、掘形底面の北東部で中空の小穴を検出した。小穴の断面は横長の楕円形を呈して長径0.2 m、短径0.1 m、北北東方向に傾斜角度15度前後で下降して延長しており、奥行は0.75 mまで確認した。この小穴は、基盤砂礫層が湧水層から噴き出す水流により生じたものとみられる。

上部の石敷や甕口縁などと下部の方形木枠との関係は、木枠内の汚れの少ない砂を主体とする互層堆積が湧水の上昇による流水堆積とみられることから、これらは泉の設備として一体的に機能していたと考えている。しかしながら、泉の実用性にそぐわないやや手の込んだ複雑な構造をもっているとも考えられることから、本来は通常の木枠井戸であったものが、或る時期、何らかの理由によって湧水が一挙に増加し、泉の施設として改修されたという可能性を否定できない。掘形底面で検出した空洞の小穴がそのことを示唆しており、これが湧水増量の原因であろうかとも推察される。ただし、そうなると木枠井戸と後述する園池が近接して存在した時期が想定されることになり、そのような景観の構成が可能であるのかどうか、さらなる検討が必要となろう。

井戸200（図版32・83） 2区第3面の西部の北壁際で検出した。曲物を伴う井戸である。木枠組は未確認で、底面に設置された曲物のみを検出した。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、径1.0 m前後、深さ0.35 m、標高は検出面24.15 m、底面23.80 mである。曲物の寸法は内径47～48 cm、高さ24 cmで、厚さ0.1～0.2 cmの薄い板材を2～3重に曲げ重ねる。遺存状態は良好であるが、綴じ目が不明瞭である。曲物の上方の埋土から完形の土師器皿1点と共に薄い板材が10片以上出土した。埋土は曲物内に小礫を含む褐灰色砂礫、曲物掘形の上位に径5～10 cm大の礫を含む暗灰黄色泥砂、下位に細砂混じりの黄褐色砂礫が認められる。基盤層は微砂・細砂を多く含む黄褐色砂礫である。遺物は土師器が少量出土した。遺構時期は鎌倉時代後期前半（13世紀後葉）に属する。

溝159 2区第2面の西部、路面150-1の東側で検出した南北方向の溝で、町尻小路東側溝と考えられる。検出規模は長さ10.5 m、幅1.0～1.2 m、深さ0.1～0.2 mある。条坊復元的位置関係については、町尻小路東築地心想事成線の座標 $Y=-22,196.12$ に基づく東側溝の西肩部が $Y=-22,198.67$ であるのに対して、溝159の西肩部は $Y=-22,195.90$ 前後であり、想定線よりも2.8 mほど東に位置することになる。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土した。鎌倉時代前期後半から後期前半（13世紀中葉～後葉）のものが主体である。遺構時期としては路面150-1と対応

するものとみられ、室町時代前期（14世紀後葉）まで時期幅を広げて捉える方が妥当であろう。

土坑 132（図版 33） 2区第2面の中央部、標高 25.26 m で検出した。平面形は歪な楕円形を呈し、検出規模は長軸 1.0 m、短軸 0.7 m、深さ 0.1 m ある。土坑内南寄りに土師器皿がやや密集する。遺構時期は鎌倉時代後期前半から後期後半（13世紀後葉～14世紀前葉）に属する。

5) 室町時代の遺構（図版 18・19・78・79）

井戸 316（図版 32・82） 2区第2面の中央部で検出した、曲物を伴う方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形はやや歪んだ隅丸方形状を呈し、一辺 1.3～1.5 m、深さ 0.9～1.0 m、標高は検出面 25.10～25.20 m、底面 24.20～24.30 m である。木枠はほぼ方位に沿って設置している。木枠の一辺は 80～90 cm、残存高 30 cm、縦板の厚さ 0.3～0.5 cm、幅は腐食により明らかでない。4辺に縦板が残存しているが、各辺は土圧により内側に湾曲している。北辺と東西辺の北半部の縦板は2枚重なる。横棧は縦板の上端内側に部分的に残存しており、幅は2～3 cm である。曲物は木枠内の北寄りに設置する。寸法は径 44～48 cm、高さ 18～20 cm、厚さ 0.2～0.3 cm である。堆積土は木枠内に砂礫混りの黒褐色砂泥、木枠と曲物の間にオリブ黒色泥土、掘形には上位にオリブ黒色砂泥、中位に黒色砂泥、下位にオリブ黒色砂礫が認められる。遺構時期は鎌倉時代後期前半から室町時代初頭（13世紀後葉～14世紀中葉）に属する。

井戸 356（図版 33・82） 2区第2面の西端部で検出した、桶を伴う井戸である。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、径 1.1～1.2 m、深さ 0.9 m、標高は検出面 24.94 m、底面 24.05 m である。桶の寸法は内径 38～40 cm、残存高 27 cm、桶材は幅 7.0～12 cm、厚さ 0.5～0.6 cm、外面の上下2段に各2段毎の箍の痕跡が認められる。堆積土は上層に黒褐色砂泥、桶内に黄灰色粗砂礫、桶の周囲に暗灰黄色砂礫、その外側に灰黄褐色砂礫、桶の下層に褐色砂礫が認められる。基盤層は褐色砂礫層である。遺物は土師器、瓦器が出土した。遺構時期は鎌倉時代後期前半から室町時代初頭（13世紀後葉～14世紀中葉）に属する。

井戸 348（図版 33・82） 2区第2面の中央部、先述した井戸 316 の北西側で検出した、桶を伴う井戸である。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、径 1.7 m 前後、深さ 0.96 m、標高は検出面 24.98 m、底面 24.02 m である。桶は掘形中央西寄り上下2段に組み合わせる。桶2口分の残存高は 71 cm である。上段の桶は上端内径 55～58 cm、下端内径 50 cm、残存高 27～28 cm、桶材は幅 12 cm 前後、厚さ 0.4～0.5 cm、外面下端に幅 7 cm の板材の箍が認められる。下段の桶は上端内径 48 cm、下端内径 42 cm、残存高 48～49 cm、桶材は上段のものと等しい、外面の中程に幅 2 cm の箍の痕跡2段が認められる。堆積土は桶内に炭・木片を含み礫が多量に混入した黒褐色泥砂、桶の掘形上層に黒褐色砂泥・黒褐色砂礫、桶の周囲に礫を多量に含む黒褐色泥土、その外側に黒褐色砂礫・オリブ褐色砂礫・暗灰黄色砂礫などが認められる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、木製品などが出土した。遺構時期は鎌倉時代末期から室町時代前期前半（14世紀中葉～後葉）に属する。

溝 227（図版 33・82） 2区第2面の中央部で検出した、東西方向の溝である。東側を攪乱により削平され、西側は途切れる。検出規模は長さ 10.1 m、幅 0.6～0.8 m、深さ 0.3～0.5 m である。

遺物は土師器、瓦器、焼締陶器などが出土した。遺構時期は室町時代前期（14世紀後葉～15世紀前葉）に属する。

土坑 297（図版 33） 2区第2面の西部で検出した、瓦器鍋を据え付けた土坑である。平面形は円形を呈し、検出規模は径 0.4 m 前後、深さ 0.16 m あり。遺物は瓦器の他に土師器が出土した。遺構時期は室町時代前期（14世紀後葉～15世紀前葉）に属する。

6) 室町時代末期以降の遺構（図版 20・83・84）

耕作溝群 2区第1面の東半部および西辺部、標高 25.20～25.40 m で南北方向の小溝群を検出した。溝は幅 0.2～0.4 m、深さ 0.05～0.15 m あり、何れもほぼ座標北を示しており、耕作に伴う犁溝群と考えられる。遺構時期は室町時代末期（16世紀後葉）から江戸時代以降と推定している。

区画溝 56 2区第1面の西端部、町尻小路の中央部水路に重層する位置で南北方向の溝を検出した。溝は幅 2.0 m 以上、深さ 0.6～0.8 m で数回の改修が認められ、護岸の杭列や石組を伴う溝が確認された。上記の耕作溝群に伴う区画溝と考えられ、遺構時期についてもほぼ対応しているが、下限は近代まで降る可能性がある。

池 209（図 13） 2区第1面の東部で検出した、モルタル漆喰製の池で、2代目の旧国鉄京都駅に関連した近代に属する施設である。検出規模は東西 7.5 m、南北 4.8 m。平面形は多角形で内湾する辺で構成され、4辺が確認できた。中央部は漆喰がなく中島状に施工する。中央部の長方形の攪乱坑は池に伴う付属施設の抜き取り跡の可能性があり、底面は平坦で、北側に魚溜り様の円形の窪み、西端隅には水生植物用と考えられる屈曲した仕切り壁を設けている。仕切り壁西端の底面付近には径 2 cm の穴が穿たれ、金具の取付痕と考えられる釘跡が 3箇所認められる。おそらく池本体との水の通路を施工したものであろう。南西部の底面には 7～9 cm 角の低い花崗岩製の角柱 2本が並列するが用途不詳である。側壁は大半が消失しているが、西端の仕切り壁部分では高さ 0.3 m 程が残存し、上端面には接合剤とみられるモルタルが固着する。モルタル漆喰の撤去後、側壁の内側に沿って 0.3～0.7 m 間隔で小杭跡が認められた。側壁の施工に伴うものである。

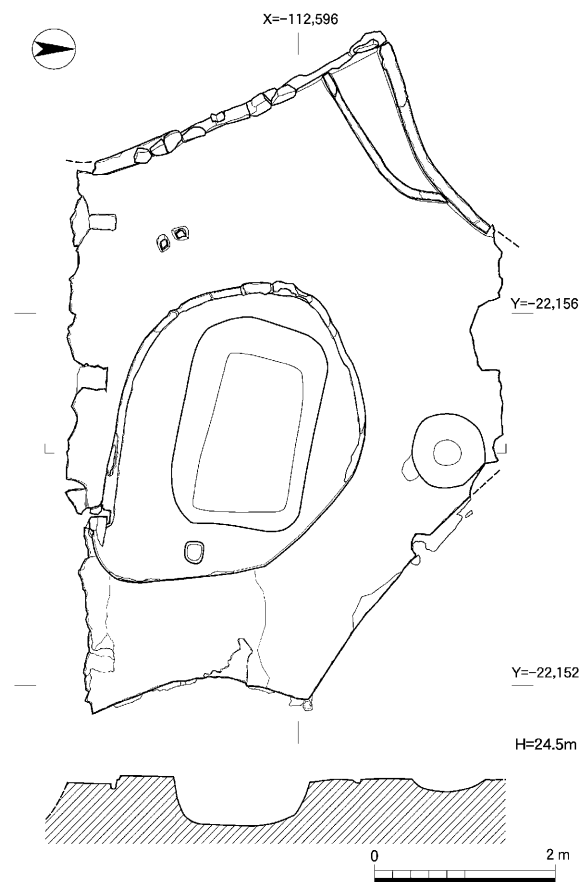


図 13 2区 池 209 実測図（1：80）

(3) 3区の遺構

1) 基本層序 (図版 39～41)

現地表下約 2.4 m までは、明治から大正時代の京都駅の造成・拡張時の盛土層が堆積し、次に江戸時代後期から明治時代の耕作土層が厚さ約 0.2 m 堆積している。この耕作土層の下に堆積する暗褐色粘質土の上面が第 1 面で、室町時代の遺構面となる。次に厚さ 0.1～0.2 m の灰オリーブ色シルト・砂礫・黒褐色粘質土層などが不規則に堆積しており、整地を目的として客土されたものと思われる。これらの整地層の上面が第 2 面の遺構面となる。整地層下は砂礫層で、9～10 世紀の遺物を含む層もあるが、基本的には無遺物層である。砂礫層の上面が第 3 面の遺構面である。

2) 遺構の概要

3区は平安京左京八条三坊四町内の中央部に位置し、四行八門では西二・三・四行、北五・六門に該当する。検出遺構は、504 基である。遺構時期は平安時代後期から鎌倉時代後期に属する遺構が中心である。第 3 面で検出した遺構は、平安時代後期の泉、井戸、土坑、集石遺構、柱穴などである。第 2 面では鎌倉時代から室町時代の路面 (町尻小路)、建物、井戸、土坑、柱穴などがある。町尻小路は西側溝と路面を検出した。第 1 面では室町時代末期から江戸時代以降の耕作に伴うと考えられる小溝群、土坑、柱穴などがある。各遺構は古い時期から順に報告する。

3) 平安時代の遺構 (図版 34・35・85)

平安時代に属する遺構は、泉、町尻小路、井戸、土坑などがある。

泉 443 (図版 42・86) 3区第 3 面の中央部で検出した、平面形が南北に長い楕円形を呈する泉である。検出規模は、長径約 3.4 m、短径約 2.6 m、深さ約 0.6 m である。底面中央部には長径 1.0 m、短径 0.7 m の東西に長い楕円形の泉湧出部と考えられる落ち込みがあり、中には径 3～20 cm の礫を密に詰め、上面中央部には拳大の礫を取り囲むように配する。泉湧出部の周辺で土師器皿が多数出土した。また、泉の南東部の肩口には、幅約 1.1 m、深さ約 0.1 m の溝状遺構が取り付く。南は攪乱を受けるが、湧水はこの溝を南流すると考えられる。埋土は、周囲に黒褐色砂礫が、中央部には黒褐色からにぶい黄褐色の砂泥混じり砂礫が堆積する。遺構時期は、平安時代中期後半から後期前半 (11 世紀後葉～12 世紀初頭) と推定される。

集石 445 (図版 42) 3区第 3 面の中央部で検出した、南北に長い方形状を呈する遺構である。検出規模は、長辺約 1.3 m、短辺約 1.8 m、深さ約 0.3 m である。径 1～15 cm の礫を密に詰める。埋土は黒褐色砂泥であり、土師器小片が多量に出土している。集石 445 の北東端と泉 443 の南西端は隣接していることから、泉 443 と関連する遺構である可能性がある。遺物は土師器、須恵器、瓦器、白色土器、瓦などが出土した。遺構時期は、平安時代後期 (11 世紀末～12 世紀後葉) と推定される。

井戸 188 (図版 42) 3区第 3 面の西部で検出した、平面形が歪な円形の井戸である。掘形の径は約 0.6 m である。木枠はすでに腐朽しているが、痕跡から径 45 cm、高さ 20 cm の曲物が据え付

けられていたと考えられる。曲物内の埋土は黒褐色シルトである。遺物は土師器、瓦が出土した。遺構時期は、平安時代後期前半（11世紀末～12世紀初頭）と推定される。

土坑 448（図版 42） 3区第3面の中央部で検出した、平面形が南北に長い楕円形を呈する土坑である。検出規模は、長径約 1.8 m、短径約 0.7 m、深さ約 0.1 mある。埋土は黒褐色砂泥である。南西部から完形の土師器皿 3 個体が重なって出土し、祭祀関連の遺構の可能性はある。遺物は土師器、瓦が出土した。遺構時期は、平安時代後期前半から後期中頃（11世紀末～12世紀前葉）と推定される。

井戸 235（図版 42） 3区第3面の東部、後述する泉 241 の北辺の礫敷上面で検出した、平面形が円形の井戸である。掘形は径 0.85 mある。木枠は腐食しているが、痕跡から一辺 0.5 mの方形縦板横棧組であると考えられる。底部に径 40 cm、高さ 50 cmの円形曲物を埋設している。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、軒丸瓦が出土した。遺構時期は、平安時代後期（11世紀末～12世紀後葉）と推定される。

4) 鎌倉時代から室町時代の遺構（図版 34～37・85・88）

鎌倉時代から室町時代に属する遺構は、泉、路面、溝、井戸、建物、柱列、土坑、柱穴などがある。

路面 227-2 3区第3面の東端で検出した旧期の町尻小路路面である。南北方向へは調査区外へ延長する。検出規模は、東西幅約 8 m、南北幅約 11 mある。路面は径 2～50 cmの礫を密に敷き突き固める。路面の西端部は比較的平坦であるが、東側は中央に向かって緩く傾斜する。路面中央部が窪む形状は、道路そのものに排水の目的を付加させたものと考えられる。路面を形成する土層から鎌倉時代前期中頃（13世紀前葉）を主体とする遺物が出土した。

路面 227-2 の上部では、新期の路面 227-1 や溝 63 を検出している。新旧両路面間でも路面と考えられる土層の広がりを確認しており、複数回にわたり補修などがなされたと考えられる。以下、関連遺構として路面 227-1・溝 63 を報告する。

路面 227-1 3区第2面の東端で検出した新期の町尻小路路面である。検出規模は、北半が東西幅約 4 m、南半が東西幅約 8 mある。路面は径 2～5 cmの礫を密に敷き突き固める。路面上は次に示す溝 63 の東肩から約 1.1 mの間は平坦であるが、平坦部から東側は路面 227-2 と同様、中央部に向かって緩く傾斜する。路面を覆っている堆積土層から室町時代前期（14世紀中葉）の遺物が出土しており、道路廃絶の年代の一端が窺われる。

溝 63 3区第2面の東端で検出した南北方向を示す溝で、町尻小路の西側溝であると考えている。南北方向へは調査区外へ延長する。検出規模は、幅 1.4～1.8 m、深さ 0.3～0.35 m、南北検出長は約 11 mある。溝の両側には路面 227-1 がある。検出位置は四町の東築地想定線から約 4 m西に位置する。溝 63 と東側溝である 2区溝 153 との心々距離は約 17 mあり、小路溝間幅をはるかに超える。埋土は黒褐色から暗褐色泥砂が主体である。遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。遺物時期は、鎌倉時代前期後半から鎌倉時代後期前半（13世紀中頃～13世紀後葉）が主体であるが、路面 227-1 と対応するものと考えられる。

土坑 419(図版 47・89) 3区第2面の中央部で検出した、南北に長い楕円形を呈する土坑である。検出規模は、径 0.6～0.7 m、深さ約 0.1 mある。土坑内には瓦器三足羽釜の破片が密に並ぶ。その他、土師器が出土している。遺物時期は、平安時代末期から鎌倉時代前期前半(12世紀後葉～13世紀初頭)と推定できる。

泉 241(図版 43・86・87) 3区第3面の中央部で検出した泉である。3区北の調査時には礫敷きの建物地業と想定したが、3区南で泉の湧出部を検出したことから礫敷きを伴う泉と判明した。検出規模は、東西幅約 10 m、南北幅約 9 mある。全体の平面形態はほぼ方形を呈する。北辺部から西辺にかけて上面が平坦な礫敷きが敷設され、南東部は緩やかに落ち込む。落ち込みの北西隅には泉湧出部がある。

北半の礫敷き部は、東西幅約 10 m、南北幅約 3.6 mの範囲に、深さ 0.1～0.2 mの浅い掘込みを設けたのち、土を敷いた上へ径 5～50 cm大の礫を敷き詰め平坦面を造り出したものである。礫敷き部は、南北方向を示す 9列の短冊型の配列からなる。礫敷き部の検出規模は、東西幅 8.3 m、南北幅は北端部が破壊されているため不揃いで、2.5～3.5 mある。中央礫敷きは幅 0.2 mと狭く、それより東側にはほぼ均等の幅で 5列、西側には 3列並ぶが、西側の 2列目と 3列目の約 1.1 mの間には礫は敷かれていない。西端の礫敷き列を除いて各礫敷き列間には幅 0.2～0.4 mの隙間がある。

礫敷き上面で、東西に柱穴 3基が並ぶ柱列 229 および柱穴 236・237 を検出した。柱列 229 の柱穴は平面形が円形を呈し、検出規模は、径 0.7～1.0 m、深さ 0.2～0.25 m、柱間は約 2.5 mある。埋土は黒褐色粘質土で、中に 10～20 cmの礫・瓦片が詰められている。中央の柱穴は礫敷き部の東西中央に位置する。柱穴 236・237 の検出規模は、径 0.25～0.3 m、深さ 0.15 m前後あり、埋土は黒褐色粘質土である。柱列や柱穴は礫敷き部に伴う遺構と考えられる。

泉の南半では、西端に北半の礫敷き部が延長し、東側には礫敷き部から緩やかに傾斜する落ち込みが広がる。礫敷き部南部は、北半の礫敷き部の西端検出位置の南延長線から西へ約 1 m張り出す。この箇所にも一部礫敷き間に幅 0.1 mの隙間がある。また、落ち込み部の東肩口は、礫敷き部の東端検出位置から約 1.3 m西で検出しており、あるいは後世の攪乱による削平を受けた可能性がある。落ち込み部の肩口は、緩やかに傾斜し底面に至る。礫敷き上面から落ち込み底面までの深さは約 0.3 mある。傾斜面には粗密はあるが礫を貼り付ける。南肩口は周囲に比べやや下がっており、この箇所から湧水は南流したと考えられる。落ち込み部底面には腐植土を含む黒褐色粘質土が厚さ 0.05 m堆積しており、落ち込み部が滞水していたことが窺える。

落ち込み部の北西隅には泉湧出部と考えられる窪みがある。平面形は歪な円形を呈し、擂鉢状の掘形を有する。径約 2.2 m、深さ約 0.6 mある。泉湧出部の掘形は基盤層である砂礫層に達しており、掘形下半の砂礫層には黄色粘土を貼り付ける。その後、底面から中位にかけて拳大の礫を詰め込み、上部に湧水の吹き出し口と考えられるやや大振りの礫を巡らす、大半は崩落している。泉湧出部の東側には砂礫層をわずかに盛り上げ、周囲には白色の円礫(石英)を配する。一部を図版 120 に掲載している。

遺物は土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒瓦などが出土した。遺構時期は、鎌倉時代前期前半（12世紀末～13世紀初頭）と推定される。

土坑 105（図版 47） 3区第2面の中央部で検出した土坑である。3区南では検出できなかったことから、東西方向に長い楕円形を呈すると考えられる。検出規模は径約 3 m、深さ約 0.4 mある。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒平瓦などが出土した。遺構時期は、鎌倉時代前期前半（12世紀末～13世紀初頭）と推定される。

井戸 196（図版 44） 3区第2面の西部で検出した井戸である。南半部のみの検出であるが、掘形の平面形は円形を呈する。深さは約 0.9 mある。井戸枠は一部縦板が残存しており、痕跡から方形縦板横棧組の井戸と考えられる。枠内の埋土は黒色シルトが主体である。遺物は土師器、須恵器、焼締陶器などが出土した。遺構時期は、鎌倉時代前期中頃から後半（13世紀前葉～13世紀中葉）と推定される。

井戸 93（図版 44） 3区第2面の中央部で検出した、掘形の平面形が円形の井戸である。検出規模は径 1.05 m、深さ約 0.7 mある。井戸枠は腐食していたが、痕跡から径約 0.6 mの円形の曲物を据えたものである。枠内の埋土は黒色粘質土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などが出土した。遺構時期は、鎌倉時代前期中頃（13世紀中葉）と推定している。

井戸 89（図版 42） 3区第2面の中央部東側で検出した、掘形の平面形がほぼ円形の井戸である。検出規模は、径約 1.9 m、深さ約 1.1 mある。井戸枠は腐食していたが、痕跡から、一辺約 0.7 mの方形縦板横棧組井戸であったと考えられる。埋土は黒褐色粘質土、井戸枠内の堆積土である黒褐色シルト、掘形の黒褐色砂礫に大別できる。遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器、軒平瓦などが出土している。遺構時期は鎌倉時代前期後半（13世紀中葉）と推定される。

建物 99（図版 45・89） 3区第2面の中央部で検出した、南北棟掘立柱建物である。検出規模は東西約 4.8 m、南北約 4.4 mあり、東西2間（柱間約 2.4 m）、南北3間（柱間約 0.9 m・約 2.7 m・約 0.9 m）。建物方位は北に対し東へ約 1度振れる。3区北では、柱穴掘形は円形で、径 0.3～0.6 m、深さ 0.3～0.4 mある。北側柱列には径 20 cm前後の平坦な根石が据えられている。3区南では、柱穴掘形はほぼ円形で、径 0.35～0.8 m、深さ 0.15～0.3 mある。遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などが出土している。遺構時期は鎌倉時代前期後半から後期後半（13世紀中葉～14世紀前葉）と推定している。

建物 161（図版 46） 3区第2面の西辺部で検出した、東西棟掘立柱建物である。検出規模は東西約 6.2 m、南北約 4.3 mあり、東西3間（柱間約 2.1 m）、南北2間（柱間約 2.4 m・約 1.9 m）。建物方位は西に対し南へ約 3度振れる。柱穴掘形は円形で、径 0.3～0.7 m、深さ 0.1～0.2 mある。遺物は土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などが出土した。遺構時期は鎌倉時代前期後半から後期後半（13世紀中頃～14世紀前葉）と推定できる。

土坑 459（図版 47・89） 3区第2面の西部で検出した、東西に長い不定形を呈する土坑である。検出規模は短径約 1 m、長径約 2.5 m、深さ約 0.12 mある。土坑の内部は、0.7 m×1.4 mの範囲に径 3～15 cmの礫をやや密に詰める。埋土は黒褐色砂礫が主体である。遺物は土師器、瓦器、

須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。遺構時期は鎌倉時代後期前半から室町時代初頭（13世紀後葉～14世紀中葉）と推定される。

土坑 296（図版 47） 3区第2面の西部で検出した、南北に長い長方形を呈する土坑である。検出規模は短辺約0.6 m、長辺約1.7 m、深さ約0.15 mある。完形を含む土師器皿などが多く出土した。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は土師器、瓦器、焼締陶器が出土した。遺構時期は鎌倉時代後期後半から室町時代初頭（14世紀前葉～中葉）と推定される。

井戸 451（図版 44） 3区第2面の中央部で検出した、掘形の平面形が円形の井戸である。検出規模は短径約1.5 m、長径約1.7 m、深さ約1.1 mある。多角形の縦板木枠組をもつ。縦板は、長さ約80 cm、幅25～30 cm、厚さ0.3 cmで腐食しているため薄い。縦板は9枚組で、九角形と考えられる。また、縦板の重なる部分がある。掘形埋土は黄褐色から黒褐色砂礫が主体である。枠内埋土は黒色系の砂泥である。遺物は土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒平瓦などが出土した。遺構時期は鎌倉時代末期から室町時代前期前半（14世紀中葉～後葉）と推定される。

土坑 162（図版 47） 3区第2面の西辺部で検出した、平面形が方形の土坑である。検出規模は東西幅1.25 m、南北幅0.9 m、深さ0.5 mある。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、塼などが出土している。遺構時期は鎌倉時代末期から室町時代前期前半（14世紀中葉～後葉）と推定できる。

土坑 173（図版 47） 3区第2面の西辺部で検出した、平面形がほぼ円形の土坑である。検出規模は径0.65～0.75 m、深さ0.2 mある。埋土は黒褐色粘質土が主体である。底部に接して、完形の土師器の皿が1枚出土している。遺構時期は鎌倉時代末期から室町時代前期前半（14世紀中葉～後葉）と推定できる。

土坑 122（図版 47） 3区第2面の西部で検出した、平面形が円形の土坑である。検出規模は径約1.0 m、深さ約0.4 mある。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、焼締陶器、軒平瓦などが出土している。遺構時期は室町時代前期（14世紀後半）と推定している。

土坑 163（図版 47） 3区第2面の西部で検出した、平面形が東西に長い長方形の土坑である。。検出規模は長辺約0.8 m、深さ約0.5 mある。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層はオリーブ黒色シルトを主体とする。遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器系陶器、輸入陶磁器、瓦、壁土などが出土している。遺構時期は室町時代前期（14世紀後半）と推定している。

建物 70（図版 45） 3区第2面の東部で検出した、掘立柱建物と考えられる柱列である。検出規模は東西約6.8 m、3間（柱間約2.2 m）分を検出した。建物方位は西に対し南へ約0.5度振れる。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.6 m、深さ0.1～0.3 mある。南東隅の柱穴は根石をもつ。遺物は土師器、輸入陶磁器が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

建物 131（図版 46） 3区第2面の中央部で検出した、東西棟掘立柱建物である。検出規模は東西約6.8 m、南北約2.6 mあり、東西3間（柱間約2.3 m）、南北1間（柱間約2.6 m）。建物方位はほぼ東西方向である。北東隅の柱穴は、土坑 226 に破壊されている。柱穴掘形は円形で、径0.3～0.5 m、深さ0.2～0.4 mある。すべての柱穴に径20～30 cmの平坦な根石が据えられている。

遺物は土師器、瓦が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

柱列 83(図 14) 3区第2面の中央部で検出した南北方向の柱列である。検出規模は南北1間(柱間約1.8m)分を検出した。柱穴掘形は円形で、径0.3～0.4m、深さ約0.2mある。柱穴内に径10～20cmの根石を据える。土師器が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

柱列 114(図 14) 3区第2面の西部で検出した、東西方向の柱列である。検出規模は長さ約2.6m、東西2間(柱間約1.1m・約1.5m)。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.55m、深さ0.2～0.3mある。東端の柱穴には径10～20cmの根石を据える。土師器、瓦が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

柱列 168(図 14) 3区第2面の西部で検出した、東西方向の柱列である。検出規模は長さ約3.7m、東西2間(柱間約1.8m)。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.5m、深さ0.2～0.4mある。土師器が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

柱列 177(図 14) 3区第2面の西辺部で検出した、南北方向の柱列である。検出規模は長さ約4.1m、南北2間(柱間約2.1m)。柱穴掘形は円形で、径0.2～0.4m、深さ0.05～0.2mある。土師器が出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

柱穴 303 3区第2面の東部で検出した、平面形がほぼ円形の柱穴である。検出規模は径0.5m前後、深約さ0.1mである。柱穴内上面で銭貨がほぼ並び立つ状態で2枚出土した。それぞれ「元祐通寶」、「皇宋通寶」である。祭祀関係の遺構である可能性がある。埋土は黒褐色砂泥が主体である。遺物は銭貨の他に土師器小片が少数出土している。鎌倉時代から室町時代と考えている。

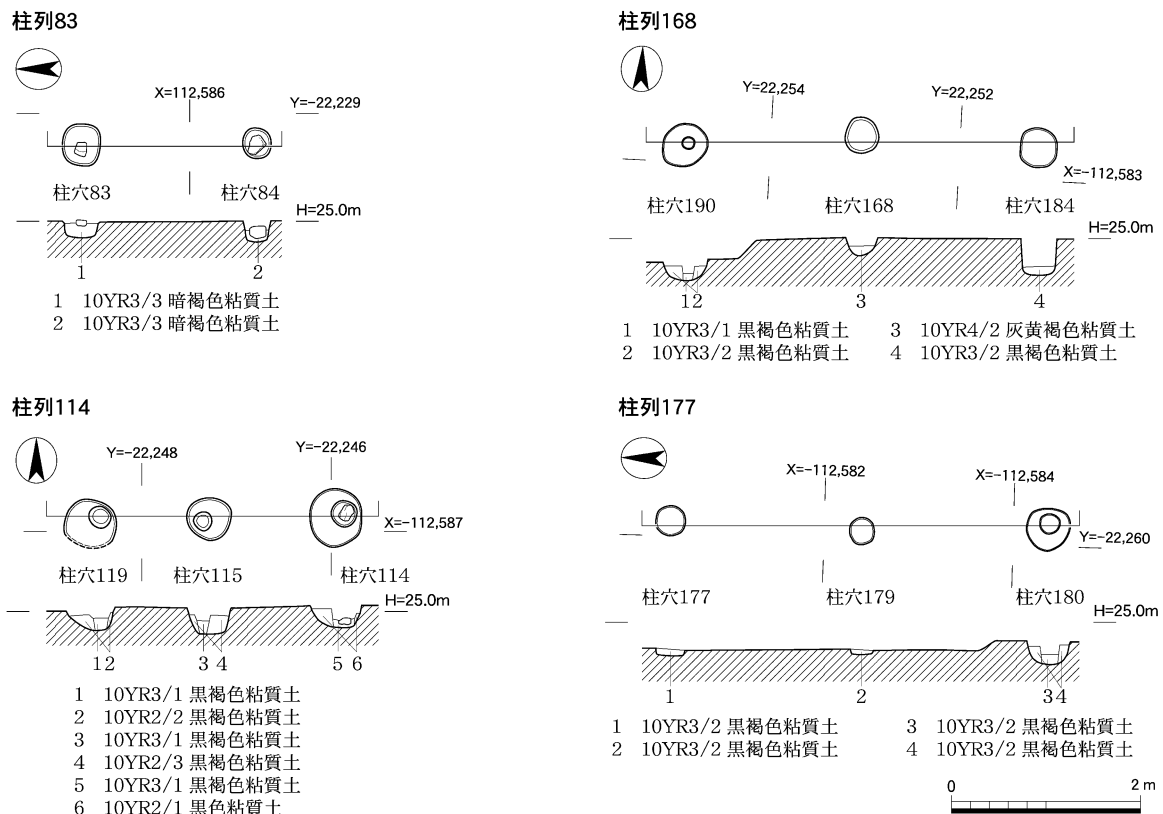


図 14 3区 柱列 83・114・168・177 実測図 (1:80)

5) 室町時代末期以降の遺構 (図版 38・90)

第1面で検出した耕作に伴う溝群である。3区北では、幅0.1～0.2 m、深さ0.05～0.15 m、検出長2.0～12.5 mの浅く長い溝である。溝群は東からY=-22,237までは東西方向を示すが、以西では南北方向を示し、分布も希薄である。3区南では、東西方向を示す溝は、調査区東部に集中する。中央部から西部かけて希薄になる。南北方向を示す溝は、調査区西部で検出した。

(4) 4区の遺構

1) 基本層序 (図版 51)

4区は他の調査区同様、旧国鉄京都駅の造成による盛土が全域に及び、厚さは近世耕作土を含め約3 mで、これらを重機掘削で排除してからの調査となった。その結果、近世耕作土直下に鎌倉時代の遺物を包含する整地土(第1面)が良好に遺存していることを確認し、この第1面から調査を行うことになった。なお、近世の遺構についても一部は記録に残した。

基本層序は近現代埋土、近世耕作土(第1層)の下に厚さ約0.1～0.15 mの鎌倉時代の包含層が堆積する。黄褐色系の砂泥(第2層)で、この上面を第1面とした。第2層下は、西部では基盤層である灰黄褐色砂礫などの砂礫層が厚さ約0.4～0.6 m堆積する。中央から東部では厚さ約0.25 m前後のにぶい黄褐色砂泥層(第2-2層)が堆積し、この上面を第2面とした。以下第3面に相当する明褐色砂泥、灰黄褐色泥砂(無遺物層)が厚さ約0.2～0.3 m程部分的に堆積する。その直下は東部同様に基盤層である砂礫層となる。なお、4区南では、基盤層である砂礫層上面のわずかな窪みに堆積した粗砂層から古墳時代の土師器細片が出土している。

2) 遺構の概要

4区は平安京左京八条三坊四町内の中央に位置し、四行八門では西二行北八門の北半部に該当する。調査において江戸時代から平安時代までの遺構を194基検出した。その種類は柱穴、土坑、溝、井戸、地業跡などである。時期的には平安時代末から鎌倉時代後期に属する遺構群が中心で、室町時代に属する明確な遺構は検出していない。第1面の遺構には江戸時代末期の遺構群がある。主な遺構には耕作溝、区画溝がある。第2面の遺構には鎌倉時代の遺構群がある。主な遺構には柱穴、土坑、溝、建物基礎の地業跡などがある。第3面の遺構には平安時代から鎌倉時代の遺構がある。確実に平安時代に属する遺構には、平安時代末期の井戸1がある。なお、近世の攪乱、鎌倉時代の遺構・整地層などで平安時代前期から中期の土器群が出土している。以下、この節では主要な遺構について、古い時期から順を追って概述していく。

3) 平安時代の遺構 (図版 48・91)

井戸167 (図版 92、図 15) 4区第3面の中央部で検出した井戸である。上層のにぶい黄褐色砂泥層(2-2層)を掘り下げた後に検出した。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状を呈する。規模は東西1.9 m、南北1.6 m、深さ0.7 m、底面標高24.1 m。埋土は上層から黒褐色砂泥、黒

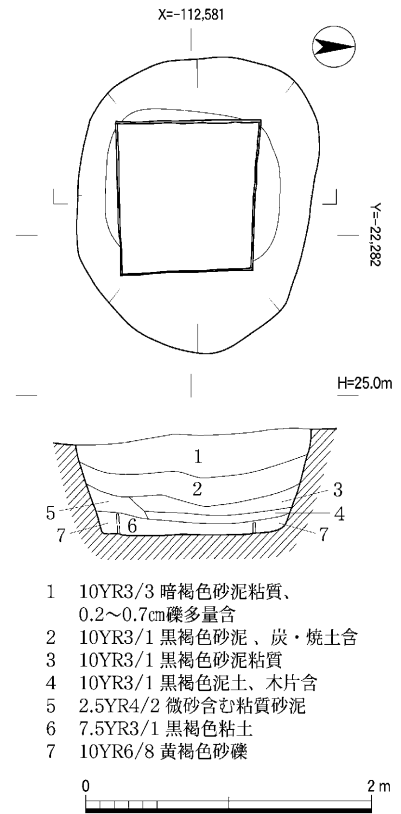
褐色粘質土・泥土、最下層は黒褐色粘土が堆積する。検出面より約 0.5 m 下で最下段の横棧を検出したことや、埋土に縦板の木片が遺存していたことから、方形縦板横棧組の井戸であったと考えられる。最下段の横棧は地山に直接据えられる。曲物などの集水施設が据えられた痕跡は検出していない。木柵は一辺約 1.0 m の方形を呈する。遺存状態は不良であるが、南辺の一部では幅 3.5 ～ 4.0 cm が確認できる。出土遺物は最下層から平安時代後期後半（12 世紀後葉）に属する土師器、瓦器、白色土器、木片が出土している。埋土上層では平安時代末期から鎌倉時代初頭（12 世紀末～13 世紀初頭）に属する土師器、瓦器、須恵器が出土している。

4) 鎌倉時代から室町時代の遺構(図版 48・49・93)

地業 106 (図版 52・53・94・95) 4 区第 2 面の東部で検出した建物基礎と考えられる遺構である。周囲に溝を巡らし、溝中に礫を用いた建物地業と盛土層からなる。北東隅は土坑 72 に、南辺部は攪乱により削平を受けており、北辺・東辺・西辺の 3 辺を検出した。検出規模は東西長約 6.8 m、南北長 4.7 ～ 5.7 m ある。方位は座標北に対し西へ約 1 度振れる。

北辺部は溝幅 1.5 ～ 1.7 m、深さ約 0.4 m、断面形は U 字状を呈する。北辺部から南側の地業内側上面では一部堅固に叩き締められた盛土層を検出した。厚さは 0.01 ～ 0.08 m ある。溝内では標高約 25.1 m 前後で最上面の石積み面を検出している。礫積み施工箇所は標高約 25.0 m 付近の中央部で検出した。径 10 cm 前後の礫を用いる。礫積みは溝内側寄りに、東西方向に幅約 0.4 m で礫を積み上げて構築する。東西端および中段より上は東・西辺に比べると礫積みは乱れる。断面観察では礫と土を相互に積み上げる状態はみられない。標高 24.7 m 前後で最下面の礫敷となり、中央部および西寄りの礫敷き面で東西方向に並ぶ礎石を 2 石検出した。掘形はなく、礫敷きとともに据え付けられたものである。礎石上面は平坦で、標高は約 25.6 m。礎石の規模は長軸 30 cm、厚さ 20 ～ 40 cm。礎石心々間は約 2.5 m ある。東寄りの礎石は土坑 72 により削平を受けたと考えられ、未検出である。

東辺部は溝幅約 1.5 m、深さ約 0.4 m、断面形は逆台形状を呈する。礫積みは溝内側寄りの南北方向に底面の礫敷上面から礫を積み上げて構築する。北端部は乱れる。礫積み内は粗砂を含む砂泥層が堆積し、礫は少ない。礫積みは幅約 0.3 m、高さ 0.35 m あり、礫敷面から径 10 cm 前後の礫を垂直に 4 段積み上げる。礫積みから東西肩口までは密に礫を詰める。断面観察では礫間に厚さ 0.01 m 前後粗砂を敷き、礫積みを下から構築する過程で両肩口間にも礫を詰め粗砂を敷く工程を繰り返した状況が窺える。礫積み内の礫敷き面で南北方向に並ぶ礎石を 2 石検出した。据



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥粘質、0.2～0.7cm礫多量含
- 2 10YR3/1 黒褐色砂泥、炭・焼土含
- 3 10YR3/1 黒褐色砂泥粘質
- 4 10YR3/1 黒褐色泥土、木片含
- 5 2.5YR4/2 微砂含む粘質砂泥
- 6 7.5YR3/1 黒褐色粘土
- 7 10YR6/8 黄褐色砂礫

図 15 4 区 井戸 167 実測図(1:50)

付方法は北辺部と同様である。礎石上面は平坦で、長軸 0.2 ～ 0.3 m、礎石心々間は約 2.2 m ある。

西辺部は溝幅 1.4 ～ 1.5 m、深さ約 0.4 m、断面形は逆台形状を呈する。礫敷や礫積みの工程は東辺部と同様である。北半は礫敷き・礫積みとも乱れる。礎石想定箇所も削平を受け礎石は未検出である。礫積み北延長には北辺部の西側礎石が位置する。

東・西辺部の底面礫敷で作業単位と考えられる石列を検出した。石列は肩口に直交し、礫の長軸を合わせることで目印とする。東辺部では X=-112,585.6、西辺部では不鮮明であるが X=-112,584.9 で検出した。上部では未検出のため、底面の礫敷き工程における作業単位と考えている。

南辺部は未検出であるが、底面に遺存していた礎石を基に全体規模を復元すると、東西方向は 2.5 m の等間で 2 間、南北は 2.2 m の等間で 3 間（ないしそれ以上）の柱間を有する南北方向の構造物基礎であり、2 間×3 間とした場合の全体規模は、東西幅約 6.8 m、南北幅約 8.9 m となる。

なお、礫積み溝の構造的な位置付けには至らないが、上部構造内部に水分の影響が及ばないための水切りのような目的が想定できる。また、礫積み内の状況については、立柱後は粗砂を主体とする砂泥や礫で埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は細片が多く、少量の鎌倉時代（13 世紀代）に属する土器類、瓦などが出土している。

溝 201（図版 92） 4 区第 3 面の東端部で検出した南北方向の溝である。断面形は U 字状を呈する。幅 1.5 ～ 1.8 m、深さ 0.4 ～ 0.5 m。埋土上層には大礫が多量に含まれる。溝の位置は西二行と西三行との境界上にあり、区画溝と考えられる。出土遺物は少量の鎌倉時代（13 世紀代）に属する土器類が出土している。

溝 212（図版 92） 4 区第 3 面の東部、溝 201 から約 3 m 西で検出した南北方向の溝である。断面形は浅い U 字状を呈する。検出規模は南北長約 2.7 m、幅 0.6 ～ 0.75 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m ある。溝底面は南半が 1 段深くなる。検出面から、鎌倉時代前期の遺構と考えている。

土坑 154（図版 54） 4 区第 2 面の東部で検出した土坑である。平面形は円形。検出規模は東西約 1.4 m、南北 0.7 m、深さ約 0.5 m。埋土は暗褐色砂泥、灰褐色砂泥が堆積する。出土遺物は鎌倉時代前期（13 世紀前葉）に属する土器類が出土している。

土坑 122（図版 55） 4 区第 2 面の中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形。検出規模は東西約 0.78 m、南北 0.65 m、深さ約 0.18 m。埋土は上層が灰黄褐色砂泥、下層が黒褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期（13 世紀前葉～中葉）に属する土器類が出土している。

土坑 133（図版 55） 4 区第 2 面の中央部、整地層 112 の下層で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、南半部は土坑 124 により削平される。検出規模は東西約 1.4 m、南北 1.0 m、深さ約 0.4 m。埋土は暗オリーブ褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期（13 世紀前葉～中葉）に属する土器類、瓦が出土している。

Pit92（図版 54） 4 区第 2 面の中央部で検出した Pit である。平面形は楕円形。検出規模は径約 0.5 m、深さ約 0.09 m。埋土は小礫と土師器を多量に包含する黒褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期（13 世紀中葉）に属する土器類が出土している。

土坑 99 (図版 55) 4区第2面の中央部南端で検出した土坑である。整地層 112 上面で検出した。平面形は楕円形で、南半部は攪乱により削平される。検出規模は東西約 1.9 m、南北 0.9 m 以上、深さ約 0.2 m。埋土は灰黄褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土師器が多量に出土している。

土坑 101 (図版 54) 4区第2面の中央部南端、土坑 99 に隣接する土坑である。土坑 99 同様に整地層上面で検出した。平面形は円形で、南半部は攪乱により一部削平される。検出規模は径 0.7 m、深さ約 0.15 m。埋土は灰黄褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土器類が出土している。

土坑 120 (図版 55) 4区第2面の中央部で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形。検出規模は東西約 1.4 m、南北 1.1 m 前後、深さ約 0.4 m。埋土は上層に暗オリーブ褐色砂泥、下層に礫を多量に含んだ暗灰黄色砂泥が堆積する。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土器類が出土している。

土坑 176 (図版 54) 4区第2面の東部で検出した土坑である。平面形は楕円形。検出規模は東西約 0.75 m、南北 0.65 m、深さ約 0.2 m。埋土は灰黄褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土器類、瓦が出土している。

整地層 100 4区第2面の中央部で検出した整地層である。検出規模は南北幅約 6.0 m、深さ約 0.15 m 前後。底面は緩やかに東へ傾斜する。埋土は黒褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土師器が出土している。

整地層 112 4区第2面の中央部南端で検出した整地層である。北半の平面形は歪な楕円形状を呈する。深さは約 0.1 m と浅く、南へ広がる。埋土は灰黄色砂泥。出土遺物は鎌倉時代前期 (13 世紀中葉) に属する土器類が出土している。

土坑 124 (図版 55) 4区第2面の中央部南端、整地層 112 の下層で検出した土坑である。平面形は歪な方形で、南半部は土坑 99 により削平される。検出規模は東西約 3.2 m、南北 1.9 m、深さ約 0.3 m。埋土は灰黄褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代後期 (13 世紀後葉) に属する土師器が多量に出土している。

土坑 72 (図版 55) 4区第2面の東部で検出した、平面形がほぼ円形の土坑である。検出規模は東西 3.0 m、南北 3.3 m、深さ 0.9 m。埋土は上層に灰黄褐色砂泥、褐色砂泥が主体となり、多量の拳大の礫を包含する。下層は黒褐色粘質土層が堆積し、上層に見られた礫は非常に少ない。地業 106 の廃絶後に、地業 106 を削平した土層を投棄した遺構と考えられる。出土遺物は鎌倉時代 (13 世紀代) の遺物が多く見られるが、下層・上層ともに少量の 14 世紀代前葉の遺物が混入することから、鎌倉時代後期に属する遺構と考えている。

土坑 84 4区第2面の東端部で検出した、土坑 72 に隣接する土坑である。土坑 72 と同様の目的の土坑と考えられるが、前者ほど土層に礫は混じらない。検出規模は東西 1.6 m、南北 3.2 m、深さ 0.9 m。埋土は黒褐色砂泥・粘質土である。出土遺物は鎌倉時代 (13 世紀代) の遺物が多く見られるが、14 世紀代前葉の遺物が混入することから、鎌倉時代後期に属する遺構と考えている。

土坑 36 (図版 55) 4区第2面の中央部で検出した土坑である。平面形は円形。検出規模は径約 0.95 m、深さ約 0.25 m。埋土は灰黄褐色砂泥色である。出土遺物は鎌倉時代後期(13世紀後葉～14世紀前葉)に属する土器類、瓦が少量出土している。

Pit53 (図版 54) 4区第2面の西部の北寄りで検出した Pit である。平面形は楕円形。検出規模は東西約 0.47 m、南北 0.35 m、深さ約 0.3 m。埋土は上層に焼土・炭を含んだ灰黄褐色砂泥と下層が礫を含んだ黒褐色砂泥。上面には径約 20 cm、厚さ 5 cmの小振りな根石が遺存する。出土遺物は土師器小片のみであるが、鎌倉時代後期(13世紀後葉～14世紀前葉)に属する。

Pit135 (図版 54) 4区第2面の西部の南寄りで検出した Pit である。平面形は円形。検出規模は径 0.34 m、深さ約 0.26 m。埋土は暗褐色砂泥。底面に径約 15 cmの根石が遺存する。出土遺物は鎌倉時代後期(13世紀後葉～14世紀前葉)に属する土師器や東播系須恵器鉢が出土している。

溝 80 4区第2面の中央部で検出した東西方向の溝である。主軸方向は西に対し北へ 4.2 度振れる。検出規模は東西長約 22.0 m、幅 0.7～0.9 m、深さ約 0.1 m。溝底面は約 0.1 mの高低差で東に傾斜する。埋土は炭・焼土を含む灰黄褐色砂泥。溝の形状は第1面遺構の小溝群に似るが、近世遺物は含まない。出土遺物は鎌倉時代後期(14世紀前葉)に属する。

柵 1 (図版 54) 4区第2面の西部、溝 80 の北肩で検出した柱穴 6 基からなる柵である。平面形は楕円形。検出規模は径 0.3～0.6 m、深さ 0.05～0.28 m。柱間間隔は 1.6～1.8 mあり、西側 3 基は主軸方向から南へ約 0.3 mずれる。これらは溝肩に位置することから護岸の柱列などが考えられる。出土遺物は鎌倉時代後期(14世紀前葉)に属する土師器が少量出土している。

土坑 35 (図版 55) 4区第2面の中央部南端で検出した土坑である。平面形は半円形で、南半部は攪乱により削平される。検出規模は東西約 1.7 m、南北約 0.7 m、深さ約 0.58 m。埋土は黒褐色砂泥。出土遺物は鎌倉時代後期から室町時代初頭(14世紀前葉～中葉)に属する土器類が出土している。

5) 江戸時代の遺構 (図版 50・96)

溝 1 4区第1面の北部で検出した、東西方向を示す区画溝で、4区の西端から東端付近まで連続する。方位は座標西に対し北へ約 4 度振れる。検出規模は幅約 0.25 m、深さ約 0.25 m、溝底面はわずかに西に傾斜する。中央部から以東は約 3.4 mから約 4 m間隔で南北方向の溝と連続する。埋土は暗褐色砂泥で、陶磁器類、栗石を多量に包含する。出土遺物には施釉陶器、染付、磁器、焼締陶器、土製品などがあり、江戸時代末期に属する遺物が多数出土している。

溝 2～9 4区第1面の北部で検出した、東西方向を示す溝である。振れは溝 1 同様の傾きをもつ。規模は幅 0.25 m、深さはいずれも 0.05 m前後ある。出土遺物には江戸時代末期に属する遺物が少量ある。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱にして410箱分が出土した。古墳時代後期から室町時代に至る土器類、瓦類、土製品、木製品、金属製品、石製品などの遺物がある。

古墳時代後期の遺物は、基盤層である砂礫層上層に相当する土層から土器類が出土している。

平安時代前期から中期の遺物は、後世の遺構や整地土層などに混入して出土しており、分布傾向としては1区湿地189のほか、概して3・4区の整地土層からの出土量が多い。平安時代後期の遺物は、第3面の遺構や整地土層から土器類、瓦類、土製品、木製品、金属製品、石製品などが多量に出土している。

中世の出土遺物は、鎌倉時代の遺物が主体となり、第2面の遺構から土器類、瓦類、土製品、木製品、金属製品、石製品などが出土している。土器類の中では特に土師器が各遺構から多量に出土した。室町時代の遺物は、相対的に少量であるが、第2面の遺構から出土している。

近世の遺物は、第1面で出土している。大半は溝から出土した染付などの施釉陶磁器で、他には瓦、土製品、金属製品、石製品がある。

以下、古い時期から順を追って各時期の土器類を概説する。

(2) 平安時代の土器類

3区泉443出土土器(図版56・97) 3区泉443出土土器の総破片数は1,209片あり、種類

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨		土師器83点、黒色土器3点、須恵器3点、白色土器1点、緑釉陶器10点、灰釉陶器6点、輸入陶磁器7点、軒丸瓦30点、軒平瓦36点、銭貨2点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、白色土器、灰釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、木製品、銭貨、壁土、円礫		土師器425点、須恵器25点、瓦器33点、白色土器2点、灰釉陶器1点、焼締陶器2点、輸入陶磁器32点、軒平瓦1点、石製品4点、木製品4点、銭貨3点、壁土、円礫		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、硝子製品、石製品、木製品、銭貨		土師器9点、須恵器5点、瓦器12点、焼締陶器3点、輸入陶磁器1点、硝子玉1点、石製品1点、漆器1点、木製品1点、銭貨3点		
合 計		464箱	752点(26箱)	180箱	258箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より54箱多くなっている。

は土師器 (94.4%)、須恵器 (1.5%)、黒色土器 (0.1%)、緑釉陶器 (0.2%)、白色土器 (0.2%)、輸入陶磁器 (2.2%)、瓦器 (1.5%) である。出土遺物はIV期新相～V期古相 (11 世紀後葉～12 世紀初頭) に属する。土師器には皿 Ac (10)、皿 N 小 (1～9)、皿 N 大 (11～13) がある。10 は口径 10.5 cm。1～9 は口径 9.8～11.0 cm。11～13 は口径 14.4～15.0 cm で、口縁端部がやや外反し体部が2段ナデでIV期の手法がみられるもの (11)、やや深めのもの (12・13) などがある。輸入陶磁器には口径 11.3 cm のやや小型の白磁皿 (14)、口径 12.8 cm の白磁皿 (15) で内面下半に片切り彫りで花文を配するものなどがある。

1 区溝 416 出土土器 (図版 56) 1 区溝 416 出土土器の総破片数は 415 片あり、種類は土師器、須恵器である。須恵器壺の 1 片を除くと、他はすべて土師器皿である。出土遺物はV期古相 (11 世紀末～12 世紀初頭) に属する。土師器皿には皿 N 小 (16)、皿 N 大 (17・18) などがある。16 は口径 9.4 cm。17・18 は口径 14.0～14.6 cm で、18 はやや器高が高い。

1 区土坑 393 出土土器 (図版 56) 1 区土坑 393 出土土器の種類には土師器、瓦器、白色土器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はV期古相～中相 (11 世紀末～12 世紀前葉) に属する。土師器には皿 Ac (21)、皿 N 小 (19・20) などがある。21 は口径 9.8 cm。19・20 は口径 8.0～9.9 cm。瓦器には椀・火鉢、白色土器には椀・皿、須恵器には鉢・甕、輸入陶磁器には緑釉陶器盤などがあるが、いずれも小片である。

3 区土坑 448 出土土器 (図版 56) 3 区土坑 448 出土土器の総破片数は 106 片あり、すべて土師器である。内比率は杯椀皿類 (98.1%)、器形不明品 (1.9%) である。出土遺物はV期古相～中相 (11 世紀末～12 世紀前葉) に属する。大半が小片で、図示できた皿 N 小 (22～25) は口径 9.4～10.6 cm、器高 1.4～1.8 cm。口縁端部が明瞭に立ち上がるもの (22・24) がある。

1 区建物 146 出土土器 (図版 56・97) 1 区建物 146 関連 (整地層・雨落溝・地業) の出土土器の総破片数 (表 7-1) は 3,936 片あり、種類は土師器 (98.6%)、瓦器 (0.3%)、須恵器 (0.5%)、白色土器 (0.2%)、焼締陶器 (0.4%)、輸入陶磁器 (0.1%) である。出土遺物はIV期新相～V期新相 (11 世紀後葉～12 世紀後葉) に属する。土師器には皿 Ac (26)、皿 N 小 (27～38)、皿 N 中 (39)、皿 N 大 (40～42) がある。26 は口径 9.8 cm。27～38 は口径 9.6 cm 前後。口縁部が立ち上がるものと、丸くおさまるものがある。39 は口径 11.0 cm、40～42 は口径 14.4 cm 前後。口縁部は立ち上がるものと、古い様相を呈してわずかに外反するものがある。42 は直立気味で深い皿である。調整はいずれも2段ナデが明瞭である。輸入陶磁器の白磁には椀 (43) 小片がある。扁平な玉縁の口縁部を有する。

2 区落込 361 出土土器 (図版 56・98) 2 区落込 361 出土土器の総破片数は 1,670 片あり、種類は土師器、黒色土器、須恵器、白色土器などである。内比率は土師器椀皿類が 99.5% を占める。出土遺物はV期 (11 世紀末～12 世紀後葉) に属する。土師器には皿 Ac (44～46)、皿 N 小 (47～58)、皿 N 大 (59～70) がある。44～46 は口径 9.2～10.0 cm、器高 1.0～1.3 cm。47～57 は口径 9.3～10.0 cm、器高 1.5～2.5 cm、58 はやや深めの器形で口径 9.9 cm、器高 2.5 cm。59～70 は口径 13.8～15.5 cm、器高 2.6～3.4 cm。これらは口縁部に2段ナデが認められるも

のから、口縁端部が立ち上がり、断面三角形状を呈するものまでV期全体の様相をよく示す資料である。他に小片であるが、土師器には甕、黒色土器には椀、須恵器と白色土器には杯類などがある。

1区柱穴65出土土器(図版56、図16) 1区柱穴65(柱列6)の出土土器の種類には土師器、瓦器、輸入陶磁器の瓶(71)がある。瓶は磁州窯系の緑釉白地黒掻落し牡丹文瓶の破片である。全体に白化粧の後、鉄絵具を掛け、その鉄絵具を掻き落として白地に黒の牡丹文を表す。後に緑釉を掛け低火度で焼成される。緑釉掛けしたものは出土例が少ない。共伴する土師器にはVI期中相(13世紀前葉)に属する皿の小片が出土しているが、他の類例から12世紀代に属すると考えられる。



図16 1区柱穴65出土
緑釉白地黒掻落し牡丹文瓶

1区建物160出土土器(図17) 1区建物160関連(整地層・雨落溝・地業)の出土土器の総破片数は827片あり、種類は土師器(95.9%)、瓦器(0.6%)、須恵器(3.0%)、白色土器(0.5%)である。出土遺物はV期新相(12世紀後葉)に属する。整地土層からの出土が多く、破片数の割には接合遺物が少ない。土師器には皿N大(75・76)、皿N小(72~74)がある。皿N大は口径15.0cmで、雨落溝出土の76は2段ナデ調整が明瞭である。皿N小は口径10.0cm前後。白色土器には椀(77)の底部がある。ロクロ成形され、底部に糸切り痕跡が残る。須恵器には山茶椀系の椀(78)がある。口縁部は外反し端部は玉縁状。底部内面には墨痕が付着し、貼り付け高台には粘殻痕が残存する。

2区路面150-2出土土器(図版99、図17) 2区路面150-2出土土器の出土量は、ごく少量である。出土遺物はV期新相(12世紀後葉)に属する。土師器にはコースター型皿Ac(79)と皿N大(80)、輸入陶磁器には白磁椀(81)がある。79は最大径10.7cmと大きく、器高は1.1cmと低い。80は口径14.2cm、器高3.3cm。口縁部は立ち上がり丸くおさめる。調整は2段ナデ

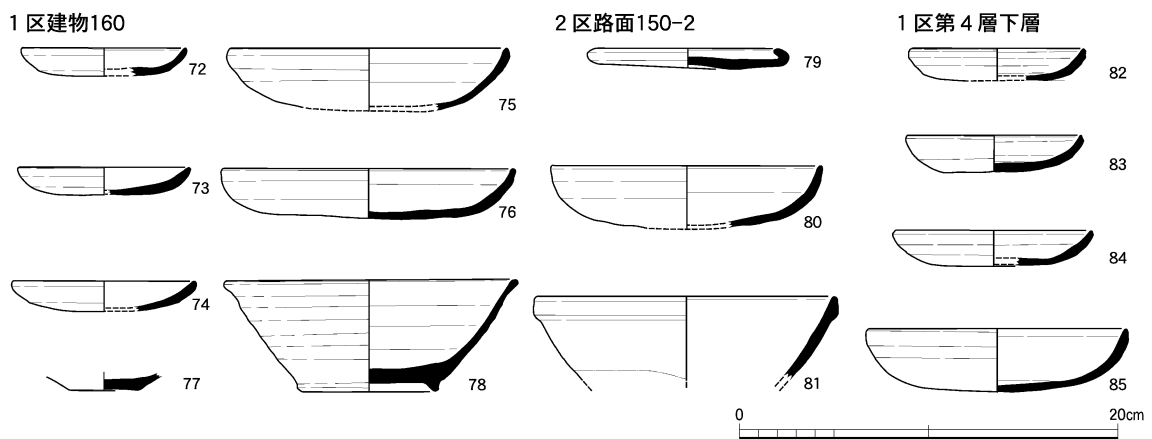


図17 1区建物160・第4層下層、2区路面150-2出土土器実測図(1:4)

が明瞭である。81は扁平な玉縁状の口縁部を有する。

1区第4層下層出土土器（図版99、図17） 1区第4層下層出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器などがある。出土遺物はV期中相～新相（12世紀前葉～後葉）に属する。土師器には皿N小（82・83）、皿N中（84）、皿N大（85）などがあり、他に甕の小片がある。82・83は口径9.4～9.5cm、84は口径10.6cm、85は口径13.9cm。瓦器には椀・皿、白色土器には杯・高杯、須恵器には杯・壺・鉢・甕、緑釉陶器には椀、灰釉陶器には壺などがである。

4区土坑74・第2層出土土器（図18） 鎌倉時代の4区土坑74および遺物包含層（4区第2層）より混入出土した平安時代前期の緑釉陶器である。椀（87・88）、稜椀（86）、輪花皿（89）などがある。89は胎土が硬質で、淡緑色釉が全釉される。丁寧に成形・調整され、内面にはミガキ調整が施される東海産の輪花皿である。86は体部下位に屈曲部をもつ。胎土が硬質で、淡緑色釉が施される。底部内面には限りミガキ調整が施される。高台は粗く削り出された輪高台を有する。87は胎土が硬質で、高台外端面を除き淡緑色釉が施される。内面には一次焼成の重ね痕跡が残る。高台は粗く削り出された輪高台を有する。88は胎土が硬質で、暗緑灰色釉が高台裏を除き施される。丁寧に成形・調整され、内面にはミガキ調整が施される。底部内面には一次焼成の重ね痕跡が残る。高台は丁寧に削り出された蛇の目高台を有する。これらの緑釉陶器はII期古相～中相（9世紀中葉～後葉）に属する。

3区第2層出土土器（図版99、図18） 鎌倉時代の整地層（3区第2層）より混入出土した平安時代前期から中期の土器群である。図示できたものは土師器杯B（106）・甕（102）、須恵器杯B（103）、黒色土器椀（104、105）・甕（107）、緑釉陶器皿（90）・椀（91～95）、灰釉陶器耳皿（96）・椀（97～101）などがある。106は体部外面にミガキ調整が残る。102は胎土が赤褐色を呈する河内系の甕。103は口径12.0cmの小型の杯に属する。104・105はいずれもA類で、内面にはミガキ調整が残る。107は口縁部が屈曲して外方へ開くもので、内面から外面肩部付近までは黒化している。緑釉陶器はいずれも底部片である。90は胎土が軟質で、淡緑色釉が全釉されるが磨滅が激しい。高台は蛇の目高台を呈し、底部外面中央部には直線のヘラ記号が刻まれる。91は胎土が硬質で、淡緑灰色釉が全釉される。比較的丁寧に成形・調整され、内面にはミガキ調整が残る。高台は中央が持ち上がった平高台を有し、底部外面に十字状のヘラ記号が刻まれる。92は胎土が硬質で、淡緑灰色釉が全釉される。ミガキ調整の痕跡は見られない。高台は平高台を有し、直線状のヘラ記号が一部に見られる。93は胎土が硬質で、淡緑灰色釉が全釉される。内面には密ではないがミガキ調整が残る。高台は削り出しの低い輪高台を有する。90～93はいずれも山城産の緑釉陶器で、II期古相～中相（9世紀中葉～後葉）に属する。東海系の緑釉陶器には椀（94・95）がある。94は胎土が硬質で、淡緑色釉が全釉される。丁寧に成形・調整され、内面にはミガキ調整が残る。高台は貼り付けの角高台を有する。95は胎土が軟質で、淡緑色釉が全釉される。ミガキ調整の痕跡は見られない。高台は貼り付けの角高台を有する。灰釉陶器は100・101を除きいずれも底部片である。96は内面から外面の折り曲げ部に施釉される。高台は低く丸みをもった角高台が貼り付けられる。100・101はいずれも薄手に成形され、101には内面口

縁部に沈線が巡る。漬け掛けにより体部内外面に施釉されるが、釉は発色不足である。高台は接地面が丸くおさまる高めの高台が貼り付けられる。100・101は10世紀代（Ⅱ期新相～Ⅲ期新相）に属する東濃系と考えられる。

3区第2・3層出土土器（図版99、図18）鎌倉時代の整地層（3区第2・3層）より混入出土した平安時代中期後半代の土器群である。図示できたものは土師器皿A（108）・皿N（109・110）、須恵器椀（113）、輸入陶磁器青磁皿（111・112）などがある。108は口径11.0cm、器高1.9cm。器壁は厚い。109・110は2段ナデ痕跡が明瞭に残り、口縁部端部は外反する。113はロクロ痕跡が明瞭に残る。器壁は薄手で口縁端部は外反する。高台はハの字状に開く貼り付け高台。東播系の須恵器と考えられる。111・112は同安窯系の青磁皿。体部中位で口縁部が屈曲する形態の皿である。内面には片彫文、櫛点描文が施される。111は外面下半部を除き施釉。112は施釉された後に、高台裏を釉剥ぎされる。これらの土器はⅣ期中相～新相（11世紀中葉～後葉）に属する。

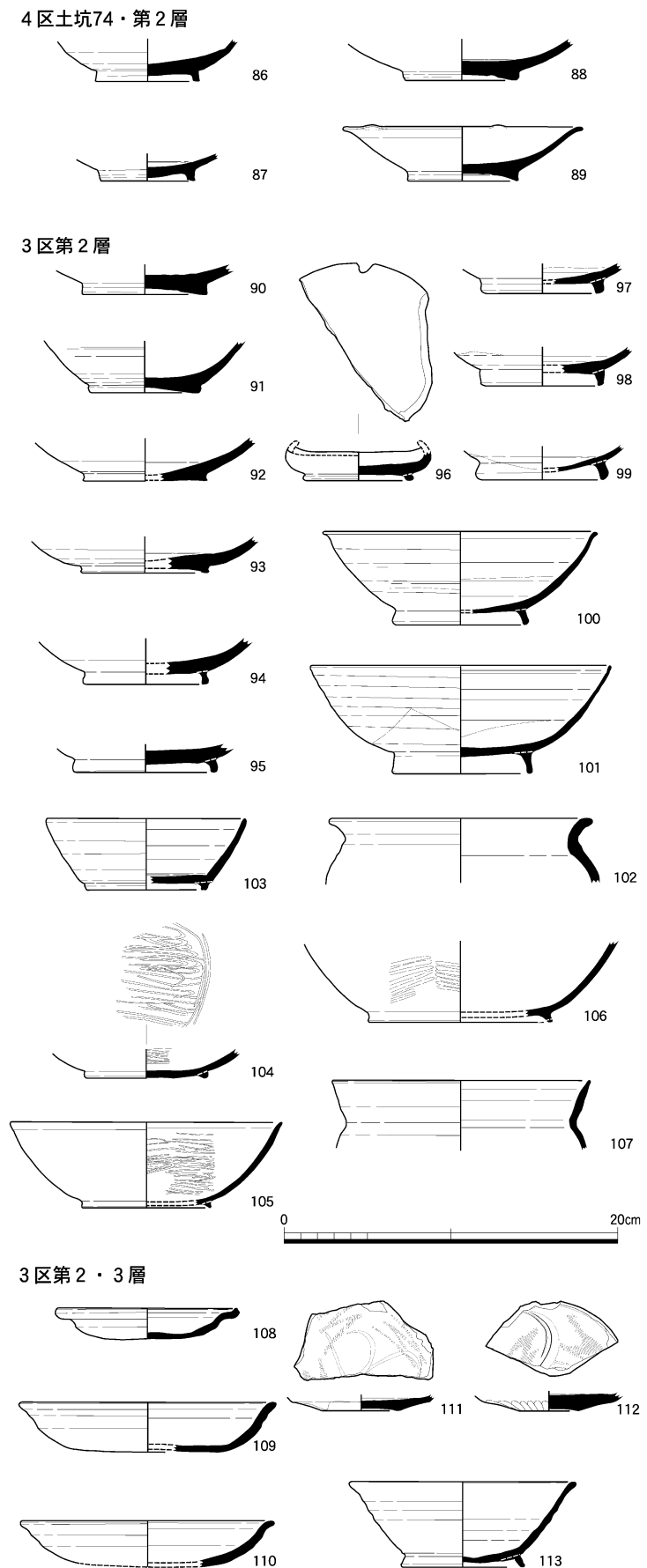


図18 3区第2・3層、4区土坑74・第2層出土土器実測図（1：4）

(3) 鎌倉時代の土器類

1区井戸 252 出土土器 (図版 100、図 19) 1区井戸 252 出土土器の総破片数は 136 片あり、種類は土師器 (39.0%)、瓦器 (31.6%)、須恵器 (29.4%) である。出土遺物は V 期新相～VI 期古相 (12 世紀後葉～13 世紀初頭) に属する。土師器は皿類が中心的であるが、大半が小片である。他には図示できた土師器羽釜 (115) がある。口径 28.0 cm、残存高 27.9 cm、体部が強く膨らみ、口縁部は内湾する。瓦器には椀・皿・鍋・釜、須恵器は鉢・甕などがある。図示した甕 (114) は須恵質系陶器で、口径 27.6 cm、残存高 31.5 cm。114・115 は曲物内から出土した。

1区井戸252

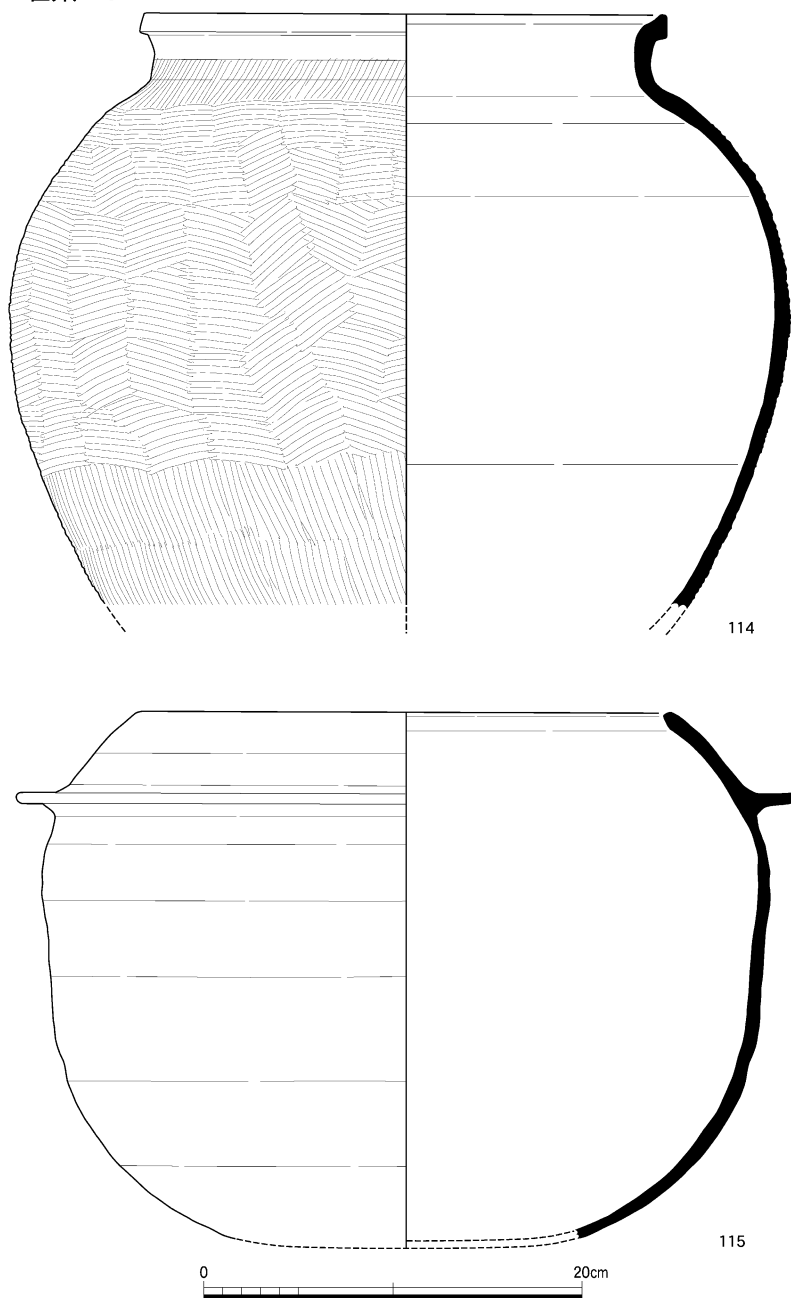


図 19 1区井戸 252 出土土器実測図 (1 : 4)

1区土坑 137 出土土器 (図版 57・100、図 20)

1区土坑 137 出土土器の総破片数 (表 7-2) は 6,032 片あり、種類は土師器 (98.6%)、瓦器 (0.4%)、須恵器 (0.3%)、焼締陶器 (0.5%)、輸入陶磁器 (0.1%) である。土師器皿が大半を占める。出土遺物は V 期新相～VI 期古相 (12 世紀後葉～13 世紀初頭) に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 99.8 % を占める。土師器には皿 N 大 (127～140)、皿 N 小 (116～126)、鉢 (141) がある。127～140 は口径 13.9 cm 前後と 14.3 cm 前後のものがある。132 は器高が 3.0 cm を超える深みのある皿 Nd。口縁部は断面三角形形状のものと丸くおさめるものがあり、体部は直線的なものと丸みをもつ

ものがある。116～126は口径9.0cm前後と9.0cm後半台がある。後半台のものは仕上げのナデ上げ調整により口縁部に歪みをもつ。141は口縁部が大きく開く。体部には粘土巻き上げ成形の痕跡が明瞭に残る。瓦器には椀(142・143)、火鉢(144)がある。142・143は内面口縁部下端に沈線が巡る。内面には平行にミガキ調整が残る。須恵器には東播系の鉢(145)がある。内面下半は使用痕で円滑である。焼締陶器には常滑産の甕(146)がある。

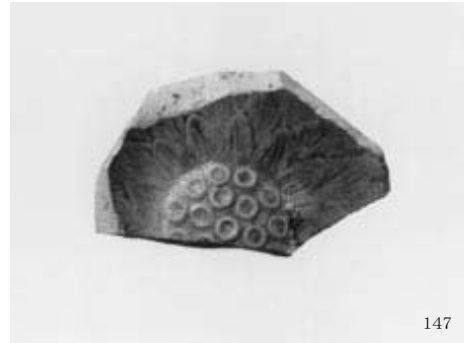


図20 1区土坑137出土輸入緑釉皿

大型で口径約50.2cm、残存高17.6cm。口縁部は折り返されて方形状を呈する。輸入陶磁器には褐釉壺(148)、緑釉皿(147)がある。148はすぼまる口縁部に短く屈曲する端部を有する。胴部中央が張り、上半部に波状の凹線を施す。釉は失透気味で明瞭ではない。147は陶胎の緑釉皿である。釉は高台外端面以外に施され内面には花文が型押しされる。産地は華南産系と考えられる。

2区井戸55出土土器(図版57) 2区井戸55出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器があるが、ごく少量である。出土遺物はV期新相～VI期古相(12世紀後葉～13世紀初頭)に属する。土師器には掘形出土の皿N小(149)がある。口径9.6cm、器高1.5cm。瓦器の羽釜脚部(150)、須恵器の東播系鉢(151)は木柵内から出土した。

2区石敷180出土土器(図版57) 2区石敷180出土土器の種類には土師器、須恵器などがある。整地に使用された礫層のため土器類はごく少量である。出土遺物はV期新相～VI期古相(12世紀後葉～13世紀初頭)に属する。土師器皿には皿N小(152)がある。口径9.4cm、器高1.6cm。口縁端部は直立気味に立ち上がる。高杯(153)は11面体に面取りされた脚部である。

4区井戸167出土土器(図版57・101) 4区井戸167出土土器の種類には土師器、瓦器、白色土器、須恵器、黑色土器、輸入陶磁器などがあるが、遺物量は少なく図示できるものも少ない。出土遺物はV期新相～VI期古相(12世紀後葉～13世紀初頭)に属する。土師器には皿N大(154)がある。口径14.6cm、器高2.9cm。口縁部は丸くおさめてわずかに内傾する。外面には2段ナデ調整が残る。瓦器には椀(155)がある。口径15.0cm、器高5.1cm。内面には底部を除き密な暗文が施される。白色土器にはロクロ成形の小杯(156)があり、井戸の木柵直上で出土した。口径7.5cm、器高2.6cm。底部には糸切り痕が明瞭に残る。口縁部内面には「白散」と書かれた墨書がある。白散とは、正月にその年の健康を願って飲む薬酒のひとつで、『和漢三才図会』造酒類に嵯峨天皇が弘仁年中(810～824)に儀式のなかで飲まれたと記載されている。出土例としては、平安時代後期の鳥羽離宮跡でも白散と墨書された容器の蓋が出土している。輸入陶磁器には白磁の壺(157)があり、壺の底部である。157は埋土最上層から、154～156はいずれも最下層の木柵内と木柵直上で出土した。

3区泉241出土土器(図版101、図21) 3区泉241出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。大半は整地に利用された瓦片で土器類はごく少量であった。出土遺物はVI期古相(12世紀末～13世紀初頭)に属する。土師器には皿Nがある。皿N大(165

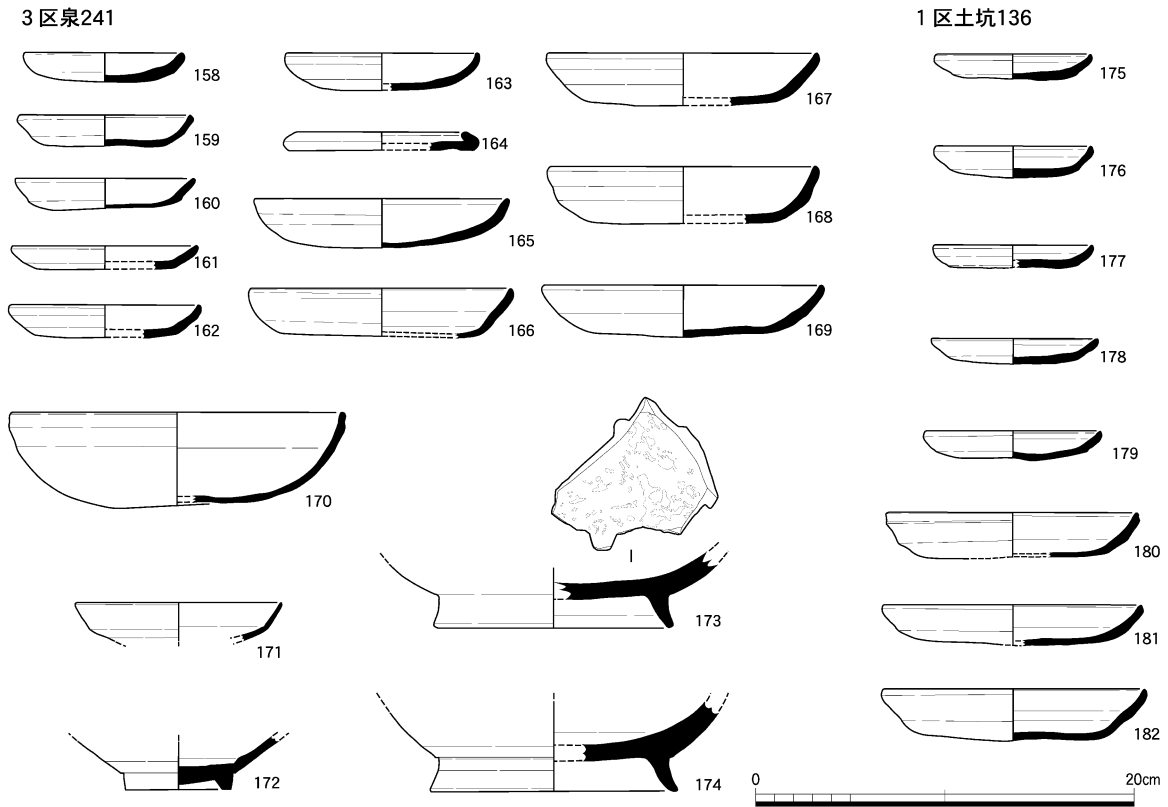


図21 1区土坑136、3区泉241出土土器実測図(1:4)

～169)は口径13.5～15.0 cm。口縁端部は丸くおさめられる。皿N大(170)は口径が約17.8 cm、器高5.1 cmで大型の皿である。口縁部は直立気味に立ち上がり丸くおさめる。いずれも2段ナデ調整の痕跡が残るが170以外は明瞭ではない。皿N小(158～163)は口径8.5～10.3 cm。163の底部内面には漆が付着する。皿Ac(164)は口径10.4 cm。須恵器には高台付きの鉢(173)がある。内面は円滑で漆が付着する。灰釉陶器には壺(174)がある。高台径13.0 cm。輸入陶磁器には白磁皿(171)、青磁椀(172)がある。172は高台径5.6 cm。

1区土坑136出土土器(図版101, 図21) 1区土坑136出土土器の総破片数(表7-3)は1,264片あり、種類は土師器(99.7%)、瓦器(0.2%)、須恵器(0.2%)である。出土遺物はVI期古相～中相(12世紀末～13世紀前葉)に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが99.4%を占める。図示できたものは皿Nに限られる。皿N大(180～182)は口径13.7 cm前後。口縁部は断面三角形のもの、丸くおさめるものがある。皿N小(175～179)は口径8.7 cm前後。

1区土坑86出土土器(図版58・101・102) 1区土坑86出土土器の総破片数は2,826片あり、種類は土師器(99.2%)、瓦器(0.1%)、須恵器(0.5%)、焼締陶器(0.2%)で、土師器皿Sは2片含まれる。出土遺物はVI期中相(13世紀前葉)に属する。土師器には皿N、皿Ac、鉢がある。皿Ac(200・201)は口径8.5 cm。皿N大(192～199・202)は口径13.4 cm前後と14.2 cm前後のグループがあり、口径に対して深みのある皿Nd(197・202)がある。口縁部は断面三角形で端部外面に凹みを有するものと、丸くおさめるものがある。体部は直線的に開くものが多く、195・196・198は乙訓系と考えられる形態である。皿N小(183～191)は口径9.0 cm前後。口径が10.0 cmの191もある。鉢(203・204)は粘土巻き上げ成形の痕跡が明瞭に残る。須恵器

には鉢（206・207）、甕（205）がある。206・207はいずれも東播系で、体部内面には使用痕があり円滑である。

1区土坑102出土土器（図版58・102） 1区土坑102出土土器の総破片数は818片あり、種類は土師器（99.8%）、須恵器（0.1%）、輸入陶磁器（0.1%）である。須恵器甕1片、輸入白磁碗1片以外は、すべて土師器碗皿類である。出土遺物はVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが82.8%を占める。皿N大（224～230）は口径12.5cm前後。口縁部は丸くおさめられる。体部は直線的なもの、丸みをもって立ち上がるもの（228・230）があり、後者は器壁が厚い。皿N小（208～223）は口径8.7前後。皿SにはSn（231～237）、S大（242～244）、S中（241）、S小（238～240）がある。皿Snは口径10.0cmの大きいものと口径9.0cm前後のものがある。皿S中は口径10.2cmで形態が丸みを呈するもので、後出する皿S系の様相がある。皿S大は口径13.0cm前後、器高が3.3cm前後ある深みのある皿が揃う。輸入陶磁器は白磁碗（245）の底部片である。一部は底部内面まで釉が施される。

1区土坑145出土土器（図版102、図22） 1区土坑145出土土器は土師器に限られる。出土遺物はVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器皿には皿N大・小があり皿Sは含まれない。皿N大（250）は口径14.0cm、器高2.9cm。口縁端部が断面三角形状で内へ内傾する器壁の厚い皿である。皿N小（246～249）は口径8.8cm前後、器高1.7cm前後、口径が9.5cmを超えるものも含まれる。

2区井戸199出土土器（図22） 2区井戸199出土土器の種類には土師器、瓦器、輸入陶磁器があるが、ごく少量である。図示したものは木柁内と掘形の出土遺物である。出土遺物はVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器には皿N（252）、皿Sn（251）がある。251は口径8.9cm、器高1.6cm。成形、調整が丁寧で胎土も精良である。輸入陶磁器は白磁の碗（253）の口縁部分である。

3区路面227-2出土土器（図22） 3区路面227-2出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、

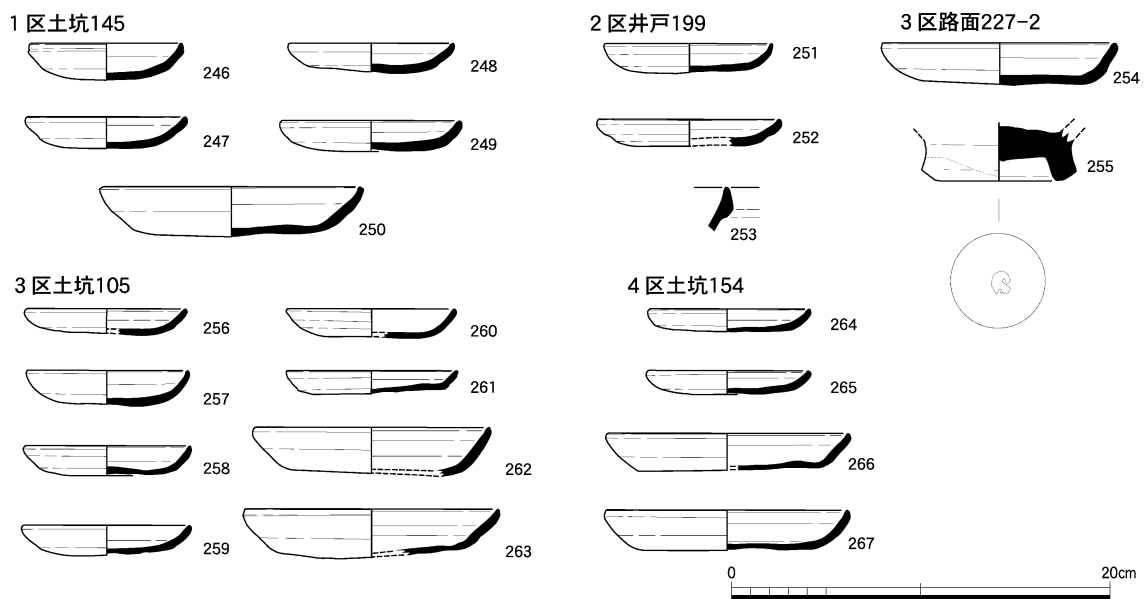


図22 1区土坑145、2区井戸199、3区土坑105・路面227-2、4区土坑154出土土器実測図（1：4）

須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物は平安時代後期から鎌倉時代後期までの幅で出土しているが小片である。図示できたものはVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器は皿N大（254）である。口径12.5 cm、器高2.3 cm。輸入陶磁器には白磁壺（255）がある。底部片で器壁が厚い。底部外面には墨書で円形が描かれる。

3区土坑105出土土器（図版103、図22） 3区土坑105出土土器の総破片数（表7-4）は417片あり、種類は土師器（91.8%）、須恵器（5.8%）、白色土器（0.2%）、焼締陶器（1.0%）、輸入陶磁器（1.2%）である。出土遺物はVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、皿Nが内比率99.2%を占め、皿Sは3片とごく少量である。図示できたものは土師器皿に限られる。土師器には皿N大（262・263）がある。262は口径12.6 cm、263は口径13.6 cm。器高はいずれも2.6 cm。口縁端部は断面三角形形状を呈するものと丸くおさまられるものがある。皿N小（256～261）は口径8.9 cm前後。261は器高が低く、口縁部が直線的である。

4区土坑154出土土器（図版103、図22） 4区土坑154出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はVI期中相（13世紀前葉）に属する。土師器皿には皿N大・小がある。皿N大（266・267）は口径13.0 cm、器高2.1 cm前後。形態は体部の立ち上がりが直線的なもの（267）と緩やかなもの（266）がある。口縁部はいずれも断面三角形形状を呈する。皿N小（264・265）は口径8.7 cm、器高1.3 cm。

2区池160出土土器（図版103、図23） 2区池160出土土器の総破片数（表7-5）は2,005片あり、種類は土師器（81.8%）、瓦器（1.9%）、須恵器（8.1%）、白色土器（0.4%）、焼締陶器（1.1%）、輸入陶磁器（6.6%）である。出土遺物はV期新相～VI期（12世紀後葉～13世紀中葉）に属し、下層の池160-2ではV期新相（12世紀後葉）、上層の池160-1ではVI期中相～新相（13世紀前葉～中葉）が中心的である。土師器皿には皿Acと皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが99.2%を占める。皿Ac（268・287・288）と皿Sはごく少数含まれる。皿N大（275～279・291～294）は口径14.0 cm前後と15.0 cm前後のグループがあり、器高はどちらも2.5 cm前後。口縁部は三角形形状を呈するものが多く、277は外反するもので乙訓系と考えられる。調整は278に2段ナデが残存するが、他は1段ナデである。皿N小（269～274・289・290）は口径9.5 cm前後。269・274は被熱の痕跡が見られる。瓦器には羽釜（280）がある。焼成は不完全で胎土は土師器に似る。口縁部は内傾気味で鏝が付く。内面にはハケメ調整が明瞭に残る。須恵器には鉢（281・282）、甕（283）がある。283は口縁部が直線的に外方に開き、肩部は丸みをもつ。輸入陶磁器には青白磁の合子蓋（284・285）、青白磁皿（286）がある。蓋はいずれも型押し成形される。284は天井部外面に幾何学的な文様を配する。286は薄手の皿で、底部は露胎である。

1区土坑52出土土器（図版59・103・104） 1区土坑52出土土器の総破片数（表7-6）は944片あり、種類は土師器（94.1%）、瓦器（4.8%）、須恵器（0.8%）、白色土器（0.1%）、輸入陶磁器（0.2%）である。出土遺物はVI期中相～新相（13世紀前葉～中葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが94.1%を占める。皿N大（303～307）は口径12.7 cm前後。口縁部は丸くおさまられる。体部は立ち上がりが直線的なもの、丸みをもつものがある。

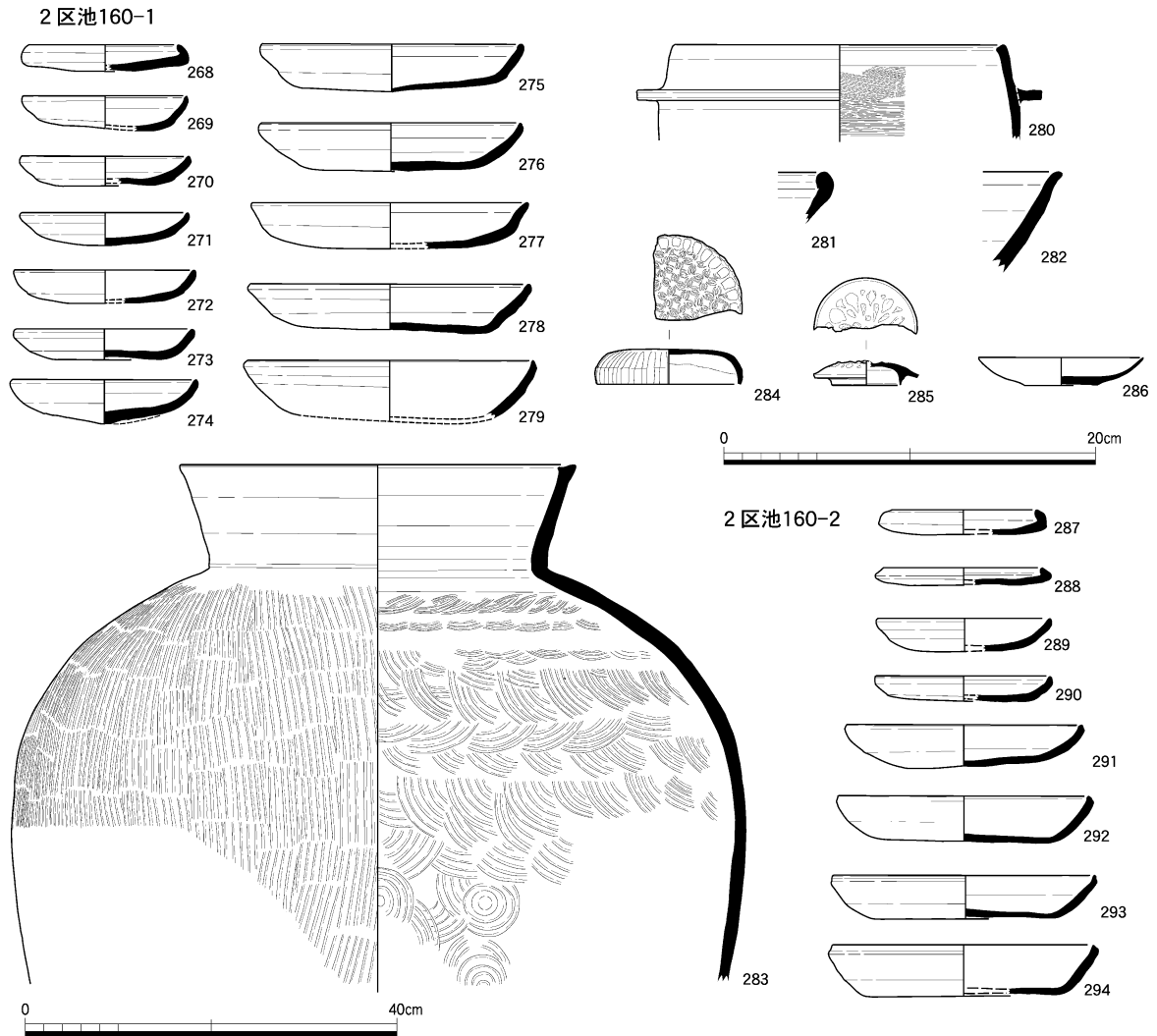


図 23 2区池 160 出土土器実測図（1：4、283のみ1：8）

307 は器高が高い皿 Nd。皿 N 小（295～302）は口径 8.7 cm 前後。白色土器の椀（308）は口径 3.2 cm。瓦器には鍋（310）がある。口縁部が L 字状に短く屈曲し立ち上がる。須恵器には東播系の鉢（311）、山茶椀（309）がある。311 は底部外面には糸切り痕が残る。309 はミニチュアで、内面に自然釉が掛かる。底部外面には糸切り痕が残る。

1 区土坑 100 出土土器（図版 59・104） 1 区土坑 100 出土土器は土師器のみである。出土遺物は VI 期中相～新相（13 世紀前葉～中葉）に属する。土師器皿には皿 N と皿 S がある。皿 N 大（312）は口径 13.0 cm。口縁部断面は三角形状で端部外面が凹む。体部は立ち上がり直線的である。皿 S には形態・手法ともに皿 N 小に類似する皿 Sn（313）があり、皿 S 大（315）、皿 S 小（314）がある。

1 区土坑 101 出土土器（図版 59・104・105） 1 区土坑 101 出土土器の総破片数は 1,099 片あり、種類は土師器（99.9%）、瓦器（0.1%）である。瓦器片 1 点以外は、すべて土師器皿である。出土遺物は VI 期中相～新相（13 世紀前葉～中葉）に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 74.7% を占める。皿 N 大（326～329）は口径 12.5 cm 前後。口縁部は断面三角形状で端部外面に凹みを有する。体部は立ち上がり直線的なもの、丸みをもつものがある。皿

N小(316～320)は口径8.6cm前後。皿Sには皿Sc(330・331)、皿Sn(321～325)、皿S大(333～335)、皿S小(332)がある。321～325は口径9.0cm前後、器高1.6cm前後。333～335は口縁部が突出気味で器高は高く器壁が厚い。いずれも成形・調整が丁寧で、胎土も精良である。

1区土坑271出土土器(図版59) 1区土坑271出土土器の総破片数は362片あり、種類は土師器(88.7%)、瓦器(9.7%)、須恵器(1.7%)である。出土遺物はVI期中相～新相(13世紀前葉～中葉)に属する。土師器には皿・鉢・甕、瓦器には椀・鍋・釜・火舎・火鉢、須恵器には鉢・壺・甕などがある。図示した土師器皿N小(336・337)は口径8.6～9.3cm、皿N大(338)は口径13.8cm、土師器鉢(339)は製塩土器で口径21.6cm、瓦器椀(340)は楠葉型で口径14.9cm、底径5.2cm、器高4.6cm、瓦器鍋(341)は口径22.0cm。

3区井戸196出土土器(図版59) 3区土坑196出土土器の種類には土師器、白色土器、焼締陶器、須恵器などがある。出土遺物はVI期中相～新相(13世紀前葉～中葉)に属する。図示できたものは土師器皿Sc(342)に限られる。342は口径6.0cm、器高1.0cm。

4区土坑122出土土器(図版59・105) 4区土坑122の出土土器の総破片数(表7-7)は519片あり、種類は土師器(98.1%)、瓦器(0.2%)、須恵器(1.3%)、白色土器(0.2%)、輸入陶磁器(0.2%)である。出土遺物はVI期中相～新相(13世紀前葉～中葉)に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが98.8%を占める。皿N大(346)は口径12.6cm、器高2.7cm。体部は直線的で器壁が厚く、器高がやや高い皿である。皿N小(343～345)は口径8.5cm前後、器高1.4cm前後。

1区土坑400出土土器(図版59・105) 1区土坑400出土土器の総破片数は85片あり、種類は土師器(90.6%)、須恵器(4.7%)、輸入陶磁器(4.7%)である。出土遺物はVI期新相(13世紀中葉)に属する。土師器には皿、須恵器には鉢・壺・甕、輸入陶磁器には緑釉陶器盤・染付椀などがある。図示した土師器皿N小(347)は口径9.6cm、器高1.6cm。

3区井戸89出土土器(図版105、図24) 3区井戸89出土土器の総破片数(表7-8)は983片あり、種類は土師器(89.2%)、瓦器(8.1%)、須恵器(2.0%)、白色土器(0.1%)、焼締陶器(0.3%)、輸入陶磁器(0.2%)である。出土遺物はVI期新相(13世紀中葉)に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、皿Nが内比率84.9%を占め、皿Sは少ない。皿N大(357～361)は口径10.8cm、11.4cm前後。口径12.7cm前後に比べ器高が高い形態の皿Nd(362)がある。皿N大は口縁端部が断面三角形状を呈するものと、丸くおさめられるものがあり、体部はやや薄手のものもある。皿N小(348～354)は口径8.5cm前後。皿Sには皿Sc(356)、皿S大(363)がある。瓦器には皿N小に形態が類似する皿(355)、羽釜(364)、火鉢(365・366)がある。355は口径9.0cm、器高1.5cm。内面は灰白色、口縁から底部外面にかけ黒色化している。364は直立する短い口縁部に鐙を有する。365・366はいずれも口縁部が上端面は平坦で肥厚する。須恵器には地方産のロクロ成形の皿(367)、東播系の鉢(368・369)がある。367は外反する口縁部が玉縁状を呈する。体部外面にはロクロ目、底部にはヘラ切り痕跡が明瞭に残る。口径12.8cm、器高2.8cm。

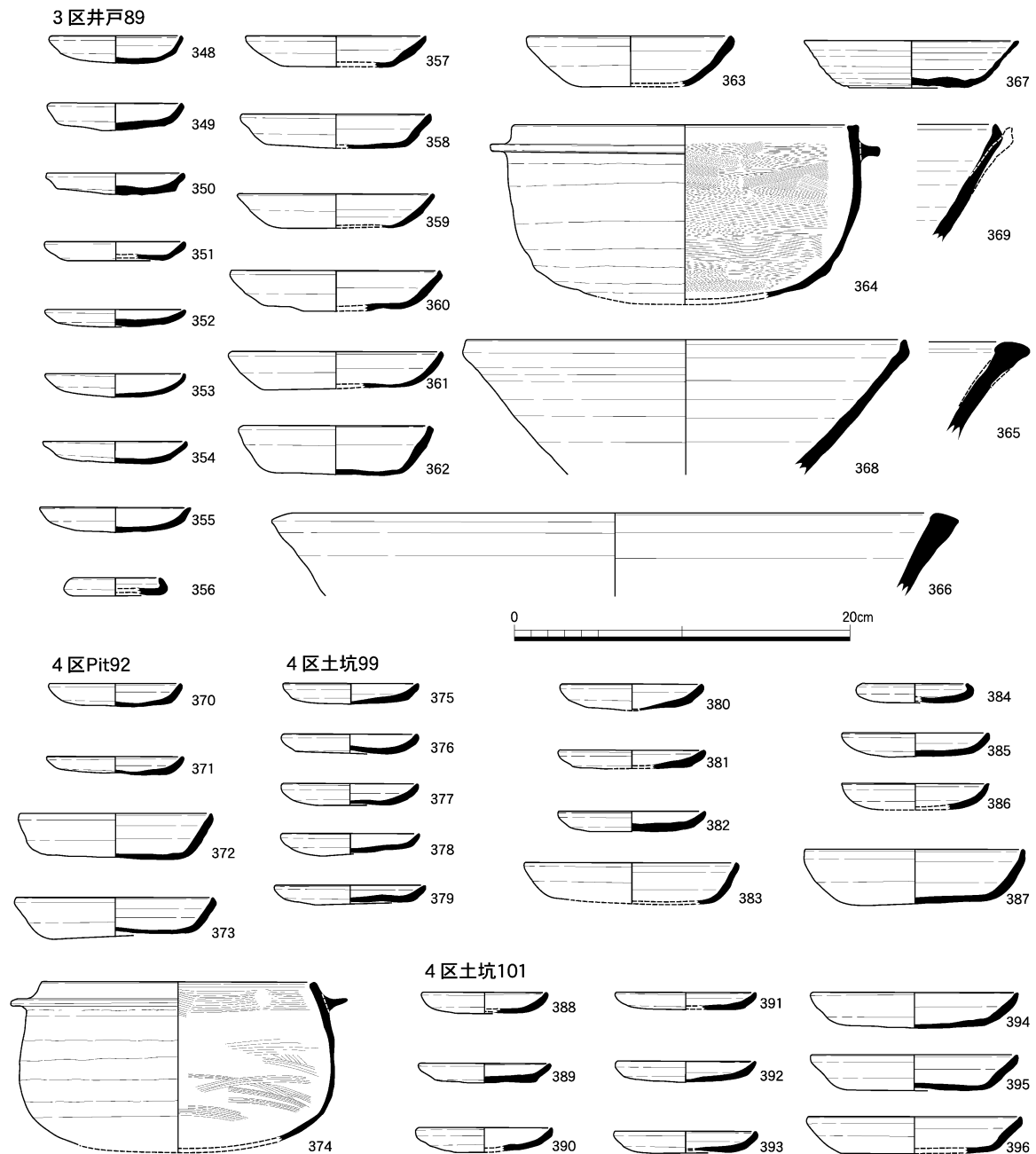


図24 3区井戸89、4区Pit92・土坑99・101出土土器実測図(1:4)

口縁部が上方に突出する東播系の鉢(368)は、内面は磨滅して円滑である。

4区Pit92出土土器(図版105、図24) 4区Pit92出土土器の種類には土師器、瓦器などがある。VI期新相(13世紀中葉)に属する。土師器には皿N大・小がある。皿N大(372・373)は口径11.8cm前後、器高2.7cm前後。口縁部は断面三角形状をし、体部は立ち上がり直線的である。372は口径に比べ器高がやや高く、深みのある皿Ndである。N小(370・371)は口径8.1cm前後、器高1.3cm前後で低い。瓦器には羽釜(374)がある。わずかに内傾する口縁部に鏝を有する。内面にはヘラによるハケメ痕が残る。

4区土坑99出土土器(図版106、図24) 4区土坑99の出土土器の総破片数(表7-9)は5,078片あり、種類は土師器(99.4%)、瓦器(0.3%)、須恵器(0.2%)、焼締陶器(0.1%)である。出

土遺物はVI期新相（13世紀中葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが97%を占める。皿N大（383）は口径12.8cm、器高2.5cm。皿N小（375～382）は口径8.5cm前後、器高1.3cm前後。皿Sには皿Sc（384）、器形・手法ともに皿N小に類似する形態の皿Sn（385・386）、皿S大（387）がある。皿Sは精良な胎土を使用し、仕上げも丁寧に施される。

4区土坑101出土土器（図版106、図24） 4区土坑101の出土土器の総破片数（表7-10）は516片あり、種類は土師器（98.8%）、須恵器（1.0%）、白色土器（0.2%）である。出土遺物はVI期新相（13世紀中葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが98.2%を占める。皿N大（394～396）は口径12.5cm前後、器高2.2cm。皿N小（388～393）は口径8.2cm前後、器高1.3cm前後。

4区土坑120出土土器（図版60・106） 4区土坑120出土土器の種類には土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はVI期新相（13世紀中葉）に属する。土師器には皿N大・小、皿S中、皿Snがある。皿N大（398・399）は口径13.0cm前後、器高2.2cm。皿N小（397）は口径8.8cm、器高1.3cm。皿S中（401）は口径11.0cm、器高3.3cm。皿Sn（400）は器形・手法ともに皿N小に類似する形態の皿。器高が1.7cmと皿Nより高い傾向があり、体部は丸みをもって立ち上がる。輸入陶磁器には華南産の緑釉陶器盤（402）の底部がある。口縁部が玉縁状を有する大型盤と考えられる。胎土は砂粒が多く含まれ粗い。釉は底部以外に施され、内面には線刻で草花文様が描かれる。

4区土坑176出土土器（図版60・106） 4区土坑176出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器などがある。出土遺物はVI期新相（13世紀中葉）に属する。土師器には皿N大・小がある。皿N大（407）は口径12.6cm、器高2.3cm。皿N小（403～406）は口径8.4cm前後、器高1.3cm前後。

4区整地層100出土土器（図版60） 4区整地層100出土土器の総破片数（表7-11）は2,954片あり、種類は土師器（95.5%）、瓦器（2.2%）、須恵器（1.0%）、白色土器（0.1%）、焼締陶器（0.8%）、輸入陶磁器（0.5%）である。出土遺物はVI期新相（13世紀中葉）に属する。土師器には皿Nと皿Sがあり、皿Nが94.1%を占める。皿N大（412～414）は口径12.8cm、器高2.1cm前後。形態は体部の立ち上がりが直線的なもの（413）、外反気味なもの（412・414）がある。412は器壁も薄手の後出的な様相が見られる。皿N小（408～411）は口径8.5cm前後、器高1.4cm前後。皿Sには皿Sc（415・416）と皿S大（418）、皿S小（417）がある。418は口径13.0cm、器高3.3cm、417は口径8.4cm、器高1.9cm。瓦器には鍋（419）、羽釜（420）、火鉢（421）がある。419は短い口縁部が屈曲するもので、内面にはハケメ調整が残る。須恵器には東播系の播鉢（422・423）がある。いずれも口縁上端が突出するもので、422は器壁も薄い。輸入陶磁器には白磁、青磁、青白磁があるが、図示できたものは華南産と考えられる黄釉褐彩陶器の盤（424）である。平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部が玉縁状もしくはT字状の端部を有する器高の高い盤と考えられる。胎土は砂粒を多く含み粗い。

4区整地層112出土土器（図版60・106） 4区整地層112の出土土器の総破片数は2,584片

あり、種類は土師器 (97.2%)、瓦器 (0.4%)、須恵器 (1.6%)、焼締陶器 (0.5%)、輸入陶磁器 (0.2%) である。出土遺物はVI期新相 (13 世紀中葉) に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 98.9% を占める。皿 N 大 (431 ~ 433) は口径 12.2 cm 前後、器高 1.4 cm 前後。皿 N 小 (425 ~ 430) は口径 8.6 cm 前後、器高 1.4 cm 前後。皿 S には皿 Sc (434・435)、皿 Sn (436・437)、皿 S 大 (438) がある。いずれも皿 S は精良な胎土を使用し、仕上げも丁寧に施される。瓦器には羽釜 (439) がある。輸入陶磁器には華南産と推定される黄釉褐彩陶器の盤 (440・441) の口縁部片と底部片がある。4 区整地層 100 出土の華南産 (424) と同様のものである。

2 区泉 100 出土土器 (図版 60・106) 2 区泉 100 出土土器の総破片数 (表 7-12) は 987 片あり、種類は土師器 (74.1%)、瓦器 (11.3%)、須恵器 (10.1%)、白色土器 (0.4%)、焼締陶器 (2.6%)、輸入陶磁器 (1.4%) である。出土遺物は大半が小片で少量であるが、下層の木柁内ではVI期 (12 世紀末 ~ 13 世紀中葉) に属するものが出土し、上層ではVI期新相 ~ VII期古相 (13 世紀中葉 ~ 後葉) に属するものが出土する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 88.3% を占める。皿 N 大 (443) は約 13.0 cm、器高 2.3 cm。口縁部は丸くおさめる。皿 N 小 (442) は口径 8.0 cm、器高 1.4 cm。皿 N はいずれも器壁が厚めである。皿 S には皿 Sc (444) がある。口径 5.1 cm、器高 1.4 cm。成形・調整が丁寧に胎土も精良である。土師器皿の加工品 (445) は径 2.25 cm、厚さ 0.35 cm。瓦器には羽釜 (446・447) がある。447 は鏝がやや短く後出的である。須恵器には東播系鉢 (448) がある。内面は磨滅し円滑である。口縁端部外面は焼成時の重ね焼きで自然釉が残る。焼締陶器には常滑産の甕 (449) がある。口径 47.4 cm、残存高 13.6 cm。取水施設の一部に転用されたもので肩部以下は打ち欠きにより欠損している。輸入陶磁器の青磁椀 (450) は高台径 3.4 cm。

1 区土坑 108 出土土器 (図版 61・107) 1 区第 2-1 面東部で検出した土坑 108 出土土器の総破片数 (表 7-13) は 3,527 片あり、種類は土師器 (96.6%)、瓦器 (1.9%)、須恵器 (1.1%)、焼締陶器 (0.2%)、輸入陶磁器 (0.2%) である。出土遺物はVI期新相 ~ VII期古相 (13 世紀中葉 ~ 後葉) に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 98.1% を占める。土師器には皿 Ac (474)、皿 N 大 (464 ~ 471)、皿 N 小 (451 ~ 463)、皿 Sc (473)、皿 Sn (472)、皿 S 中 (475・476)、鉢 (477・478) などがある。皿 N 大は口径 13.0 cm 前後。口縁部は上端部が突出して端部外面に凹みを有するもの、丸くおさめるものがある。体部が外反して開き気味のものには 467・469 ~ 471 がある。皿 N 小は口径 8.7 cm 前後を中心に 9.0 cm を越えるものもある。皿 Sc は最大径 7.4 cm で器高は低い。皿 Sn は形態・手法ともに皿 N 小に類似する形態のものである。口径 10.0 cm。皿 S 中は口径 11.0 cm 前後。いずれも成形、調整が丁寧に、胎土も精良である。鉢は体部が直線的に広がるもの (478) と口縁部が外反するもの (477) がある。いずれも粘土巻き上げ痕が明瞭に残る。瓦器には火鉢 (479)、鍋 (480) がある。火鉢は体部外面には粉殻痕跡が残存する。須恵器には甕 (481) がある。胎土は軟質で器表全体が焼成不良のため黒化している。外面にはタタキメが残る。輸入陶磁器には龍泉窯系の陰刻花文青磁皿 (482) がある。他にも図示していないが白磁椀・壺、華南産系の緑釉陶器・黄釉褐彩陶器の盤などの小片の出土がある。

1 区土坑 153 出土土器 (図版 61・107・108) 土坑 153 出土土器の総破片数 (表 7-14) は

626片あり、種類は土師器（98.1%）、瓦器（0.5%）、須恵器（1.4%）で、土師器皿が大半を占める。出土遺物はVI期新相～VII期古相（13世紀中葉～後葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが96.4%を占める。皿N大（493～501）は口径12.7cm前後と13.5cm前後のグループがある。口縁部は断面三角形状で端部外面に凹みを有するものと、丸くおさめるものがあり、体部は直線的である。皿N小（483～492）は口径8.7cm前後。皿Sには皿S中（502～504）があり、口径10.9cmと11.5cm前後のものがある。瓦器の火鉢（505）は口径35.0cm。内面をミガキ調整する。

2区溝159出土土器（図版61） 2区溝159出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器などがあるが、ごく少量である。出土遺物はVI期新相～VII期古相（13世紀中葉～後葉）に属する。土師器には皿N小（506・507）がある。口径8.0cm前後、器高1.6cm。506は薄手で新相の様相がある。瓦器には羽釜（508）がある。口縁部は内傾する鏝の付くものである。須恵器には東播系の鉢（509）がある。

1区土坑333出土土器（図版61・108） 1区土坑333出土土器の総破片数は376片あり、種類は土師器（99.2%）、須恵器（0.8%）である。出土遺物はVI期新相～VII期古相（13世紀中葉～後葉）に属する。土師器には皿・羽釜、須恵器には壺・甕がある。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが83.3%を占める。皿N大（512）は口径12.6cm、口縁部が断面三角形状を呈し、体部が直線的に立ち上がる。皿N小（510・511）は口径8.2cmと8.6cm。皿N小に類似する皿Sn（513）は口径9.8cm、器高1.9cm。皿S小（514）は口径7.9cm、器高2.1cm。皿S大（515・516）は口径13.0cmと13.4cm、器高3.6～3.7cm。

3区溝63出土土器（図版108、図25） 3区溝63出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがあるが、少量である。図示できた遺物はVI期新相～VII期古相（13世紀中葉～後葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、皿Sにはへそ皿が混じる。土師器には皿N大（517・518）がある。口径は約11.1cm前後。須恵器には東播系の鉢（519）がある。輸入陶磁器には白磁皿（522）、白磁椀（521・523）、褐釉壺（524）、黄釉褐彩陶器盤（520）などがある。

3区土坑324出土土器（図25） 525は3区土坑324から出土した輸入陶磁器で華南産と考えられる黄釉褐彩陶器の盤である。口縁部片で口径40.8cmに復元できる。体部が内湾し口縁端部は外方に屈曲して先端を丸くおさめる。口縁部外面から内面にかけて黄釉を施し、内面には褐釉で文様を描く。同様の盤はVI期新相～VII期古相（13世紀中葉～後葉）に属する1区土坑108、3区溝63（520）、4区整地層100（424）、4区整地層112（440・441）、4区土坑124（556）などからも出土している。

1区井戸109出土土器（図版108、図25） 1区井戸109出土土器の総破片数は270片で、接合遺物は少ない。種類は土師器（90.4%）、瓦器（6.3%）、須恵器（3.0%）、輸入陶磁器（0.4%）である。出土遺物はVII期古相（13世紀後葉）に属する。図示できたものは土師器皿類に限られる。土師器皿には皿Nと皿Sがある。皿N小（526）は口径8.4cm。口縁部が開き気味で、やや器高

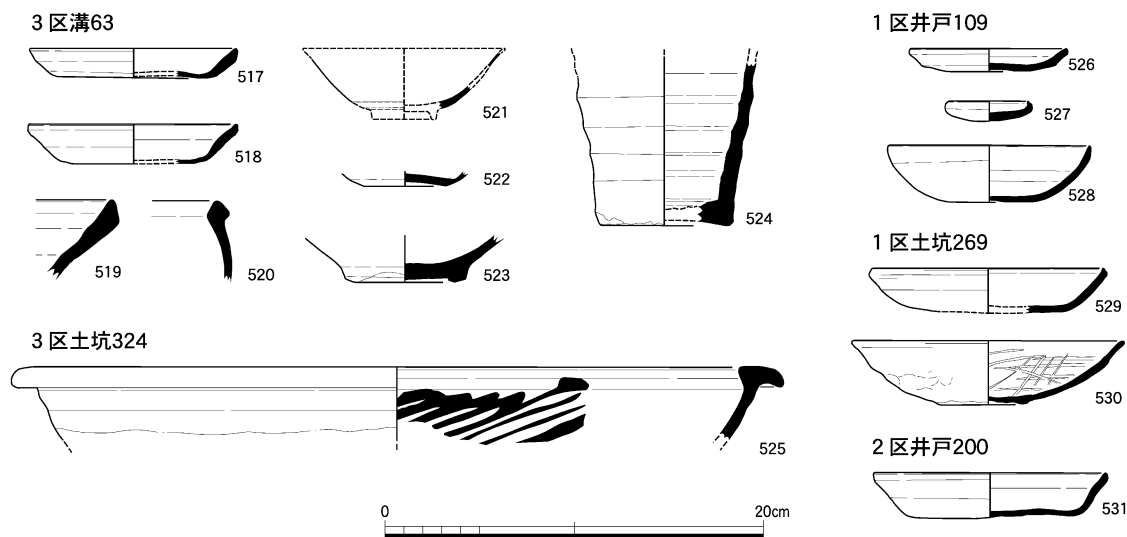


図 25 1区井戸109・土坑269、2区井戸200、3区溝63・土坑324出土土器実測図（1：4）

が浅い。皿 Sc (527) は胎土が粗く成形も粗雑である。皿 S 小 (528) は成形・調整が丁寧で、胎土も精良である。

1区土坑269出土土器(図25) 1区土坑269出土土器の種類には土師器、瓦器などがある。出土遺物はⅦ期古相(13世紀後葉)に属する。土師器皿 N 大(529)は口径12.6 cm、器高2.3 cm、口縁部が断面三角形状で体部が直線的に立ち上がる。瓦器椀(530)は和泉型で、口径14.4 cm、底径4.5 cm、器高3.4 cm。

2区井戸200出土土器(図25) 2区井戸200出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器があるが、ごく少量である。出土遺物はⅦ期古相(13世紀後葉)に属する。土師器には曲物内出土の皿 N 大(531)がある。口径12.4 cm、器高2.4 cm。

4区土坑124出土土器(図版109、図26) 4区土坑124の出土土器の総破片数(表7-15)は2,027片あり、種類は土師器(98.7%)、瓦器(0.3%)、須恵器(0.6%)、焼締陶器(0.1%)、輸入陶磁器(0.2%)である。出土遺物はⅦ期古相(13世紀後葉)に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が95.2%を占める。皿 N 大(542～548)は口径12.1 cm前後、器高2.3 cmと口径12.9 cm前後、器高2.4 cm前後のグループに分かれる。口径の小さいものは口縁部が外反気味である。皿 N 小(532～541)は口径8.2 cm前後、器高1.3 cm前後。皿 S には皿 Sc(549)、皿 S 大(550・551)がある。皿 S はいずれも精良な胎土を使用し、仕上げも丁寧に施される。瓦器には羽釜の脚部(552)、火鉢(553)があり、須恵器には東播系の鉢(554)、甕(555)がある。甕は口縁部が折り返され下方へ突出する。頸部は板状工具による成形痕が縦方向に残る。輸入陶磁器には黄釉褐彩陶器の盤(556)がある。口縁部は方形で短く屈曲する。口縁上端面は露胎である。

3区柱穴383(建物161)出土土器(図27) 3区柱穴383(建物161)出土土器の種類には土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅥ期新相～Ⅶ期中相(13世紀中葉～14世紀前葉)に属する。土師器には皿 N・皿 S・皿 Sh、瓦器には鍋・釜、須恵器には鉢・甕、輸入陶磁器には

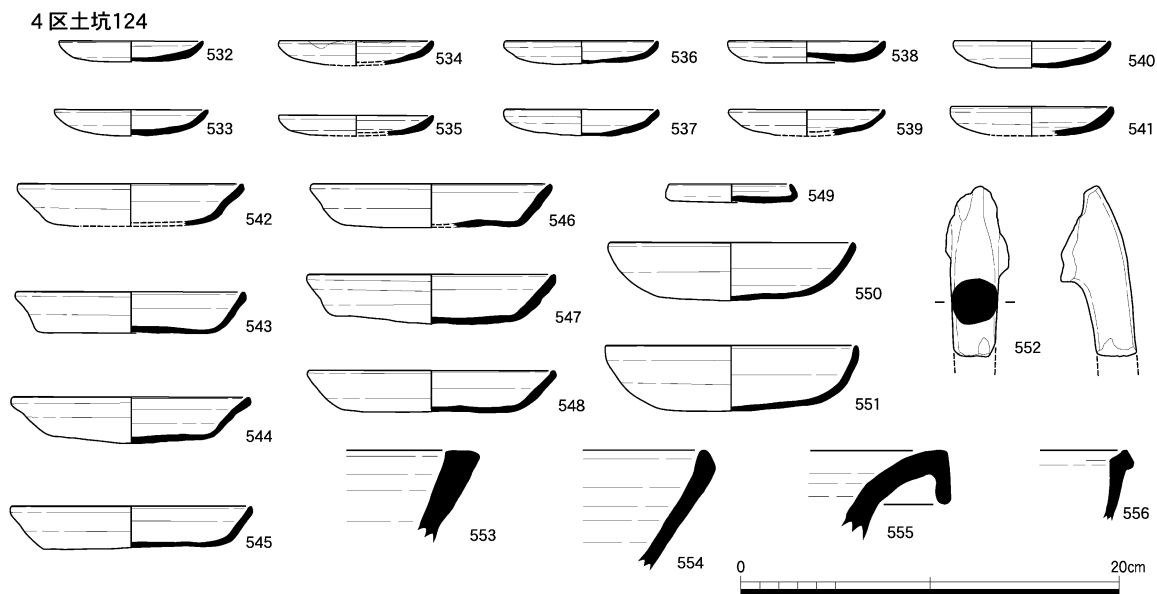


図 26 4区土坑124出土土器実測図（1：4）

青磁の椀皿類がある。図示できた皿 N 小（557）は口径 8.6 cm。土師器皿 Sh（558）は口径 6.9 cm。557 は口縁端部が断面三角形状を呈していることおよびその法量から VI 期新相（13 世紀中葉）、558 はへそ皿が定形化し始めた時期の器形であることから VII 期中相（14 世紀前葉）に属する。

1 区土坑 367 出土土器（図版 109、図 27） 1 区土坑 367 出土土器の総破片数は 214 片あり、種類は土師器（95.3%）、瓦器（1.9%）、須恵器（1.9%）、輸入陶磁器（0.9%）である。出土遺物は VI 期新相～VII 期中相（13 世紀中葉～14 世紀前葉）に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 85.6% を占める。他には製塩土器がある。瓦器には椀・鍋・釜、須恵器には山茶椀・甕、輸入陶磁器には白磁・青磁の椀皿類の小片がある。図示できた土師器皿 N 大（559）は口径 11.5 cm、器高 2.6 cm、VI 期の形態的特徴を示すが法量が縮小化している。

2 区土坑 132 出土土器（図 27） 2 区土坑 132 出土土器の総破片数は 1,138 片あり、種類は土師器（99.0%）、須恵器（0.7%）、輸入陶磁器（0.3%）である。須恵器甕 2 片、輸入陶磁器 1 片

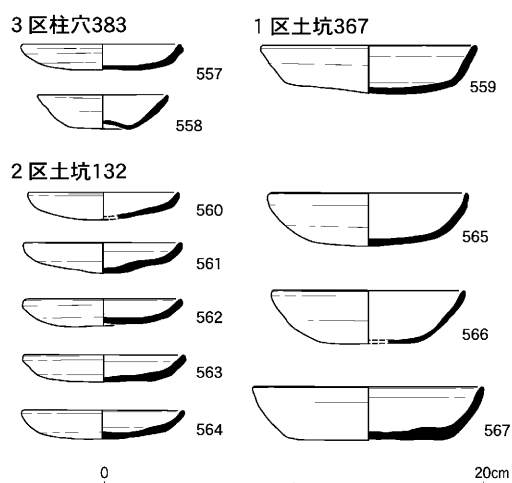


図 27 1区土坑367、2区土坑132、3区柱穴383出土土器実測図（1：4）

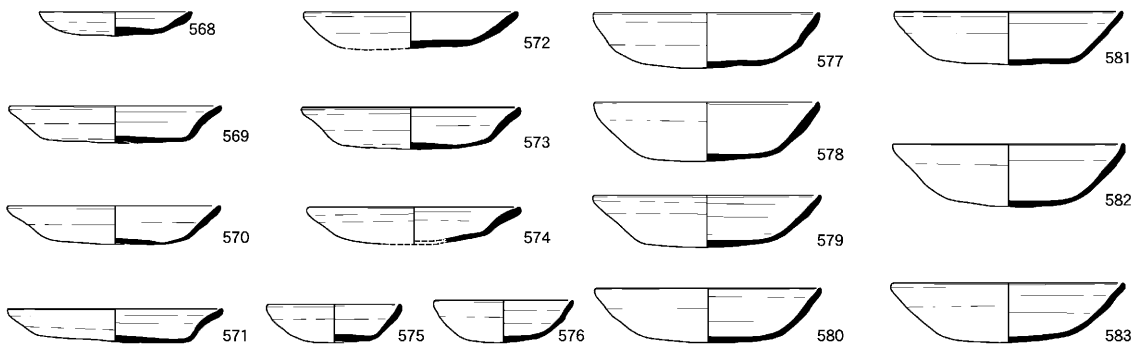
以外は、すべて土師器椀皿類である。出土遺物は VII 期古相～中相（13 世紀後葉～14 世紀前葉）に属する。土師器皿には皿 N、皿 S、地方産の皿 X があり、内比率は皿 N が 95.1% を占める。皿 N 小（560～564）は口径 8.4 cm 前後、器高 1.7 cm 前後。皿 S には S 中（565・566）がある。皿 X（567）は地方産の土師器皿である。ロクロ成形されたもので、底部内面はロクロ目が明瞭。

1 区土坑 76 出土土器（図版 109、図 28） 1 区土坑 76 出土土器の総破片数（表 7-16）は 409 片あり、種類は土師器（95.8%）、瓦器（0.2%）、須

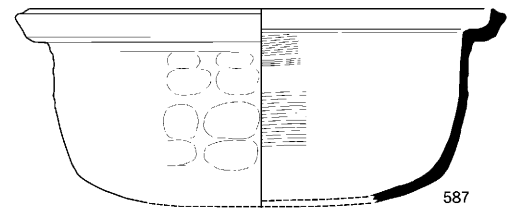
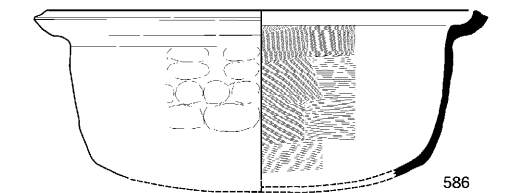
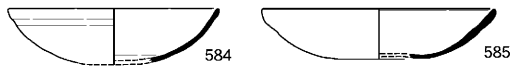
恵器 (3.9%) である。出土遺物はⅦ期中相 (14 世紀前葉) に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、内比率は皿 N が 56.9% を占めるが、白系の皿 S の増加が顕著である。皿 N 大 (569 ~ 574) は口径 11.4 cm 前後。形態は体部の立ち上がりが外反し、器壁の薄手なものが主体となる。皿 N 小 (568) は口径 8.1 cm。皿 S には皿 S 大 (577 ~ 583)、皿 S 小 (575・576) がある。S 大の形態は丸みを有するものと直線的なものがあり、器壁は薄手が多い。胎土はいずれも精良である。調整はいずれも内面から口縁部外面はナデ調整、底部はオサエ調整が施される。皿 S は調整が丁寧である。

2 区井戸 316 出土土器 (図版 109、図 28) 2 区井戸 316 出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅦ期 (13 世紀後葉 ~ 14 世紀中葉) に属す

1 区土坑76



2 区 井戸316



2 区 井戸356



3 区 土坑459

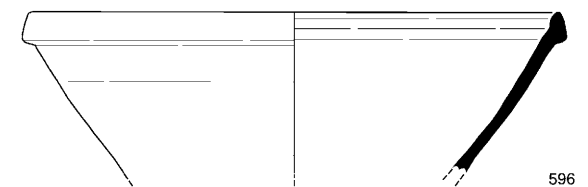
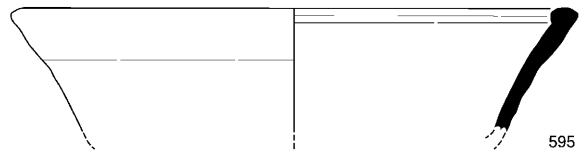
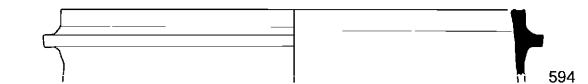
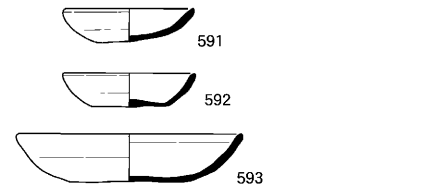


図 28 1 区土坑 76、2 区井戸 316・356、3 区土坑 459 出土土器実測図 (1 : 4)

る。土師器には皿、瓦器には椀・鍋・釜・火鉢、焼締陶器には常滑産の甕、須恵器には鉢・壺・甕、輸入陶磁器には白磁椀などがある。図示できた土師器皿 S 大 (584・585) は口径 11.2 cm と 12.4 cm。瓦器鍋 (586・587) は口径 24.0 cm と 26.0 cm。須恵器の東幡系の鉢 (588) は口径 27.0 cm、器高 9.4 cm。

2 区井戸 356 出土土器 (図版 109、図 28) 2 区井戸 356 出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅦ期 (13 世紀後葉～14 世紀中葉) に属する。土師器には皿、瓦器には椀・鍋・釜、焼締陶器には備前産の鉢、須恵器には椀・鉢・壺・甕、輸入陶磁器には青磁椀・青白磁壺などがある。図示できた土師器皿 S 中 (589) は口径 10.2 cm、瓦器の小型三足羽釜 (590) は口径 5.1 cm、木枠内から出土した。

3 区土坑 459 出土土器 (図 28) 3 区土坑 459 出土土器の総破片数は 99 片あり、種類は土師器 (64.6%)、瓦器 (18.2%)、須恵器 (10.1%)、白色土器 (1.0%)、焼締陶器 (3.0%)、輸入陶磁器 (3.0%) である。出土遺物はⅦ期 (13 世紀後葉～14 世紀中葉) に属する。土師器には皿 N・皿 S・皿 Sh の破片数が 62 片あり、内訳は皿 N 36 片 (58.1%)、皿 S 25 片 (40.3%)、皿 Sh 1 片 (1.6%) である。図示できた土師器皿 S 小 (591・592) は口径 7.0 cm。皿 S 大 (593) は口径 12.0 cm。瓦器羽釜 (594) は口径 24.6 cm。瓦器盤 (595) は口径 30.0 cm。須恵器東幡系鉢 (596) は口径 28.0 cm。

3 区土坑 296 出土土器 (図版 62・109・110) 3 区土坑 296 出土土器の総破片数は 979 片あり、種類は土師器 (95.4%)、瓦器 (3.7%)、須恵器 (0.5%)、国産施釉陶器 (0.1%)、焼締陶器 (0.2%)、輸入陶磁器 (0.1%) である。出土遺物はⅦ期中相～新相 (14 世紀前葉～中葉) に属する。土師器には皿 N・皿 S・皿 Sh の破片数が 932 片あり、内訳は皿 N が 687 片 (73.7%)、皿 S が 238 片 (25.5%)、皿 Sh が 7 片 (0.8%) である。図示できた土師器皿 N 小 (597～603) は口径 7.6～8.4 cm、皿 N 中 (604) は口径 10.8 cm、皿 N 大 (605～610) は口径 11.5～12.2 cm、皿 S 大 (617～621) は口径 11.7～11.8 cm、皿 Sh (611～616) は口径 6.6～6.9 cm、土師器ミニチュア片口鉢 (622) は口径 5.0 cm、瓦器片口鉢 (623) は口径 20.0 cm。

3 区土坑 58 出土土器 (図版 62) 3 区土坑 58 出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがあるが、小片で少量である。出土遺物はⅦ期中相～新相 (14 世紀前葉～中葉) に属する。土師器皿には皿 N と皿 S があり、皿 S にはへそ皿が混じる。図示できたものには土師器皿 N 小 (624)、輸入陶磁器の華南産緑釉陶器盤 (625) がある。625 は陶胎で、口縁部は玉縁状に短く屈曲する。華南産に考えられる。

4 区土坑 35 出土土器 (図版 62) 4 区土坑 35 出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅦ期中相～新相 (14 世紀前葉～中葉) に属する。図示できたものには土師器皿 N 大 (626) がある。体部から屈曲して開く口縁部は丸くおさめる。口径 11.5 cm 前後、器高 2.7 cm。

(4) 室町時代の土器類

2 区路面 150-1 出土土器 (図版 62・111) 2 区路面 150-1 出土土器の総破片数 (表 7-17) は 3,048

片あり、種類は土師器（62.5%）、瓦器（22.4%）、須恵器（8.4%）、白色土器（0.1%）、国産施釉陶器（0.4%）、焼締陶器（3.4%）、輸入陶磁器（2.9%）である。出土遺物はⅦ期中相～Ⅷ期古相（14世紀前葉～後葉）に属する。土師器皿には皿Nと皿Sがあり、内比率は皿Nが59.9%を占めるが皿Sの比率増加が顕著となる。土器類は細片が大半で図示できたものは少ない。土師器にはへそ皿Sh（627）がある。底部中央が盛り上がり、口縁部は開き気味である。瓦器には火鉢（628）、鍋（629～631）、羽釜（632）がある。629～631はいずれも口縁部が短く屈曲するもので、調整は内面がハケメ、外面がオサエ。須恵器には東播系の鉢（633・634）がある。重ね焼きのため口縁部のみが黒化している。焼締陶器には丹波産の鉢（635）、備前産の甕（636）がある。635は建水の可能性がある。輸入陶磁器には青白磁水注（637）があるが、注口部片のため全体像は不明である。

2区井戸348出土土器（図版62・111） 2区井戸348出土土器の種類には土師器、瓦器、焼
3区土坑162

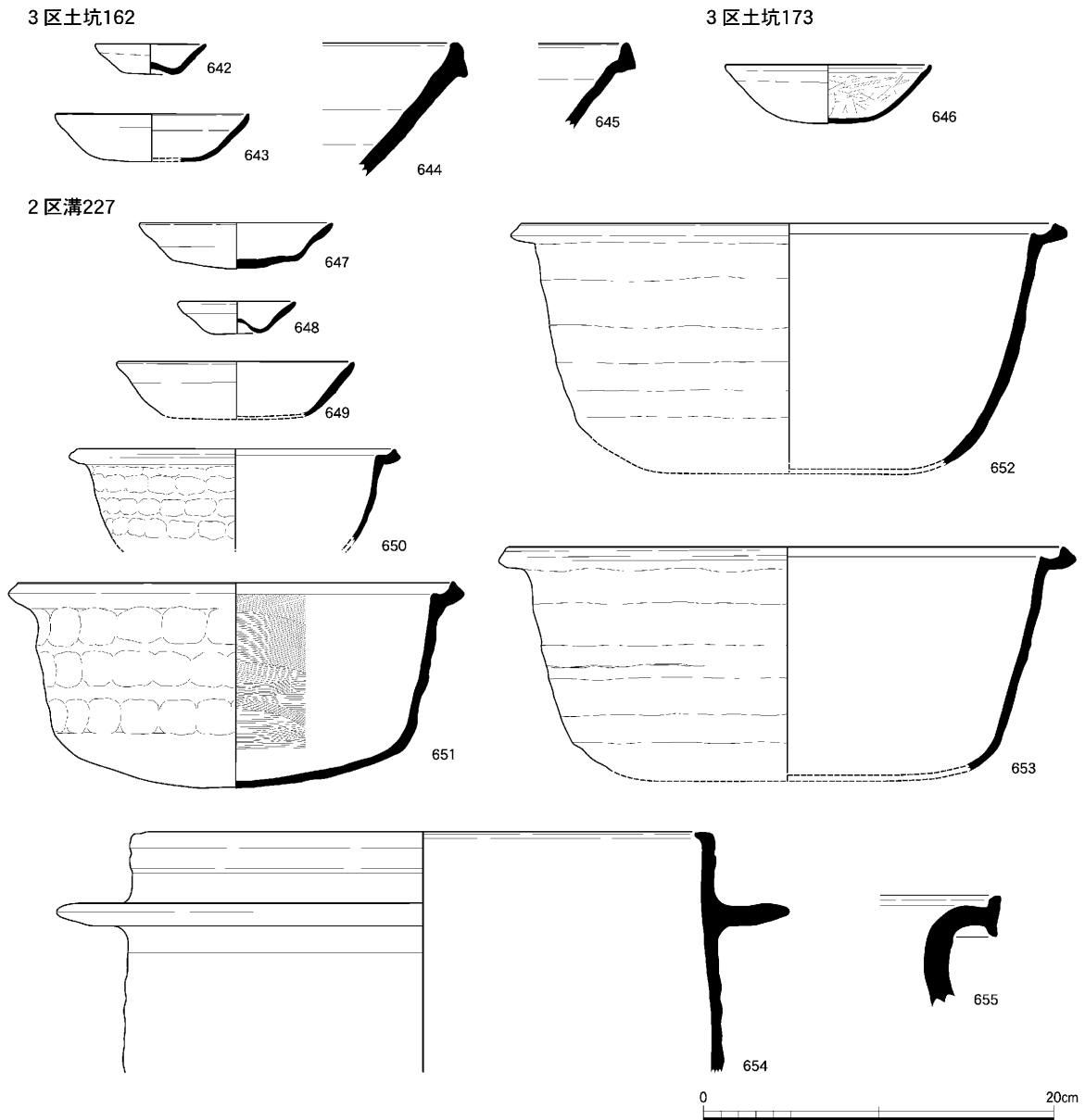


図29 2区溝227、3区土坑162・173出土土器実測図（1：4）

締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅦ期新相～Ⅷ期古相（14世紀中葉～後葉）に属する。土師器には皿・釜、瓦器には鍋・釜・火鉢、焼締陶器には甕、須恵器には山茶碗・鉢・壺・甕、輸入陶磁器には白磁碗がある。図示できた土師器皿 Sh（638）は口径 6.6 cm、器高 1.9 cm。皿 S 大（639）は口径 12.6 cm。瓦器羽釜（640）は口径 33.6 cm。須恵器の東幡系の鉢（641）は口径 25.8 cm。

3区土坑 162 出土土器（図版 111、図 29） 3区土坑 162 出土土器の総破片数（表 7-18）は 256 片あり、種類は土師器（86.7%）、瓦器（2.7%）、須恵器（9.4%）、焼締陶器（1.2%）である。出土遺物はⅦ期新相～Ⅷ期古相（14世紀中葉～後葉）に属する。数量的には少ないが土師器皿には皿 N と皿 S があり、皿 N が内比率 54.6%に減少し、皿 S の比率増加が顕著である。皿 S 系の中でもいわゆるへそ皿が過半数を占める。図示できたものにはへそ皿 Sh（642）、皿 S 中（643）がある。642 は中央部内面が盛り上がり口縁部は開き気味である。643 は口径 11.1 cm で器壁が薄くなる。須恵器には東幡系の鉢（644・645）がある。

3区土坑 173 出土土器（図 29） 3区土坑 173 出土土器は土師器皿 S 大（646）の 1 点がある。出土遺物はⅦ期新相～Ⅷ期古相（14世紀中葉～後葉）に属する。646 は完形である。内面に不定方向の擦痕がある。口径 11.7 cm、器高 3.4 cm。

2区溝 227 出土土器（図版 111、図 29） 2区溝 227 出土土器の種類には土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器、輸入陶磁器などがある。出土遺物はⅧ期（14世紀後葉～15世紀前葉）に属する。土師器には皿・釜、瓦器には鍋・釜・火鉢、焼締陶器には甕、須恵器には鉢・甕、輸入陶磁器には白磁・青磁碗などがある。図示できた土師器皿 N 大（647）は口径 11.1 cm、器高 2.7 cm。皿 S 小（648）は口径 6.8 cm、器高 1.9 cm。皿 S 大（649）は口径 13.6 cm。瓦器鍋（650～653）は法量から大中小の 3 種に区別でき、小の 650 は口径 19.0 cm、中の 651 は口径 26.0 cm、大の 652・653 は口径 32.0～33.0 cm である。瓦器羽釜（654）は口径 33.0 cm で、瓦器鍋大の口径数値に近似する。焼締陶器の常滑産甕（655）は口縁部の破片で、口径約 46.0 cm と推定される。

2区土坑 297 出土土器（図版 111、図 30） 2区土坑 297 出土土器の種類には土師器、瓦器がある。出土遺物はⅧ期（14世紀後葉～15世紀前葉）に属する。土師器には皿・釜の小片、瓦器には土坑に埋納された鍋（656）がある。656 の口径は 30.2 cm、器高 13.6 cm、ほぼ完形である。

なお、図版 112 に輸入陶磁器の集合写真を掲載した。上段は白磁（43・81・157・522・523）、青磁（111・112・482）、青白磁（284～286・637）、緑釉陶器（402・625）、下段は黄釉褐彩陶器（424・440・441・520・525・657～663）である。657～663 は写真のみの掲載である。657～659・662・663 は 3区第 2 層、660 は 3区第 1-2 層、661 は 3区井戸 451 から出土している。

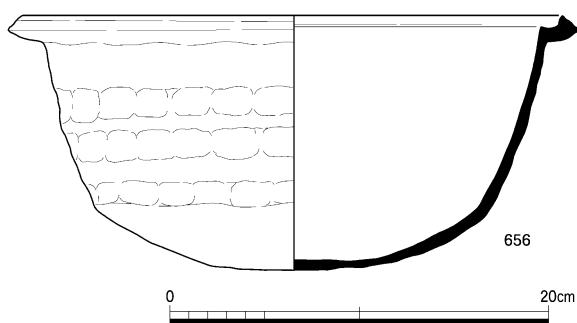


図 30 2区土坑 297 出土土器実測図（1：4）

(5) 瓦類 (表4・9)

瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・塙などがある。軒瓦は、軒丸瓦が119点、軒平瓦が131点出土した。それらを出土地点の四町(3・4区)と五町(1・2区)に分け、さらに町ごとに蓮華文と巴文、唐草文と斜格子文などに分類し、出土遺構ごとにまとめた。それらのなかから残存状態の良いものを図示した。

四町出土軒丸瓦(図版63・113) 瓦1～9があり、蓮華文8点、三巴文1点、計9点ある。そのうち、瓦1～7は、3区泉241からまとまって出土した。

瓦1 単弁蓮華文軒丸瓦 文様は全体に不鮮明で筧ズレがある。中房の周囲には圏線が巡る。蓮子は4、中心に十字状の突線があり、蓮子を区画する。蓮弁は筧ズレのため不明瞭である。間弁は三角形で連続する。外区は界線と圏線が巡り、その間に珠文を配する。珠文復元数は18である。

瓦2 単弁蓮華文軒丸瓦 中房の蓮子は不明瞭であるが、1+6と思われる。蓮弁は中房とは接しておらず、先端は尖る。蓮弁の幅と配置は、不均等である。蓮弁復元数は十二葉である。間弁は三角形を呈する。外区は外縁のみである。

瓦3 単弁八葉蓮華文軒丸瓦 文様の左半分がつぶれ、筧の木目痕が残る。中房は隆起し、蓮子は1+4である。蓮弁は中房とは接しない。間弁は撥形を呈する。外区は界線のみである。

瓦4 単弁八葉蓮華文軒丸瓦 中房には十字状突線があり、蓮子4と突起した三角形のもの4を区画する。蓮弁は中房とは接しておらず、平坦である。間弁は撥形を呈する。外区には界線と珠文が巡る。珠文は小さく、密であり、復元数は33である。

瓦5 複弁蓮華文軒丸瓦 瓦当面には、筧の木目痕が残る。中房の周囲には圏線が巡り、蓮子

表4 出土軒瓦の構成(点数)

四町出土軒瓦			
	文様	点数	比率
軒丸瓦	蓮華文	25	86.2%
	巴文	1	3.4%
	不明	3	10.3%
	小計	29	100.0%
軒平瓦	唐草文	21	80.8%
	格子・剣頭文など	4	15.4%
	不明	1	3.8%
	小計	26	100.0%
	総計	55	100.0%
五町出土軒瓦			
	文様	点数	比率
軒丸瓦	蓮華文	15	16.7%
	巴文	65	72.2%
	不明	10	11.1%
	小計	90	100.0%
軒平瓦	唐草文	28	26.7%
	格子・剣頭文など	65	61.9%
	不明	12	11.4%
	小計	105	100.0%
	総計	195	100.0%

※四・五町総点数250

がある。蓮弁は互いに接し、子葉がある。間弁は三角形で連続する。外区は圏線が巡る。山城系である。

瓦6 複弁六葉蓮華文軒丸瓦 文様の左上がつぶれている。中房の蓮子は1+4である。蓮弁は宝珠形で子葉がある。外区は界線と圏線が巡り、その間に珠文帯がある。珠文は小さい。

瓦7 三巴文軒丸瓦 瓦当面には、筧の木目痕残り、珠文帯の一部に筧ズレがある。巴文は右巻きで、尾は短い。外区には界線と圏線が巡り、その間に珠文を配する。珠文は大きく、復元数は13である。

瓦8 複弁八葉蓮華文軒丸瓦 中房の周囲には圏線が巡り、蓮子は1+4である。三角形と撥形が交互に連続する輪郭線で蓮弁は区画され、弁端がくぼむ複弁である。外区は外縁のみである。この軒瓦は2次的に火を受けた痕跡が見られる。3区井戸235から出土した。

瓦9 単弁蓮華文軒丸瓦 瓦当面には糸切り痕が残る。中房の周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は先端が尖り、復元数は八葉である。外区には珠文帯が巡る。珠文は小さく、密である。3区攪乱から出土した。

五町出土軒丸瓦（図版63・64・114・115）瓦10～30があり、蓮華文7点、巴文14点、計21点ある。そのうちまとまって出土したものには、2区池160から出土した瓦16・21～23・25～28がある。

瓦10 複弁八葉蓮華文軒丸瓦 文様の右半分に筈ズレがある。中房の周囲には圏線が巡る。蓮子は1+6である。蓮弁は互いに接する複弁である。間弁は三角形で連続する。外区には珠文が巡る。珠文は16個ある。丸瓦部凸面には斜格子タタキメが残る。1区建物146から出土した。

瓦11 単弁十葉蓮華文軒丸瓦 瓦当面には、筈の木目痕が残る。中房は平坦で蓮子はない。蓮弁は中房に接する。間弁は三角形で連続する。外区は珠文が巡る。珠文復元数は13である。1区土坑393から出土した。

瓦12 単弁蓮華文軒丸瓦 瓦当面は楕円形である。中房の周囲には圏線が巡る。蓮弁には子葉があり、復元数は十葉である。間弁は三角形で連続し、中房の圏線に接する。外区は珠文が巡る。1区土坑290から出土した。

瓦13 単弁蓮華文軒丸瓦 中房の周囲には圏線が巡る。蓮弁には子葉があり、間弁が中房の圏線に接しない部分がある。1区建物160から出土した。

瓦14 単弁蓮華文軒丸瓦 中房は平坦である。蓮弁は互いに接しておらず、弁端が尖る。外区は外縁のみである。1区建物160から出土した。

瓦15 複弁蓮華文軒丸瓦 中房は平坦で、周囲には圏線が巡る。蓮子はない。蓮弁は互いに接し、子葉がある。復元数は六葉である。表面には自然釉がかかる。播磨系である。1区柱穴283から出土した。

瓦16 単弁八葉蓮華文軒丸瓦 中房は隆起し、蓮子は1+6である。蓮弁は盛り上がり、輪郭線で囲まれる単弁である。各弁間には珠文1個を配している。外区には界線と圏線が巡る。

瓦17 巴文軒丸瓦 瓦当面にはハケメのような斜めの線が残る。右巻き巴文の可能性があり。1区第4層から出土した。

瓦18 巴文軒丸瓦 瓦当面には、筈の木目痕が残る。右巻き巴文である。頭部は離れ、尾部は長く伸び、互いに接して界線となる。巴の復元数は三巴文である。1区柱穴286（柱列1）から出土した。

瓦19 三巴文軒丸瓦 瓦当面の右上から左下方向に幅2mm前後の凹線が残る。右巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接して界線となる。中心に小突起がある。1区柱穴286（柱列1）から出土した。

瓦20 巴文軒丸瓦 左巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。中心に小突起がある。巴の復元数は三巴文である。1区建物146から出土した。

瓦21 三巴文軒丸瓦 左巻き巴文である。巴の頭部は離れ、やや大きく、尾部は互いに接して

界線となる。

瓦 22 三巴文軒丸瓦 左巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。

瓦 23 三巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は長く延び、互いに接しない。

瓦 24 三巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。1区第3層から出土した。

瓦 25 三巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。

瓦 26 三巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。巴の頭部は接する。尾部は互いに接して界線となる。

瓦 27 巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。尾部は互いに接して界線となる。

瓦 28 巴文軒丸瓦 瓦当面には、筥キズがある。右巻き巴文である。頭部は互いに接する。尾部は互いに接して界線となる。外区は珠文が巡る。

瓦 29 巴文軒丸瓦 左巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は界線に接しない。外区は界線と珠文が巡る。珠文は大きく密である。1区建物146から出土した。

瓦 30 三巴文軒丸瓦 右巻き巴文である。巴の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。中心に小突起がある。外区は珠文が巡る。1区建物160から出土した。

四町出土軒平瓦（図版65・116）瓦31～41があり、唐草文9点、剣頭文2点、計11点ある。そのうちまとまって出土したものは、瓦31～35が3区泉241から、瓦36～38が3区第3層から出土した。

瓦 31 均整唐草文軒平瓦 唐草文は左右から中央に向う。上外区に珠文を配する。

瓦 32 均整唐草文軒平瓦 瓦31と同文であろう。左端部である。

瓦 33 均整唐草文軒平瓦 瓦31と同文であろう。右端部である。瓦31～33で文様のほぼ全体がわかる。

瓦 34 唐草文軒平瓦 瓦当面には、筥の木目痕が残る。文様には筥ズレがみられる。唐草文は各单位が離れ、主葉は強く巻き込む。丹波系である。

瓦 35 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉はゆるやかに延び、支葉は直線的である。丹波系である。

瓦 36 唐草文軒平瓦 右端部である。瓦33の文様に類似するが、右脇区がなく唐草文が途中から始まる。

瓦 37 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉は左と右から派生するものがある。左から派生する主葉はゆるやかに巻き込み、右から派生する主葉はほぼ直線である。支葉は強く巻き込み、複線のものがある。瓦当面の反りは、中心部はほぼ平坦であり、端で反りが強くなる。飾り瓦の可能性はある。

瓦 38 唐草文軒平瓦 瓦当面には、筥の木目痕が残る。唐草文は各单位が離れ、主葉は強く巻き込む。丹波系である。

瓦 39 剣頭文軒平瓦 瓦当部はほぼ完形である。剣頭文を5個配し、各单位は大きく、離れる。中の突線は太い。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。3区井戸89から出土した。

瓦 40 剣頭文軒平瓦 右端部が欠損する。瓦39と比較すると各单位の剣頭文は小さい。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。3区第2層から出土した。

瓦 41 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉は連続して大きく反転する。支葉は強く巻き込んで主葉に接する。また唐草文上部は周縁に接し、文様が途切れる。播磨系である。3区井戸 451 木枠内から出土した。

五町出土軒平瓦（図版 65・66・117・118）瓦 42～67 があり、唐草文 10 点、斜格子文 4 点、剣頭文 7 点、その他 5 点、計 26 点ある。そのうちまとめて出土したものは、瓦 43～47 が 1 区第 4 層から、瓦 52～54・62・63・65 が 2 区池 160 から出土した。

瓦 42 均整唐草文軒平瓦 中心飾りは上向き C 字形である。唐草文の主葉は連続し、両側に 3 転する。支葉は強く巻き込む。外区は珠文が巡る。平瓦部凸面には斜め格子タタキ目が残る。瓦 10 と類似する手法である。1 区溝 367 から出土した。

瓦 43 唐草文軒平瓦 唐草文は右から左方向である。途中に太い縦線を配する。主葉・枝葉は強く巻き込む。

瓦 44 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉は連続し反転する。枝葉は強く巻き込み、先端は水滴状になる。

瓦 45 唐草文軒平瓦 瓦当部は完形である。唐草文は中心から両側に 2 転する。主葉は連続して緩やかに反転し、枝葉は巻き込む。山城系である。

瓦 46 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉は連続し緩やかに反転する。枝葉は直線的に派生する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 47 唐草文軒平瓦 唐草文の主葉は連続し屈曲して反転する。枝葉は内湾する。

瓦 48 唐草文軒平瓦 唐草文の各单位は離れ、主葉と枝葉は強く巻き込む。瓦当部の成形は折曲げ技法である。1 区溝 357 から出土した。

瓦 49 宝相華唐草文軒平瓦 瓦当部は完形である。花文を 3 個配し、各花文を主葉で繋ぐ。左端の花文は半截になる。各部分は離れている。1 区柱穴 286（柱列 1）から出土した。

瓦 50 雁巴文軒平瓦 雁行文が連続する。右端に巴文の 1 部が残る。山城系である。1 区建物 146 から出土した。

瓦 51 偏行唐草文軒平瓦 瓦当中央部が欠損する。唐草文の各单位は外区との界線に接する。主葉と枝葉は強く巻き込む。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。1 区建物 160 から出土した。

瓦 52 唐草文軒平瓦 瓦当部はほぼ完形である。唐草文は 3 単位あり、各单位は離れ、周縁から派生する。主葉と枝葉は強く巻き込む。瓦当面の右上と左下に、楔状の突線が 4 本ある。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 53 幾何学文軒平瓦 右上から左下と左上から右下の斜線で逆三角形の空間を形成し、その中央に太い杭状の突線を縦に配する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 54 斜格子文軒平瓦 斜格子文を配する。右上から左下方向と左上から右下の複線である。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。

瓦 55 斜格子文軒平瓦 斜格子文を配する。格子は複線である。瓦当部の成形は折曲げ技法である。2 区第 2 層から出土した。

瓦 56 斜格子文軒平瓦 瓦当部は完形である。6 単位の複線斜格子文を配する。斜格子の交差する位置はほぼ並列している。1 区土坑 108 から出土した。

瓦 57 斜格子文軒平瓦 斜格子文を配する。格子は単線である。1 区第 3 層から出土した。

瓦 58 剣頭文軒平瓦 剣頭文は突線で表す。上外区には界線と珠文帯がある。1 区建物 160 から出土した。

瓦 59 剣頭文軒平瓦 瓦当部は完形である。剣頭文を 6 個配する。1 区土坑 93 から出土した。

瓦 60 剣頭文軒平瓦 右部が欠損する。剣頭文の復元数は 7 単位である。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。1 区柱穴 286 (柱列 1) から出土した。

瓦 61 剣頭文軒平瓦 瓦当部はほぼ完形である。剣頭文を 6 個配する。瓦当部の成形は半折曲げ技法である。2 区泉 100 から出土した。

瓦 62 剣頭文軒平瓦 瓦当部は完形である。剣頭文を 6 個配する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 63 剣頭文軒平瓦 瓦当部は完形である。剣頭文を 6 個配する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 64 剣頭文軒平瓦 瓦当部は完形である。剣頭文を 8 個配する。当部の成形は折曲げ技法である。1 区溝 367 から出土した。

瓦 65 剣巴文軒平瓦 瓦当部は完形である。瓦当面には布目痕が残る。右巻き三巴を左右端と中心に計 3 個配し、各巴文の間に剣頭文を 2 個 1 単位で配する。剣頭文の中の突線は分かれる。瓦当部の成形は折曲げ技法である。

瓦 66 連巴文軒平瓦 右巻き二巴を連続して配する。巴文の頭部は接する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。2 区土坑 275 から出土した。

瓦 67 巴文軒平瓦 左巻き三巴を配する。瓦当部の成形は折曲げ技法である。1 区土坑 275 から出土した。

今回の調査で出土した軒瓦は、大半が平安時代後期から鎌倉時代前期のものである。軒瓦の出土総点数は 250 点であり、四町の出土数は 55 点 (全体の 22%)、五町の出土数は 195 点 (全体の 78%) である。四町の出土軒瓦の構成 (表 4) は、軒丸瓦では蓮華文が 86.2%、巴文が 3.4%、不明が 10.3% である。軒平瓦では、唐草文が 80.8%、格子・剣頭文などが 15.4%、不明が 3.8% である。五町の出土軒瓦の構成 (表 4) は、軒丸瓦では蓮華文が 16.7%、巴文が 72.2%、不明が 11.1% である。軒平瓦では唐草文が 26.7%、格子・剣頭文などが 61.9%、不明が 11.4% である。

以上、出土軒瓦の構成は、五町の出土点数は四町の約 4 倍である。また、平安時代後期の蓮華文・唐草文軒瓦は四町と五町の両町から出土するが、五町では山城系の巴文軒丸瓦や「折曲げ」技法で製作した斜格子文・剣頭文軒平瓦などが大半を占める。これら出土状況から、五町では瓦を使用した建物が鎌倉時代に至っても建てられたが、それに対して四町では瓦を使用した建物を伴うような規模の大きい土地利用は、鎌倉時代以降なされなくなった可能性の高いことが窺える。

(6) その他の遺物

硝子玉、硯・温石・鍋の石製品、箸・皿・下駄などの木製品、銭貨、壁土が出土した。

1) 硝子製品 (図版 119、図 31)

ガ1 ほぼ球形の硝子玉である。径約 0.7 cmある。中心に径約 0.1 cmの穿孔がある。色は濃い青色を呈する。2区井戸 348 から出土した。

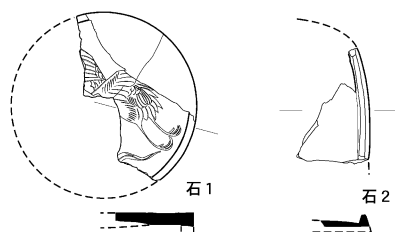
2) 石製品 (図版 119、図 31)

石1 径約 10 cm、厚さ 0.4 cm前後、約半分近く残存している。裏面には線刻の文様がある。文様面は中央が厚く外周に向かって薄くなる。文様は亀の尾と思われるものと鶴の羽と脚であろう。鶴は脚の状態から飛翔した姿と思われる。裏面の外周は剥離しているが、縁帯が巡っていたと思われる。石材は粘板岩系である。蓋の可能性もある。2区池 160-1 から出土した。

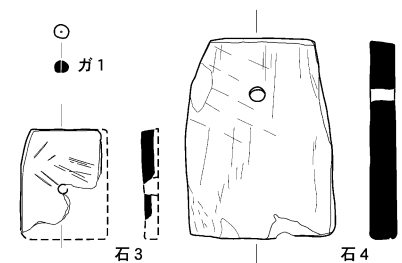
石2 硯である。長さ約 6.3 cm、幅約 4.0 cm、厚さ 0.45 cm残存しており、裏面は剥離している。外縁は台形状に約 0.5 cm突起し、海部は中央から外に向かって低くなり丸みを帯びる。一部使用痕が認められる。石材は粘板岩系である。2区池 160 から出土した。

石3 滑石製の温石である。長さ約 5.6 cm、幅約 4.4 cm、厚さ約 0.75 cm残存しており、裏面は剥離している。平面形は上端がやや狭まる長方形と考えられる。中央付近に径約 0.5 cmの穿孔がある。2区池 160 から出土した。

石4 滑石製の温石である。長さ約 10.4 cm、幅 5.6 ~ 7.7 cm、厚さ約 1.4 cmである。平面形状は上端幅がやや狭まる長方形である。幅の狭い側に径約 0.7 cmの穿孔がある。2区土坑 314 から出土した。



石5 滑石製の羽釜である。口径 17.4 cm、残存高 6.1 cmある。体部はやや内湾する。口縁部外面下方に罫が巡る。外面には加工痕が残る。2区泉 100 木枠内から出土した。



3) 木製品 (図版 119、図 32)

木1 ~ 3 箸である。面取りを施し、断面形は楕円形である。木1 はほぼ完形である。長さ約 21.4 cm、厚さ約 0.4 cm、幅 0.4 ~ 0.7 cm。両端はやや尖る。木2 は一端が欠損する。残存長約 11.5 cm、厚さ約 0.4 cm、幅 0.3 ~ 0.65 cm。木3 は一端が欠損する。残存長約 10.5 cm、厚さ約 0.4 cm、幅 0.4 ~ 0.6 cm。いずれも 1区土坑 137 から出土した。

木4 ヘラであろう。柄の先端は欠損する。下端の両面を薄く削り出す。残存長約 10.3 cm、ヘラ部は幅 1 cm前後、

図 31 ガラス・石製品実測図 (1 : 4)

厚さ 0.1 ～ 0.3 cm。1 区土坑 137 から出土した。

木 5 漆器の皿である。口径 8.3 cm、器高 1.85 cm。高台を削り出す。内外面は黒漆を塗り、赤漆で草花を描く。底部外面の漆は剥離している。2 区井戸 348 木枠内から出土した。

木 6 下駄である。残存長 14.3 cm（復元長 14.5 cm）、幅約 8.3 cm、厚さ 1 cm 前後、歯の厚さ 0.5 cm 前後。歯を削り出した連歯下駄である。鼻緒の穴が 3 つあり、大きさは径 0.8 ～ 1.0 cm である。この下駄は大きさから子供用であろう。2 区土坑 335 から出土した。

4) 銭貨 (図版 120)

銭 1 皇朝十二銭の神功開寶（初鑄 765 年）である。3 区柱穴 248 から出土した。

銭 2 皇朝十二銭の延喜通寶（初鑄 907 年）である。2 区池 160 から出土した。

銭 3 渡来銭の淳化元寶（北宋・初鑄 990 年）である。1 区土坑 76 から出土した。

銭 4・5 渡来銭の祥符元寶（北宋・初鑄 1009 年）である。銭 4 は 1 区第 3 層、銭 5 は 1 区溝 204 から出土した。

銭 6 渡来銭の皇宋通寶（北宋・初鑄 1038 年）である。篆書で 3 区柱穴 303 から出土した。

銭 7 渡来銭の元祐通寶（北宋・初鑄 1086 年）である。3 区柱穴 303 から出土した。

銭 8 渡来銭の昭聖元寶（北宋・初鑄 1094 年）である。4 区整地層 112 から出土した。

他に、皇宋通寶の真書と思われるものが 2 区井戸 200 曲物内から、開元通寶と思われるものが 2 区第 2 面上面から出土している。

5) 壁土 (図版 120)

1 区土坑 270 から壁土が出土した。なかには平坦な面をもつものと建築部材の痕の遺存するものがある。土質は粘土質で径 0.1 ～ 1 cm の砂粒や礫が多く混じる。断面にはスサの痕跡や藁の痕跡も認められる。不明瞭であるが、平坦面から厚さ 0.5 cm 前後は混入物がほとんど入らず、内側はスサの痕跡や礫が多くみられ、上塗りと下塗りの壁材の差異であると考えられる。

参考文献

『平安京古瓦図録』雄山閣 1977 年

『坂東善平収蔵品目録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980 年

『木村捷三郎収集瓦図録』京都市文化市民局 1996 年

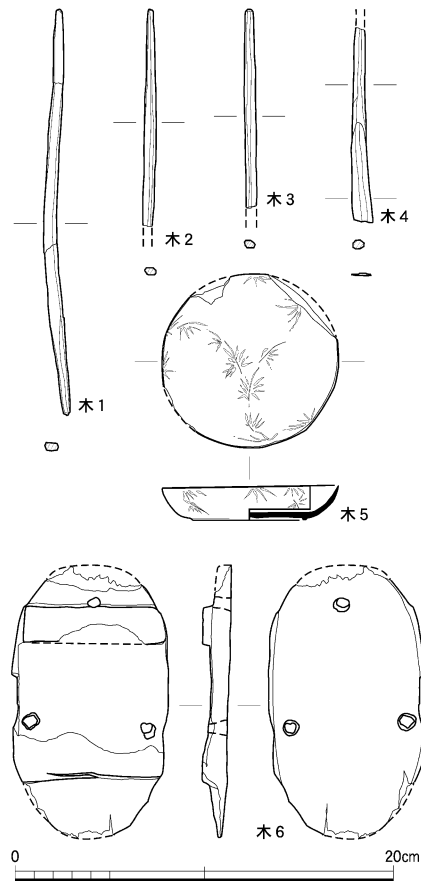


図 32 木製品実測図 (1 : 4)

5. ま と め

今回の調査地は、平安京左京八条三坊四・五町に相当し、調査地のほぼ中央には町尻小路が南北方向に延長する。調査区は南北幅が11 m前後と狭いものの、東西延長は約215 mに及び、四・五町内のやや南側をほぼ横断する。調査の結果、四・五町の歴史を明らかにするうえで数々の重要な考古学的成果を挙げる事ができた。以下、これらの成果について報告し、まとめとしたい。

(1) 平安京左京八条三坊四・五町の変遷について

1) 平安時代

平安時代前期から中期の遺構は、今回の調査区内では未検出である。しかし、出土遺物から当該期の四・五町を概観すると、四町域である3・4区では、鎌倉時代以降の遺構や整地土層中には平安時代前期から中期後半代に属する土器類が比較的多く包含され、中には大破片も含まれている。四町域あるいは周辺地域に当該期の遺構が遺存する可能性を示す資料であり、開発が及び始めたことを示す成果といえる。五町域では当該期の出土遺物は少ない。1区湿地189が示すように、当該期の五町域東半部は湿地が広がり、居住には不適な環境であったことが窺われる。

一方で、四町の3区泉443や五町の1区建物146・溝416は、出土遺物から平安時代中期末(11世紀後葉～末)まで遡る可能性があり、今回の調査における検出遺構の中では最も古い遺構に位置付けられる。これら遺構は単独で成り立つものではなく、建物や庭園などの付帯施設を伴うと考えられる。また、四・五町内における検出遺構の位置を考慮すれば、少なくとも1/2～1町規模の邸宅を構成する遺構であることを窺わせる。四・五町における当該期の文献史料は明らかではない。

平安時代後期の遺構は、四町では、4区井戸167、3区では先述した泉443を含め、井戸188・235、集石445、土坑448、泉241、土坑419などがある。五町では、2区落込361、池160-2、泉100、井戸55、石敷180、1区では先述した建物146を含め、溝416、湿地189、建物160、柱列1～4などがある。

四町では西二行北五門の中央北寄りに4区井戸167がある。井戸167は平安時代後期(12世紀後葉)に属し、最下層からは「白散」墨書土器が出土している。文献史料によれば、康治年間(1142～1144)、四町南西部に藤原忠実が丈六の阿弥陀如来像を安置して「阿弥陀堂」を建立したが、後に荒廃し、仁安四年(1169)に移転して再建したとある。4区井戸167は遺構の時期から藤原忠実が四町に邸宅を構えた時期に相当し、また、検出位置からは阿弥陀堂近辺に位置した遺構である可能性が高いと考えられる。

四町南東部では、3区泉241、土坑419がある。これらの遺構についても、庭園の付帯施設と考えられ、3区泉241の技巧を凝らした造作や敷設方法および出土軒瓦などの遺物からも邸宅が存在したことが窺われる。文献史料では、平安時代末期から鎌倉時代後期後半までの時期に四町東半部には「八条院領」が南北に配置されていたことが記されているが、内部の様子については明らかでない。

五町では、建物遺構の1区建物146・160、建物関連遺構の2区石敷180、落込361、1区柱列1～4、溝416、生活遺構の2区井戸55、庭園遺構の2区池160-2、泉100などがある。1区溝416は建物146と併存する。

先述したように平安時代後期の五町は、文献史料によると、藤原顕隆・顕能父子の「八条町尻第」と推測されており、大治二年（1127）、顕隆は丈六の五大尊像を納めた「八条堂」を建立した。この邸宅は平安時代後期後半の平治年間（1159～1160）まで存続し、「美福門院御所」として受け継がれ、「二条天皇仮皇居」としても用いられる。その後、平安時代末期の養和元年（1181）に平頼盛が「八条室町亭（池殿）」を当該地である五町に新造する。この記事からは「八条町尻第」の邸宅自体は多少の変更があったにせよ、約半世紀以上にわたり存続していたことが推測できる。「八条室町亭（池殿）」の存続期間については、文治二年（1186）の頼盛没後の様子は明らかでなく、文献上で辿れるのは約5年間である。

1区建物146は存続期間が長く、平安時代中期末から後期後半（11世紀後葉～12世紀後葉）の時期まで存続したと考えており、上記文献史料では藤原顕隆の八条町尻第から美福門院御所が置かれた時期に相当する。さらに、文献史料からは窺えないが、八条町尻第の造営時期が遡る可能性や八条町尻第造営前の邸宅に伴う建物の可能性もあろう。

なお、1区建物146および建物160は、五町内における建物配置を考慮すると、南北棟の付属舎的な建物であろうと考えられる。

その他の遺構と文献史料の位置付けを検討すると、2区落込361は同邸宅に関連し、1区湿地189の埋没時期は八条町尻第の造営時期に関連すると考えられる。また、1区建物160、2区井戸55、池160-2は美福門院御所を示す遺構であると考えられる。1区柱列1～4、2区泉100は平頼盛の八条室町亭に関連する遺構と考えており、この時期には、池160-2に泉100が新たに敷設され庭園として再整備されたのであろう。

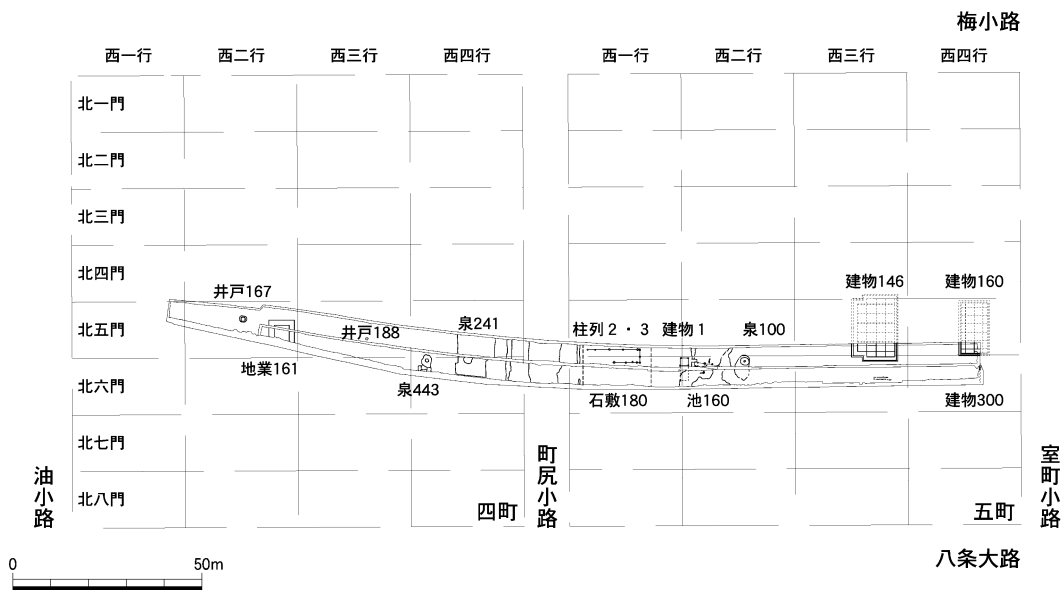


図 33 主要遺構配置図（1：2,000）

2) 平安時代末期から鎌倉時代

平安時代後期に属する遺構のうち、四町では4区井戸 167、3区泉 241、土坑 419 が、五町では2区井戸 55、1区柱列 1～4などが鎌倉時代前半代までには廃絶した。

一方、五町の2区泉 100は鎌倉時代後期（13世紀後葉）に廃絶したと考えている。平頼盛没後の八条室町亭の様子は明らかではないが、2区泉 100の廃絶時期を考慮すると、八条室町亭後でも邸宅が継続して営まれたと考えられる。また、鎌倉時代後期（13世紀中葉）の2区池 160-1は、池 160-2が改修されたものであり、2区泉 100とともに庭園として存続していた時期があることが考えられる。四町の3区泉 241と五町の2区泉 100は、平安時代末期から鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初頭）の時期にはともに存続しており、同時期に泉を伴う庭園が広がる邸宅の景観が四・五町に存在したことを窺わせる成果である。

鎌倉時代の主要な遺構は、四町では建物遺構の4区地業 106、3区建物 99・161、建物関連遺構の柵 1、生活遺構の井戸 89・93・196がある。五町では生活遺構の2区井戸 199・200・304・316・356、1区井戸 109・252がある。文献史料によれば、4区の位置する四町西部については、鎌倉時代の史料は明らかではないが、3区の位置する四町東部については、鎌倉時代後期後半の正和二年（1313）に「八条院領」が東寺に寄進され、「東寺領八条院町」が成立するとされる。

四町の4区地業 106は全体規模が明らかではないが、やや深い溝を巡らし、溝内に礫積み溝を構築して底面に礎石を据えるなど、精巧な造作を行っている。近似する遺構として平安京右京六条一坊六町の鎌倉時代前期に属する建物が挙げられる¹⁾。この建物は庇や縁が付属する礎石建物で、下部構造として母屋直下に礫を多量に詰めた母屋よりも一回り小規模な地業が敷設される。地業の掘形底面には杵組が設置され礎石が据え付けられる。基盤層を掘り込み底面に礎石を据えるなどの工法は、立地条件は異なるものの、地業 106と共通する。従って、地業 106をSB79下部構造と同目的の遺構と捉えれば、地業 106上部に仏堂などの建物も想定できよう。あるいは、地業 106の検出範囲と同規模の建物を上部に想定すると、後世の遺構であるが倉の地業の形状に近似する。しかし、鎌倉時代に遡る倉を示す地業の検出例はない。いずれにせよ、地業 106は建物関連遺構として重要な遺構であるといえよう。3区建物 99・161、井戸 89・93・196は四町南東部に位置する遺構群である。当該地については、文献史料により八条院領から東寺八条院町へと変遷することが知られ、上記遺構群は職能民の町として変貌する様相を示すものであると考えている。

五町では、四町と比較して遺構数は少ない。建物遺構としての柱穴や、井戸・土坑などは五町東端、東西中央、西端に集中することが窺われる。このことは、概して町尻小路に面对する五町西部、室町小路に面对する五町東部に遺構が集まる傾向にあることを示しており、当該地が大規模邸宅から中世的な町屋へと移行したものとみられる。さらに、五町南東部では鎌倉時代後期前半代（13世紀後葉）の1区井戸 109を最後として、建物や生活遺構はみられなくなる。当該地付近は荒廃し空地化あるいは農地へと変貌を遂げたのであろう。五町については鎌倉時代の文献史料は明らかではない。

3) 室町時代前期

室町時代前期の検出遺構数は、鎌倉時代に比べ減少する。

四町南西部では、鎌倉時代後期後半から室町時代初頭（13世紀後期～14世紀中頃）の4区土坑35以降、遺構は未検出であり、その後は前項で述べた五町南東部と同様の状況に至ったのであろう。

四町南東部では、当該期の検出遺構数は少ないながらも室町時代初頭（14世紀中頃）の3区土坑296・459、室町時代前期前半（14世紀後葉）の3区井戸451・土坑122・162・163・173などがある。室町時代前期中頃（14世紀末～15世紀初頭）以降は、空閑地化あるいは農地化した可能性がある。

五町南西部では、室町時代初頭（14世紀中頃）に廃絶した2区井戸316・356、室町時代前期（14世紀中頃～15世紀前葉）の2区井戸348、溝227、土坑297などがある。室町時代後期以降（15世紀中葉以降）の遺構は検出していない。

このように、当該期には検出遺構数は減少するが、四町南東部や五町南西部での検出数が多いことから、町尻小路の両側における町屋化が進展したことを窺わせる。

4) 室町時代後期以降

前述したように、四・五町南半部の一帯は室町時代後期以降、農地化が進行したと考えられ、耕作に関連する溝などを多数検出している。以下、当該期の耕作に関連する溝の検出状況を概観する。

四町側の4区では室町時代のものは未検出であり、耕作関連の土層や溝などは削平を受けた可能性が高い。江戸時代末期の東西方向の区画溝および溝群がある。3区では室町時代末期から江戸時代にかけての溝がある。溝は3区西1/3では分布が希薄ながらも南北方向を、以東では東西方向を示す。

五町側の2区では室町時代末期から江戸時代にかけての溝がある。溝は2区西半部では希薄ながらも南北方向および東西方向を示し、東半部では南北方向を示す。1区では室町時代から江戸時代の溝がある。溝は西半では南北方向、東半では東西方向を示す。

このように、溝の方向が揃う箇所を耕作地の単位として把握すれば、四町の3・4区で3枚、五町の1・2区で枚面の合計6枚の耕作地が分布していたことが判明したことになる。

(2) 町尻小路について

今回の調査では、町尻小路路面と東西側溝を検出した。平安時代後期後半から室町時代前期前半（12世紀後葉～14世紀後葉）にかけてのものであるが、2区路面150-2の路面最下層から平安時代後期（12世紀前葉）の遺物も出土しており、当該地における町尻小路の敷設時期はこの時期まで遡る可能性がある。

路面に相当する箇所は東西幅約14.5 mある。東西端には平坦な石敷き路面があり、東端の路面幅は1.6～1.8 m、西端の路面幅は1.1～1.2 mある。路面中央部は東西端の平坦面から中央に向かって緩く傾斜面となり、幅約10 m前後の水路状を呈する。京域内での路面検出例では、断面形

は中央部がやや高まる形状となる傾向にある。今回検出した路面の形状から敷設目的を想定すると、まず、多量の雨水を短時間で排水する機能が考えられる。また、泉の事例を示すまでもなく、当該地は地下水位が当時の地表面近くまで達していたと考えられ、泉 100 で検出した地下水の湧出口と同様の空洞小穴を 2 区町尻小路東側の遺構面下の浅い位置で確認している。従って、幅広の水路を敷設し常時地表面近くの地下水を排水することにより、環境を改良する目的も想定できよう。路面幅が条坊路の規定小路路面幅の倍に達することも上記路面敷設の目的を裏付けているのではないだろうか。

側溝は、東側溝は平安時代後期後半と考えている 2 区溝 190、鎌倉時代の 2 区溝 159 が、西側溝は、鎌倉時代の 3 区溝 63 がある。2 区溝 159 と 3 区溝 63 は同時併存する。溝心々間は約 17 mあり、小路側溝心々幅に比べ、倍以上の広さを有することになる。

町尻小路の既往の調査例は 3 例ある²⁾。一例として、平安京左京六条三坊五町跡では、平安時代後期から鎌倉時代の路面と東側溝が検出されている。東側溝の中心は、東側築地想定線から 1.5 ～ 2.6 m西に位置している。本事例を含め、条坊路は同一路であっても敷設される地域の環境によって規模や機能が変更されたことを窺わせる。

(3) 周辺調査との関連について

1 区湿地 189 は、図 4- 調査 17 で検出された SD350 から蛇行して連続する可能性がある遺構である。SD350 は幅 10 m以上の南西方向を示す自然流路で、平安時代後期に埋没する状況は 1 区湿地 189 と同様である。前後して広範囲にわたり調査地周辺に開発が進む状況は、当該地が文献史料に現れる時期を示す事例といえる。

一方、調査値北側の京都駅再開発に伴う一連の調査で広範囲にわたり出土した鑄造関連遺物が、今回の調査では皆無であることは注目できる。この事例により、鑄造関連遺跡は梅小路沿の地域から北側に展開する可能性が高まった。

以上、今回の調査成果について述べてきた。町尻小路を挟み四・五町の 2 町分の範囲にわたり調査できたことで、平安時代から室町時代に至る遺跡の様相を明らかにするなど、多くの調査成果を挙げることができた。また、今回の調査地点である JR ならびに近鉄京都駅構内は、駅開設以後、駅付帯施設を除けば大規模な開発が行われることはなく、遺跡の遺存状況が良好であることも改めて明らかにした。

註

- 1) 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 2) 『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005 年

6. 付章 出土した種実同定

種実は、表に記載のサンプル量の土を2mm・1mmの篩と60メッシュのシルクスクリーンで選別し、実体顕微鏡で同定した。

1区湿地189では、上層・下層の2層からサンプリングした。下層は抽水・沈水性のミズハコベ科・オモダカ科・ヒルムシロ科・ミズアオイ科・ツユクサ科・カヤツリグサ科が多く、ハコベ属ではノミノフスマ、キンボウゲ属ではタガラシが多かった。上層は抽水・沈水性のものが見られなくなり耕地の水湿性タガラシ・タカサブロウなどと、栽培されるウリ科・ナス科・ヒユ科が見られた。

2区泉100は、栽培種と思われる炭化マメ以外の種実は見られなかった。

3区泉241は4層（黒褐色粘質土）と5層（腐植土）からサンプリングした。5層は種類・量ともに少なく、耕地あるいは人家周辺に植生するものだけであった。4層は耕地性のザクロソウ・スベリヒユや水田・湿地に生育するイグサ科が増える。

4区土坑202は木本のキイチゴ属や草本のウリ科・ナス科など可食できる種実しか出ていない。

以上の種実同定成果から遺跡を概観すると、湿地109の下層は抽水・沈水性の種実が多く、未だ湿潤な環境にあったことが窺われるのであるが、上層では耕地を示す種実や栽培種がみられるようになることから、湿地はさらに堆積・陸化が進み、周囲に開発が及び始めたことを示すものであろう。次に、泉100では、同定結果から栽培植物以外はみられないことが判明した。種実の遺存環境にもよるが、地下水の湧出する泉の構造ならびに機能そのものを傍証する成果といえよう。また、泉241では落ち込み部に堆積した上下2層の同定結果が得られた。下層の腐植土層の堆積は、泉湧出部から地下水が湧出し、周囲に白色円礫を配する意匠を損なう景観ではあるが、人家周辺に植生する植物が同定され、泉を取り巻く住環境は維持されていたことの傍証ともいえる。しかし、上層では水田や湿地環境を示す植生が優位となり、鎌倉時代前期以降泉としての機能は衰退したことを窺わせる。

以上のように、今回の種実同定作業を通じて、当該地に邸宅が構えられる直前までの環境や、邸宅に設けられた園池を構成する泉など、遺跡の環境や遺構の実態の一端を明らかにし、付加できたことも重要な調査成果といえよう。

表5 自然遺物一覧表

番号	和名	科名	部位	1区湿地189	1区湿地189	2区泉100	3区泉241	3区泉241	3区泉241	4区土坑202	生育環境
				上層 約2600ml	下層 約1800ml	約6000ml	セク4 約6600ml	セク5 約1900ml	本体 約280ml	約1600ml	
木本											
1	カジノキ	クワ	果実				2	1			栽培
2	キイチゴ属	バラ	核	1			1			94	
3	アカメガシワ	トウダイグサ	種子					1			
4	ノブドウ	ブドウ	種子	2							
5	タラノキ	ウコギ	果実				1				
6			トゲ	5	2						
草本											
7	カナムグラ?	クワ	果実	1							
8	ミズ属?	イラクサ	果実		1						
9	タデ (三稜形)	タデ	果実	32	12						水湿性
10	タデ (扁平形)	タデ	果実	85	37		1				水湿性
11	ギンギン属	タデ	果実	10							
12	ギンギン属	タデ	花被	2							
13	ミソソバ	タデ	果実	1							水湿性
14	ツメクサ	ナデシコ	種子	1							
15	ノミノツツリ	ナデシコ	種子	1							
16	ハコベ属	ナデシコ	種子	51	205		5				
17	ザクロソウ	ザクロソウ	種子	5	3		75	3	2		
18	スベリヒユ	スベリヒユ	種子	10			38		2		
19	アカザ属	アカザ	種子		4		5	1			
20	ヒユ属	ヒユ	種子	240			16	2			
21	タガラシ	キンボウゲ	果実	75	178						水湿性
22	キンボウゲ属	キンボウゲ	果実	3	8						水湿性
23	ドクダミ	ドクダミ	種子	2							
24	炭化マメ1	マメ	果実			1					栽培
25	炭化マメ2	マメ	果実			1					栽培
26	クサネム	マメ	果実		1						
27	クサノオウ	ケシ	種子				1				
28	アブラナ科	アブラナ	種子		39		2				
29	ヘビイチゴ属かキジムシロ属	バラ	果実		9		2				
30	カタバミ	カタバミ	種子	2	3		12	2			
31	エノキグサ	トウダイグサ	種子		1		1				
32	ミズハコベ	ミズハコベ	種子		26						水湿性
33	メロンの仲間	ウリ	種子	15						1	栽培
34	スズメウリ	ウリ	種子	4	2						
35	ミズユキノシタ	アカバナ	種子		2						水湿性
36	チドメグサ属	セリ	果実	4	20		5				
37	セリ科	セリ	果実	15							水湿性
38	コナスビ?	サクラソウ	種子		1						
39	アカネ科	アカネ	種子	1							
	ミズタバコ?	ムラサキ	種子				1				
40	シソ属	シソ	果実	2	1		1	1			
41	イヌコウジュ属?	シソ	果実	1			2				
42	トウバナ属	シソ	果実		3		2				
43	ナス	ナス	種子	18						1	栽培
44	ナス科	ナス	種子	6	1		2			6	
45	タカサブロウ	キク	果実	84	3		2				水湿性
46	キク科	キク	果実		1						
47	ヘラオモダカ	オモダカ	果実	3							水湿性
48	オモダカ属	オモダカ	果実		4						水湿性
49	オモダカ科	オモダカ	種子		3						水湿性
50	ヒルムシロ属	ヒルムシロ	果実		4						水湿性
51	イバラモ属	イバラモ	種子		85						水湿性
52	イトトリゲモ	イバラモ	種子		28						水湿性
53	ミズアオイ	ミズアオイ	種子	2	16						水湿性
54	コナギ	ミズアオイ	種子	6	195						水湿性
55	イグサ科	イグサ	種子				14				水湿性
56	イボクサ	ツユクサ	種子	14	102		3				水湿性
57	イネ?	イネ	穎		1						
58	ヒエ?	イネ	穎	2							
59	ヒエ属	イネ	穎	48							
60	スズメノヒエ属	イネ	穎		2						
61	イネ科	イネ	穎	79	54		6	2			
62	カヤツリグサ科 (三稜形)	カヤツリグサ	果実	13	19		4				水湿性
63	カヤツリグサ科 (扁平形)	カヤツリグサ	果実	12	60		8				水湿性
64	スゲ属	カヤツリグサ	果実		3						水湿性
65	テンツキ属	カヤツリグサ	果実		3						水湿性
66	ホタルイ属	カヤツリグサ	果実	5	23						水湿性
その他											
67	昆虫			25	13		10			3	
68	ダニ			2							
69	粘菌胞子囊				5						

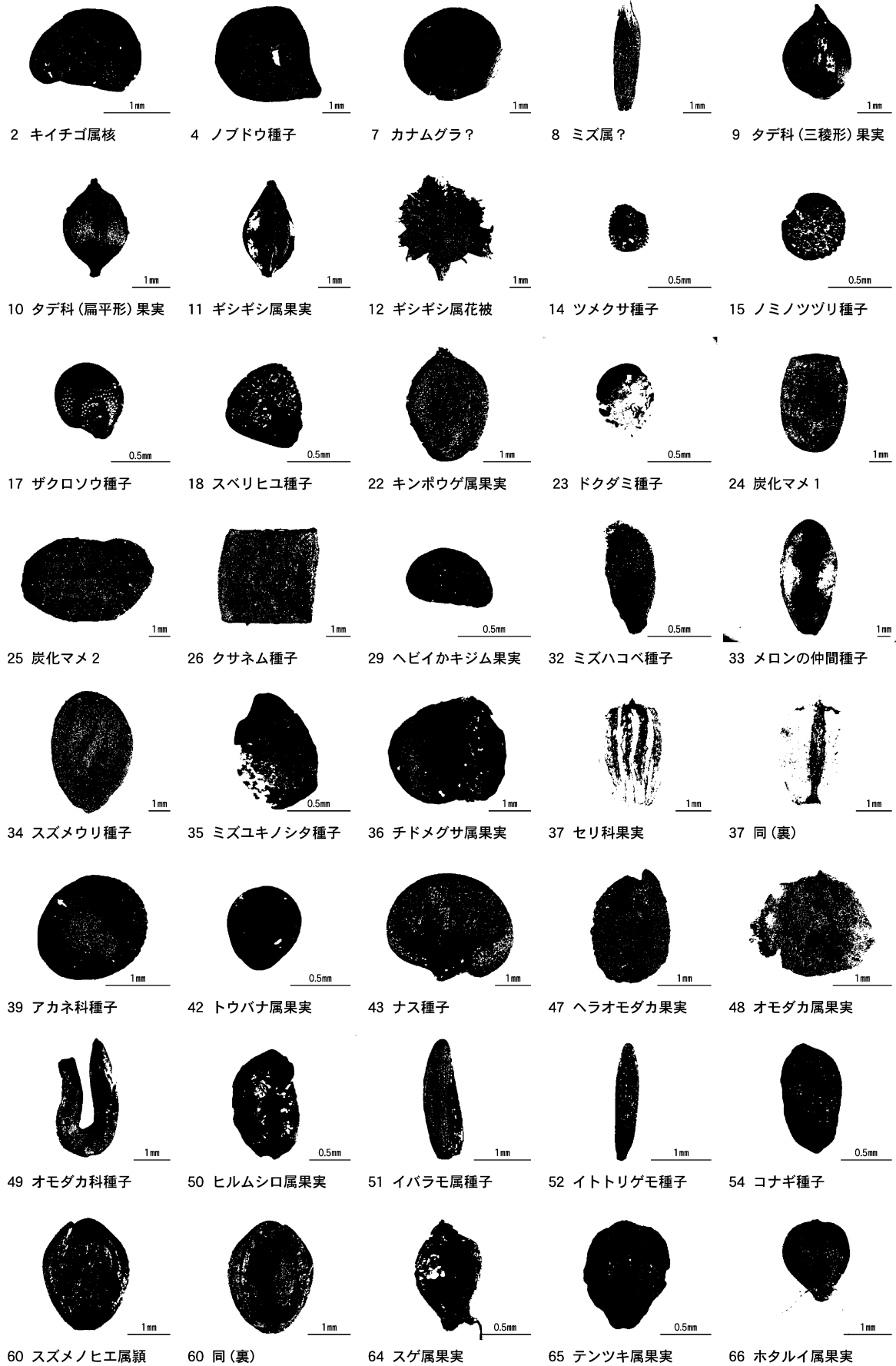


図 34 自然遺物

表6 掲載土器図面一覧表

番号	図面番号	遺物番号	地区	出土遺構	土器型式	時代	年代
1	図版56	1~15	3区	泉443	Ⅳ期新~Ⅴ期古	平中後~平後前	11c後~12c初
		16~18	1区	溝416	Ⅴ期古	平後前	11c末~12c初
		19~21	1区	土坑393	Ⅴ期古~中	平後前~平後中	11c末~12c前
		22~25	3区	土坑448	Ⅴ期古~中	平後前~平後中	11c末~12c前
		26~43	1区	建物146	Ⅳ期新~Ⅴ期新	平中後~平後後	11c後~12c後
		44~70	2区	落込361	Ⅴ期	平後	11c末~12c後
2	図17	71	1区	柱穴65(柱列6)	Ⅴ期	平後	11c末~12c後
		72~78	1区	建物160	Ⅴ期新	平後後	12c後
		79~81	2区	路面150-2	Ⅴ期新	平後後	12c後
3	図18	82~85	1区	第4層下層	Ⅴ期中~新	平後中~平後後	12c前~12c後
		86~89	4区	土坑74・第2層(混入)	Ⅱ期古~中	平前	9c中~後
4	図19	90~107	3区	第2・3層(混入)	Ⅱ~Ⅲ期	平前~平中前	9c中~10c
		108~113	3区	第2・3層(混入)	Ⅳ期中~新	平中後	11c中~11c後
5	図版57	114・115	1区	井戸252	Ⅴ期新~Ⅵ期古	平後後~鎌前前	12c後~13c初
		116~148	1区	土坑137	Ⅴ期新~Ⅵ期古	平後後~鎌前前	12c後~13c初
		149~151	2区	井戸55	Ⅴ期新~Ⅵ期古	平後後~鎌前前	12c後~13c初
		152・153	2区	石敷180	Ⅴ期新~Ⅵ期古	平後後~鎌前前	12c後~13c初
6	図21	154~157	4区	井戸167	Ⅴ期新~Ⅵ期古	平後後~鎌前前	12c後~13c初
		158~174	3区	泉241	Ⅵ期古	鎌前前	12c末~13c初
7	図版58	175~182	1区	土坑136	Ⅵ期古~中	鎌前前~鎌前中	12c末~13c前
		183~207	1区	土坑86	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
8	図22	208~245	1区	土坑102	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
		246~250	1区	土坑145	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
		251~253	2区	井戸199	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
		254・255	3区	路面227-2	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
		256~263	3区	土坑105	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
9	図23	264~267	4区	土坑154	Ⅵ期中	鎌前中	13c前
		268~294	2区	池160	Ⅴ期新~Ⅵ期新	平後後~鎌前後	12c後~13c中
10	図版59	295~311	1区	土坑52	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		312~315	1区	土坑100	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		316~335	1区	土坑101	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		336~341	1区	土坑271	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		342	3区	井戸196	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		343~346	4区	土坑122	Ⅵ期中~新	鎌前中~鎌前後	13c前~13c中
		347	1区	土坑400	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
11	図24	348~369	3区	井戸89	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		370~374	4区	Pit92	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		375~387	4区	土坑99	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		388~396	4区	土坑101	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
12	図版60	397~402	4区	土坑120	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		403~407	4区	土坑176	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		408~424	4区	整地層100	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		425~441	4区	整地層112	Ⅵ期新	鎌前後	13c中
		442~450	2区	泉100	Ⅵ期~Ⅶ期古	鎌前前~鎌後前	12c末~13c後
13	図版61	451~482	1区	土坑108	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
		483~505	1区	土坑153	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
		506~509	2区	溝159(町尻東側溝)	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
		510~516	1区	土坑333	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
14	図25	517~524	3区	溝63(町尻西側溝)	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
		525	3区	土坑324	Ⅵ期新~Ⅶ期古	鎌前後~鎌後前	13c中~13c後
		526~528	1区	井戸109	Ⅶ期古	鎌後前	13c後
		529・530	1区	土坑269	Ⅶ期古	鎌後前	13c後
15	図26	531	2区	井戸200	Ⅶ期古	鎌後前	13c後
		532~556	4区	土坑124	Ⅶ期古	鎌後前	13c後
16	図27	557・558	3区	土坑383	Ⅵ期新~Ⅶ期中	鎌前後~鎌後後	13c中~14c前
		559	1区	土坑367	Ⅵ期新~Ⅶ期中	鎌前後~鎌後後	13c中~14c前
		560~567	2区	土坑132	Ⅶ期古~中	鎌後前~鎌後後	13c後~14c前
17	図28	568~583	1区	土坑76	Ⅶ期中	鎌後後	14c前
		584~588	2区	井戸316	Ⅶ期	鎌後前~鎌末室初	13c後~14c中
		589・590	2区	井戸356	Ⅶ期	鎌後前~鎌末室初	13c後~14c中
		591~596	3区	土坑459	Ⅶ期	鎌後前~鎌末室初	13c後~14c中
18	図版62	597~623	3区	土坑296	Ⅶ期中~新	鎌後後~鎌末室初	14c前~14c中
		624・625	3区	土坑58	Ⅶ期中~新	鎌後後~鎌末室初	14c前~14c中
		626	4区	土坑35	Ⅶ期中~新	鎌後後~鎌末室初	14c前~14c中
		627~637	2区	路面150-1	Ⅶ期中~Ⅷ期古	鎌後後~室前前	14c前~14c後
		638~641	2区	井戸348	Ⅶ期新~Ⅷ期古	鎌末室初~室前前	14c中~14c後
19	図29	642~645	3区	土坑162	Ⅶ期新~Ⅷ期古	鎌末室初~室前前	14c中~14c後
		646	3区	Pit173	Ⅶ期新~Ⅷ期古	鎌末室初~室前前	14c中~14c後
20	図30	647~655	2区	溝227	Ⅷ期	室前	14c後~15c前
20	図30	656	2区	土坑297	Ⅷ期	室前	14c後~15c前

※時代の項では、例えば「平安後期前半代」を「平後前」のように、頭文字の列記に省略する。

表7 出土土器の構成 (破片数)

1 1区建物146				2 1区土坑137				3 1区土坑136			
器種	器形	破片数	比率 (%)	器種	器形	破片数	比率 (%)	器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	3875	99.8%	土師器	碗・皿	5862	98.5%	土師器	碗・皿	1259	99.9%
	鉢・盤	1	0.0%		鉢・盤	88	1.5%		鉢・盤	1	0.1%
	甕・鍋・釜	1	0.0%		甕・鍋・釜	0	0.0%		甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	0.0%
	不明	5	0.1%		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
	小計	3882	100.0%		小計	5950	100.0%		小計	1260	100.0%
瓦器	碗・皿	10	100.0%	瓦器	碗・皿	16	59.3%	瓦器	碗・皿	0	0.0%
	鍋・釜	0	0.0%		鍋・釜	10	37.0%		鍋・釜	2	100.0%
	壺・瓶	0	0.0%		壺・瓶	0	0.0%		壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	0.0%		火舎・火鉢	1	3.7%		火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
小計	10	100.0%	小計	27	100.0%	小計	2	100.0%			
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	3	15.8%	須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	0	0.0%	須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	0	0.0%
	壺・瓶	1	5.3%		壺・瓶	3	16.7%		壺・瓶	0	0.0%
	鉢	3	15.8%		鉢	7	38.9%		鉢	2	100.0%
	甕	11	57.9%		甕	8	44.4%		甕	0	0.0%
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	0.0%
	不明	1	5.3%		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
小計	19	100.0%	小計	18	100.0%	小計	2	100.0%			
白色土器	杯・碗・皿	7	87.5%	白色土器	杯・碗・皿	0	-	白色土器	杯・碗・皿	0	-
	高杯	0	0.0%		高杯	0	-		高杯	0	-
	盤	0	0.0%		盤	0	-		盤	0	-
	その他	0	0.0%		その他	0	-		その他	0	-
	不明	1	12.5%		不明	0	-		不明	0	-
	小計	8	100.0%		小計	0	-		小計	0	-
国産施釉陶器	碗・皿	0	-	国産施釉陶器	碗・皿	0	-	国産施釉陶器	碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-		壺・瓶	0	-		壺・瓶	0	-
	その他	0	-		その他	0	-		その他	0	-
	不明	0	-		不明	0	-		不明	0	-
	小計	0	-		小計	0	-		小計	0	-
	壺	0	0.0%		壺	0	0.0%		壺	0	-
焼締陶器	甕	14	100.0%	焼締陶器	甕	28	100.0%	焼締陶器	甕	0	-
	鉢・盤	0	0.0%		鉢・盤	0	0.0%		鉢・盤	0	-
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	-
	不明	0	0.0%		不明	0	0.0%		不明	0	-
	小計	14	100.0%		小計	28	100.0%		小計	0	-
	輸入陶磁器	碗・皿	3		100.0%	輸入陶磁器	碗・皿		0	0.0%	輸入陶磁器
壺・瓶	0	0.0%	壺・瓶	9	100.0%	壺・瓶	0	-			
その他	0	0.0%	その他	0	0.0%	その他	0	-			
不明	0	0.0%	不明	0	0.0%	不明	0	-			
小計	3	100.0%	小計	9	100.0%	小計	0	-			
他	他・不明	0	-	他	他・不明	0	-	他	他・不明	0	-
総数		3936	100.0%	総数		6032	100.0%	総数		1264	100.0%

4 3区土坑105				5 2区池160				6 1区土坑52			
器種	器形	破片数	比率 (%)	器種	器形	破片数	比率 (%)	器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	碗・皿	382	99.7%	土師器	碗・皿	1623	98.9%	土師器	碗・皿	886	93.9%
	鉢・盤	0	0.0%		鉢・盤	1	0.1%		鉢・盤	2	0.2%
	甕・鍋・釜	0	0.0%		甕・鍋・釜	3	0.2%		甕・鍋・釜	0	0.0%
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	0.0%
	不明	1	0.3%		不明	14	0.9%		不明	0	0.3%
	小計	383	100.0%		小計	1641	100.0%		小計	888	100.0%
瓦器	碗・皿	0	-	瓦器	碗・皿	10	25.6%	瓦器	碗・皿	0	0.0%
	鍋・釜	0	-		鍋・釜	12	30.8%		鍋・釜	45	100.0%
	壺・瓶	0	-		壺・瓶	0	0.0%		壺・瓶	0	0.0%
	火舎・火鉢	0	-		火舎・火鉢	3	7.7%		火舎・火鉢	0	0.0%
	その他	0	-		その他	14	35.9%		その他	0	0.0%
	不明	0	-		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
小計	0	-	小計	39	100.0%	小計	45	100.0%			
須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	0	0.0%	須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	8	4.9%	須恵器・山茶碗	杯・碗・皿	1	12.5%
	壺・瓶	0	0.0%		壺・瓶	15	9.2%		壺・瓶	0	0.0%
	鉢	5	20.8%		鉢	37	22.7%		鉢	4	50.0%
	甕	19	79.2%		甕	97	59.5%		甕	3	37.5%
	その他	0	0.0%		その他	6	3.7%		その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
小計	24	100.0%	小計	163	100.0%	小計	8	100.0%			
白色土器	杯・碗・皿	0	0.0%	白色土器	杯・碗・皿	6	75.0%	白色土器	杯・碗・皿	1	100.0%
	高杯	1	100.0%		高杯	2	25.0%		高杯	0	0.0%
	盤	0	0.0%		盤	0	0.0%		盤	0	0.0%
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	0.0%
	不明	0	0.0%		不明	0	0.0%		不明	0	0.0%
	小計	1	100.0%		小計	8	100.0%		小計	1	100.0%
国産施釉陶器	碗・皿	0	-	国産施釉陶器	碗・皿	0	-	国産施釉陶器	碗・皿	0	-
	壺・瓶	0	-		壺・瓶	0	-		壺・瓶	0	-
	その他	0	-		その他	0	-		その他	0	-
	不明	0	-		不明	0	-		不明	0	-
	小計	0	-		小計	0	-		小計	0	-
	壺	0	0.0%		壺	0	0.0%		壺	0	-
焼締陶器	甕	4	100.0%	焼締陶器	甕	22	100.0%	焼締陶器	甕	0	-
	鉢・盤	0	0.0%		鉢・盤	0	0.0%		鉢・盤	0	-
	その他	0	0.0%		その他	0	0.0%		その他	0	-
	不明	0	0.0%		不明	0	0.0%		不明	0	-
	小計	4	100.0%		小計	22	100.0%		小計	0	-
	輸入陶磁器	碗・皿	3		60.0%	輸入陶磁器	碗・皿		79	59.8%	輸入陶磁器
壺・瓶	2	40.0%	壺・瓶	33	25.0%	壺・瓶	0	0.0%			
その他	0	0.0%	その他	20	15.2%	その他	0	0.0%			
不明	0	0.0%	不明	0	0.0%	不明	0	0.0%			
小計	5	100.0%	小計	132	100.0%	小計	2	100.0%			
他	他・不明	0	-	他	他・不明	0	-	他	他・不明	0	-
総数		417	100.0%	総数		2005	100.0%	総数		944	100.0%

※ 輸入その他は台子など

表8 掲載土器類観察表

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
1	3区	泉443	土師器 皿N小	9.8	1.8		4/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
2	3区	泉443	土師器 皿N小	9.8	1.8		1/2	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
3	3区	泉443	土師器 皿N小	10.2	1.6		1/2	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
4	3区	泉443	土師器 皿N小	11.0	1.6		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
5	3区	泉443	土師器 皿N小	10.4	1.7		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
6	3区	泉443	土師器 皿N小	10.4	1.8		4/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
7	3区	泉443	土師器 皿N小	10.4	1.9		4/5	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
8	3区	泉443	土師器 皿N小	10.6	2.0		4/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
9	3区	泉443	土師器 皿N小	10.2	1.9		1/2	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
10	3区	泉443	土師器 皿Ac	10.5	残1.2		1/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
11	3区	泉443	土師器 皿N大	14.7	2.5		3/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
12	3区	泉443	土師器 皿N大	14.4	3.4		2/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
13	3区	泉443	土師器 皿N大	15.0	3.6		7/8	7.5YR8/3 浅黄橙色		図版56
14	3区	泉443	輸入 白磁 皿	11.3	残2.8		1/4	5Y7/1 灰白色 釉5Y6/1 灰色		図版56
15	3区	泉443	輸入 白磁 皿	12.8	3.3		1/4	5Y8/1 灰白色 釉5Y7/2 灰白色	内面下半に片切り彫りで花文を配する	図版56
16	1区	溝416	土師器 皿N小	9.4	1.5		1/2	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
17	1区	溝416	土師器 皿N大	14.6	2.4		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版56
18	1区	溝416	土師器 皿N大	14.0	3.1		2/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
19	1区	土坑393	土師器 皿N小	8.0	1.5		2/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版56
20	1区	土坑393	土師器 皿N小	9.9	1.8		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
21	1区	土坑393	土師器 皿Ac	9.8	1.5		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
22	3区	土坑448	土師器 皿N小	9.4	1.8		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
23	3区	土坑448	土師器 皿N小	9.8	1.7		2/3	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
24	3区	土坑448	土師器 皿N小	10.0	1.7		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
25	3区	土坑448	土師器 皿N小	10.6	1.4		11/12	10YR8/2 灰白色		図版56
26	1区	建物146 南西部雨落溝	土師器 皿Ac	9.8	1.1		5/8	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
27	1区	建物146 東側整地層	土師器 皿N小	9.1	1.8		5/7	7.5YR8/3 浅黄橙色		図版56
28	1区	建物146	土師器 皿N小	9.2	1.7		5/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
29	1区	建物146	土師器 皿N小	9.6	1.5		2/5	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
30	1区	建物146内 整地層	土師器 皿N小	9.6	1.9		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
31	1区	建物146内 整地層	土師器 皿N小	9.7	1.7		9/10	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
32	1区	建物146	土師器 皿N小	9.7	1.9		3/7	7.5YR7/6 橙色		図版56
33	1区	建物146	土師器 皿N小	8.8	1.7		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
34	1区	建物146	土師器 皿N小	9.8	1.9		1/3	5YR6/4 にぶい橙色		図版56
35	1区	建物146 雨落溝西側	土師器 皿N小	9.8	1.6		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
36	1区	建物146	土師器 皿N小	10.0	1.8		5/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
37	1区	建物146 東側整地層	土師器 皿N小	9.4	1.9		5/8	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版56
38	1区	建物146	土師器 皿N小	9.8	1.9		3/7	5YR7/4 にぶい橙色		図版56
39	1区	建物146 南西部雨落溝	土師器 皿N中	11.0	2.6		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
40	1区	建物146 南雨落溝	土師器 皿N大	14.2	2.7		3/7	2.5Y7/2 灰黄色		図版56
41	1区	建物146	土師器 皿N大	14.2	3.3		1/3	10YR8/3 浅黄橙色	2段ナデ	図版56
42	1区	建物146 東側整地層	土師器 皿N大	14.7	3.3		5/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
43	1区	建物146	輸入 白磁 椀	-	残2.1		破片	5Y8/1 灰白色	釉乳白色	図版56
44	2区	落込361	土師器 皿Ac	9.2	1.0		3/4	10YR8/3 浅黄橙色		図版56
45	2区	落込361	土師器 皿Ac	9.6	1.2		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
46	2区	落込361	土師器 皿Ac	10.0	1.3		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
47	2区	落込361	土師器 皿N小	9.3	1.9		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
48	2区	落込361	土師器 皿N小	9.4	1.8		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
49	2区	落込361	土師器 皿N小	9.4	1.8		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
50	2区	落込361	土師器 皿N小	9.4	2.0		3/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版56
51	2区	落込361	土師器 皿N小	9.6	1.5		3/4	7.5YR6/4 にぶい橙色		図版56
52	2区	落込361	土師器 皿N小	9.6	1.8		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
53	2区	落込361	土師器 皿N小	9.6	2.0		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
54	2区	落込361	土師器 皿N小	9.6	2.0		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
55	2区	落込361	土師器 皿N小	9.7	1.6		3/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版56
56	2区	落込361	土師器 皿N小	9.9	1.6		11/12	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版56
57	2区	落込361	土師器 皿N小	10.0	2.2		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色 調	備 考	図面番号
58	2区	落込361	土師器 皿N小	9.9	2.5		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
59	2区	落込361	土師器 皿N大	13.8	3.2		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
60	2区	落込361	土師器 皿N大	14.0	2.8		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
61	2区	落込361	土師器 皿N大	14.0	2.9		3/4	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版56
62	2区	落込361	土師器 皿N大	14.0	3.0		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版56
63	2区	落込361	土師器 皿N大	14.3	2.9		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
64	2区	落込361	土師器 皿N大	14.3	3.1		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
65	2区	落込361	土師器 皿N大	14.4	2.7		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
66	2区	落込361	土師器 皿N大	14.4	2.8		7/12	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
67	2区	落込361	土師器 皿N大	14.4	2.9		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
68	2区	落込361	土師器 皿N大	14.5	2.8		11/12	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
69	2区	落込361	土師器 皿N大	15.2	3.0		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版56
70	2区	落込361	土師器 皿N大	15.5	3.4		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版56
71	1区	柱穴65(柱列6)	輸入 緑釉黒花文 瓶	-	残7.3		破片	7.5YR7/1明褐色 釉黒色・緑色	磁州窯系	図版56
72	1区	建物160	土師器 皿N小	8.8	1.5		1/4	10YR8/3 浅黄橙色		図17
73	1区	建物160	土師器 皿N小	9.2	1.5		1/4	10YR8/3 浅黄橙色		図17
74	1区	建物160	土師器 皿N小	9.8	1.6		1/5	10YR8/3 浅黄橙色		図17
75	1区	建物160	土師器 皿N大	15.0	3.3		1/3	7.5YR7/3 にぶい橙色		図17
76	1区	建物160 西雨落溝	土師器 皿N大	15.6	2.7		4/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図17
77	1区	建物160	白色土器 椀	-	0.9	3.8	2/5	5Y8/1 灰白色	糸切り	図17
78	1区	建物160	須恵器 椀	15.6	5.9	7.5	4/5	N7/0 灰白色	山茶碗系。糸切り。靱殻痕	図17
79	2区	路面150-2	土師器 皿Ac	10.7	1.1		4/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図17
80	2区	路面150-2	土師器 皿N大	14.2	3.3		1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図17
81	2区	路面150-2	輸入 白磁 椀	16.0	4.4		1/6	N8/0 灰白色 釉10Y8/1 灰白色		図17
82	1区	第4層下層	土師器 皿N小	9.4	1.7		2/5	10YR8/3 浅黄橙色		図17
83	1区	第4層下層	土師器 皿N小	9.5	1.9		7/10	10YR8/2 灰白色		図17
84	1区	第4層下層	土師器 皿N中	10.6	1.9		2/5	10YR8/3 浅黄橙色		図17
85	1区	第4層下層	土師器 皿N大	13.9	3.3		3/5	7.5YR8/1 灰白色		図17
86	4区	第2層	緑釉陶器 稜椀	-	残2.6	6.2	1/2	N6/0灰色 釉10Y6/1灰色	山城産	図18
87	4区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残1.7	5.6	3/5	10YR6/1 灰色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	山城産	図18
88	4区	土坑74	緑釉陶器 椀	-	残2.0	6.7	3/5	N6/0 灰色 釉7.5Y5/3 灰オリーブ色	山城産	図18
89	4区	第2層	緑釉陶器 輪花皿	14.4	3.3	6.6	1/3	N6/0灰色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	美濃産?	図18
90	3区	第2層	緑釉陶器 皿	-	残1.8	6.5	1/1	10YR8/3 浅黄橙色 釉 淡緑黄色	山城産	図18
91	3区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残3.2	6.6	1/2	N6/0 灰色 釉 10Y6/2 オリーブ灰色	山城産。ヘラ記号	図18
92	3区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残2.7	7.4	1/4	N7/0 灰白色色 釉 10Y7/2 灰白色	山城産	図18
93	3区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残2.2	7.6	1/4	7.5Y7/1 灰白色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	山城産	図18
94	3区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残2.8	7.5	1/4	N7/0 灰白色 釉 淡緑色	東海系	図18
95	3区	第2層	緑釉陶器 椀	-	残1.7	8.6	1/4	10YR8/1 灰白色 釉 淡緑黄色	東海系	図18
96	3区	第2層	灰釉陶器 耳皿	-	残2.1	6.6	1/2	N6/0 灰色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色	東海系	図18
97	3区	第2層	灰釉陶器 椀	-	残1.8	7.4	1/3	2.5Y6/2 灰黄色 釉5Y8/1 灰白色	東海系	図18
98	3区	第2層	灰釉陶器 椀	-	残2.4	7.2	1/3	2.5Y7/1 灰白色 釉10Y6/2 オリーブ灰色	東海系	図18
99	3区	第2層	灰釉陶器 椀	-	残2.1	8.0	1/3	2.5Y7/1 灰白色 釉5Y6/2 灰オリーブ色	東海系	図18
100	3区	第2層	灰釉陶器 椀	16.2	5.6	8.2	1/5	10YR7/1 灰色 釉7.5Y8/1 灰白色	東濃系	図18
101	3区	第2層	灰釉陶器 椀	18.0	6.5	8.4	3/5	5Y7/2 灰白色 釉7.5Y7/1 灰白色	東濃系	図18
102	3区	第2層	土師器 甕	16.4	残3.9		1/6	5Y6/6 橙色	河内系	図18
103	3区	第2層	須恵器 杯B	12.0	4.3	7.2	1/3	N5/0 灰色		図18
104	3区	第2層	黒色土器A 椀		残1.8	7.4	1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色	ミガキあり	図18
105	3区	第2層	黒色土器A 椀	16.3	残5.2	7.8	1/10	10YR6/2 灰黄褐色	ミガキあり	図18
106	3区	第2層	土師器 杯B		残4.9	11.0	7.5	7.5YR6/4 にぶい橙色	ミガキあり	図18

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
107	3区	第2層	黒色土器 甕	16.6	残4.2		1/4	N2/0 黒色		図18
108	3区	第3層	土師器 皿A	11.0	1.9		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図18
109	3区	第3層	土師器 皿N	15.4	3.0		1/6	10YR7/4 にぶい黄橙色		図18
110	3区	第3層	土師器 皿N	15.2	残2.8		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図18
111	3区	第3層	輸入 青磁 皿	-	残1.1	4.7	2/3	7.5Y6/2 灰オリーブ色 釉2.5GY 明オリーブ灰色	同安窯系	図18
112	3区	第3層	輸入 青磁 皿	-	残1.1	3.6	1/3	7.5Y6/2 灰オリーブ色 釉2.6GY 明オリーブ灰色	同安窯系	図18
113	3区	第2層	須恵器 椀	13.6	5.3	7.2	1/5	N5/0 灰色	東播系	図18
114	1区	井戸252	須恵器 甕	27.5	残31.5		3/5	N1.5/0 黒色		図19
115	1区	井戸252	土師器 羽釜	28.0	残27.9		3/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図19
116	1区	土坑137	土師器 皿N小	8.6	1.4		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
117	1区	土坑137	土師器 皿N小	8.6	1.9		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版57
118	1区	土坑137	土師器 皿N小	8.8	1.4		4/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
119	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.8	1.7		9/10	2.5Y7/2 灰黄色		図版57
120	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.0	1.6		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
121	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.0	1.6		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
122	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.0	1.7		4/5	2.5Y8/2 灰白色		図版57
123	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.0	1.7		完形	2.5Y8/2 灰白色		図版57
124	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.0	1.9		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版57
125	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.1	1.9		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版57
126	1区	土坑137	土師器 皿N小	9.6	1.6		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
127	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.4	2.7		3/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版57
128	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.6	2.7		1/2	10YR8/4 浅黄橙色		図版57
129	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.7	2.7		7/8	10YR8/4 浅黄橙色		図版57
130	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.8	2.8		7/8	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版57
131	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.9	2.9		11/12	7.5YR8/4 浅黄橙色		図版57
132	1区	土坑137	土師器 皿N大	13.8	3.2		1/2	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
133	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.0	3.0		2/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版57
134	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.0	2.5		3/4	7.5YR8/4 浅黄橙色		図版57
135	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.0	2.6		1/3	2.5Y7/2 灰黄色		図版57
136	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.0	2.8		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版57
137	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.2	2.7		9/10	2.5Y7/2 灰黄色		図版57
138	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.2	2.8		4/5	7.5YR8/3 浅黄橙色		図版57
139	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.2	2.8		1/3	2.5Y8/3 淡黄色		図版57
140	1区	土坑137	土師器 皿N大	14.3	2.7		3/4	10YR8/4 浅黄橙色		図版57
141	1区	土坑137	土師器 鉢	24.6	9.65		1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土紐巻き上げ	図版57
142	1区	土坑137	瓦器 椀	13.4	4.9	5.5	1/5	N4/0 灰色	内面ミガキ調整	図版57
143	1区	土坑137	瓦器 椀	12.7	4.8	3.6	3/5	N5/0 灰色	内面ミガキ調整	図版57
144	1区	土坑137	瓦器 火鉢	-	6.2		破片	N3/0 暗灰色		図版57
145	1区	土坑137	須恵器 鉢	27.8	6.0		1/5	N5/0 灰色	東播系	図版57
146	1区	土坑137	焼締陶器 甕	50.2	17.6		1/6	5Y4/2 灰褐色	常滑産	図版57
147	1区	土坑137	輸入 緑釉陶器 皿	-	1.3	4.6	1/2	7.5YR8/3 浅黄橙色	華南産。押し型花文	図版57
148	1区	土坑137	輸入 褐釉陶器 壺	10.4	16.4		3/5	N7/0 灰白色		図版57
149	2区	井戸55 曲物掘形	土師器 皿N小	9.6	1.5		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版57
150	2区	井戸55 木枠内	瓦器 羽釜	-	16.2		破片	N2/0 黒色	脚部	図版57
151	2区	井戸55 木枠内	須恵器 鉢	-	2.6		破片	N4/0 灰色		図版57
152	2区	石敷180	土師器 皿N小	9.4	1.6		3/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版57
153	2区	石敷180	土師器 高杯	-	15.5		2/3	10YR8/2 灰白色	脚部。11面体	図版57
154	4区	井戸167 木枠内	土師器 皿N大	14.6	2.9		9/10	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版57
155	4区	井戸167 木枠内	瓦器 椀	15.0	5.1	5.9	2/3	N4/0 灰色	内面ミガキ調整	図版57
156	4区	井戸167 木枠直上	白色土器 小杯	7.6	2.5	3.5	完形	10YR8/2 灰白色	墨書「白散」	図版57
157	4区	井戸167	輸入 白磁 壺	-	残2.3	8.0	1/3	N7/0 灰白色 釉10Y7/1 灰白色		図版57
158	3区	泉241	土師器 皿N小	8.5	1.6		1/2	10YR7/4 にぶい黄橙色		図21
159	3区	泉241	土師器 皿N小	9.3	1.7		5/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
160	3区	泉241	土師器 皿N小	9.5	1.7		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図21
161	3区	泉241	土師器 皿N小	10.0	1.3		破片	10YR7/2 にぶい黄橙色		図21
162	3区	泉241	土師器 皿N小	10.2	1.8		1/6	10YR7/3 にぶい黄橙色		図21
163	3区	泉241	土師器 皿N小	10.3	2.0		1/5	10YR7/3 にぶい黄橙色	漆付着	図21

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色 調	備 考	図面番号
164	3区	泉241	土師器 皿Ac	10.4	1.0		破片	10YR7/4 にぶい黄橙色		図21
165	3区	泉241	土師器 皿N大	13.5	2.0		1/2	10YR8/3 浅黄橙色		図21
166	3区	泉241	土師器 皿N大	14.0	2.7		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
167	3区	泉241	土師器 皿N大	14.5	2.8		1/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
168	3区	泉241	土師器 皿N大	14.4	3.1		1/6	10YR7/2 にぶい黄橙色		図21
169	3区	泉241	土師器 皿N大	15.0	2.8		1/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図21
170	3区	泉241	土師器 皿N大	17.8	5.1		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
171	3区	泉241	輸入 白磁 皿	11.0	残2.1		破片	5Y8/1 灰白色 釉2.5Y6/3 にぶい黄色		図21
172	3区	泉241	輸入 青磁 椀	-	残2.9	5.6	底部のみ	5Y7/1 灰白色 釉7.5Y6/2 灰オリーブ色		図21
173	3区	泉241	須恵器 鉢	-	残4.1	12.6	1/6	N6/0 灰色	漆付着	図21
174	3区	泉241	灰釉陶器 壺	-	残4.8	13.0	底部1/5	N7/0 灰白色		図21
175	1区	土坑136	土師器 皿N小	8.4	1.4		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
176	1区	土坑136	土師器 皿N小	8.5	1.7		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図21
177	1区	土坑136	土師器 皿N小	8.5	1.3		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図21
178	1区	土坑136	土師器 皿N小	8.5	1.4		3/5	7.5YR7/3 にぶい橙色		図21
179	1区	土坑136	土師器 皿N小	9.4	1.6		3/8	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
180	1区	土坑136	土師器 皿N大	13.3	2.5		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
181	1区	土坑136	土師器 皿N大	13.8	2.2		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
182	1区	土坑136	土師器 皿N大	14.0	2.3		2/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図21
183	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.4	1.7		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
184	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.6	1.4		1/2	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版58
185	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.7	1.4		5/6	10YR8/2 灰白色		図版58
186	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.9	1.5		1/2	2.5Y7/2 灰黄色		図版58
187	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.9	1.8		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
188	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.9	1.9		9/10	2.5Y7/2 灰黄色		図版58
189	1区	土坑86	土師器 皿N小	8.9	1.2		4/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版58
190	1区	土坑86	土師器 皿N小	9.2	1.6		1/2	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版58
191	1区	土坑86	土師器 皿N小	10.0	1.3		1/4	2.5Y7/2 灰黄色		図版58
192	1区	土坑86	土師器 皿N大	13.4	2.4		1/3	10YR8/3 浅黄橙色		図版58
193	1区	土坑86	土師器 皿N大	13.4	2.5		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
194	1区	土坑86	土師器 皿N大	13.8	2.4		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
195	1区	土坑86	土師器 皿N大	14.0	2.9		1/3	2.5Y7/2 灰黄色	乙訓系	図版58
196	1区	土坑86	土師器 皿N大	14.2	2.8		1/5	10YR7/2 にぶい黄橙色	乙訓系	図版58
197	1区	土坑86	土師器 皿N大	13.1	2.8		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版58
198	1区	土坑86	土師器 皿N大	14.4	2.3		1/5	10YR7/3 にぶい黄橙色	乙訓系	図版58
199	1区	土坑86	土師器 皿N大	14.4	2.7		1/4	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
200	1区	土坑86	土師器 皿Ac	8.6	1.4		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
201	1区	土坑86	土師器 皿Ac	8.3	1.5		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
202	1区	土坑86	土師器 皿N大	13.1	3.5		3/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版58
203	1区	土坑86	土師器 鉢	23.0	9.8		1/5	10YR8/3 浅黄橙色	粘土紐巻き上げ	図版58
204	1区	土坑86	土師器 鉢	26.6	9.0		1/8	2.5Y7/2 灰黄色	粘土紐巻き上げ	図版58
205	1区	土坑86	須恵器 甕	19.2	7.5		1/5	N5/0 灰色		図版58
206	1区	土坑86	須恵器 鉢	29.0	10.0	9.6	1/5	N6/0 灰色	東播系	図版58
207	1区	土坑86	須恵器 鉢	32.6	9.0		1/8	N6/0 灰色	東播系	図版58
208	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.2	1.4		3/5	10YR6/2 灰白褐色		図版58
209	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.3	1.4		5/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版58
210	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.3	1.6		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版58
211	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.5	1.6		完形	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版58
212	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.6	1.6		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版58
213	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.6	1.6		5/7	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
214	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.6	1.6		3/5	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版58
215	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.7	1.3		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
216	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.7	1.4		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版58
217	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.7	1.5		完形	10YR6/4 にぶい黄橙色		図版58
218	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.7	1.5		5/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
219	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.7	1.6		完形	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
220	1区	土坑102	土師器 皿N小	8.8	1.7		4/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版58

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色 調	備 考	図面番号
221	1区	土坑102	土師器 ⅢN小	8.9	1.3		5/6	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
222	1区	土坑102	土師器 ⅢN小	9.0	1.3		5/6	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版58
223	1区	土坑102	土師器 ⅢN小	9.9	1.8		5/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版58
224	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.3	2.1		完形	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
225	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.4	2.2		2/5	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
226	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.6	2.2		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
227	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.6	2.3		1/3	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版58
228	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.4	2.3		2/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
229	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.6	2.6		5/8	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
230	1区	土坑102	土師器 ⅢN大	12.6	2.6		2/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版58
231	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	8.6	1.7		完形	10YR8/1 灰白色		図版58
232	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	8.7	1.7		1/3	5Y8/1 灰白色		図版58
233	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	9.0	1.6		1/3	2.5Y8/2 灰白色		図版58
234	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	9.2	1.9		9/10	10YR8/2 灰白色		図版58
235	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	9.2	1.7		完形	2.5Y8/1 灰白色		図版58
236	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	10.0	1.6		1/4	10YR8/2 灰白色		図版58
237	1区	土坑102	土師器 ⅢSn	10.0	1.9		完形	10YR8/2 灰白色		図版58
238	1区	土坑102	土師器 ⅢS小	8.4	2.0		3/5	10YR8/1 灰白色		図版58
239	1区	土坑102	土師器 ⅢS小	8.5	2.2		完形	10YR8/1 灰白色		図版58
240	1区	土坑102	土師器 ⅢS小	8.5	2.2		4/5	10YR8/1 灰白色		図版58
241	1区	土坑102	土師器 ⅢS中	10.2	2.8		1/3	10YR8/2 灰白色		図版58
242	1区	土坑102	土師器 ⅢS大	12.8	3.0		3/5	10YR8/1 灰白色		図版58
243	1区	土坑102	土師器 ⅢS大	12.9	3.4		9/10	10YR8/2 灰白色		図版58
244	1区	土坑102	土師器 ⅢS大	13.0	3.3		4/5	10YR8/1 灰白色		図版58
245	1区	土坑102	輸入 白磁 椀	5.5	1.3	5.3	2/5	N8/0 灰白色 釉2.5GY7/1 明オリープ色		図版58
246	1区	土坑145	土師器 ⅢN小	8.2	2.0		1/4	10YR8/3 浅黄橙色		図22
247	1区	土坑145	土師器 ⅢN小	8.6	1.7		1/3	10YR8/3 浅黄橙色		図22
248	1区	土坑145	土師器 ⅢN小	8.8	1.6		2/3	7.5YR8/4 浅黄橙色		図22
249	1区	土坑145	土師器 ⅢN小	9.6	1.6		3/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図22
250	1区	土坑145	土師器 ⅢN大	14.0	2.9		2/3	7.5YR8/4 浅黄橙色		図22
251	2区	井戸199 木枠掘形	土師器 ⅢSn	8.9	1.6		3/4	5Y8/1 灰白色		図22
252	2区	井戸199 木枠内	土師器 ⅢN小	9.8	1.5		1/12	7.5Y7/1 灰白色		図22
253	2区	井戸199 木枠掘形	輸入 白磁 椀	-	残2.4		破片	7.5Y8/1 灰白色 釉5Y7/2 灰白色		図22
254	3区	路面227-2	土師器 ⅢN大	12.5	2.3		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図22
255	3区	路面227-2	輸入 白磁 壺	-	残2.9	6.9	2/3	N8/0 灰白色 釉7.5Y7/1 灰白色		図22
256	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	8.7	1.5		1/2	7.5YR7/4 にぶい橙色		図22
257	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	8.7	1.9		2/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図22
258	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	8.9	1.6		2/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図22
259	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	9.0	1.6		2/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図22
260	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	9.0	1.6		4/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図22
261	3区	土坑105	土師器 ⅢN小	9.1	1.3		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙		図22
262	3区	土坑105	土師器 ⅢN大	12.6	2.6		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図22
263	3区	土坑105	土師器 ⅢN大	13.6	2.6		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図22
264	4区	土坑154	土師器 ⅢN小	8.7	1.3		5/6	2.5Y7/2 灰黄色		図22
265	4区	土坑154	土師器 ⅢN小	8.7	1.3		5/6	10YR7/2 にぶい黄橙色		図22
266	4区	土坑154	土師器 ⅢN大	13.0	2.0		2/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図22
267	4区	土坑154	土師器 ⅢN大	13.0	2.2		1/2	10YR8/2 灰白色		図22
268	2区	池160-1 上層	土師器 ⅢAc	8.3	1.4		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図23
269	2区	池160-1 底中層	土師器 ⅢN小	9.0	1.6		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図23
270	2区	池160-1 底中層	土師器 ⅢN小	9.2	1.6		1/3	10YR7/2 にぶい黄橙色		図23
271	2区	池160-1	土師器 ⅢN小	9.2	1.8		2/3	10YR6/2 灰黄褐色		図23
272	2区	池160-1 中層	土師器 ⅢN小	9.8	1.8		1/3	2.5Y7/3 浅黄色		図23
273	2区	池160-1	土師器 ⅢN小	9.8	1.7		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図23
274	2区	池160-1	土師器 ⅢN小	10.2	2.4		1/3	N5/0 灰色		図23
275	2区	池160-1	土師器 ⅢN大	14.2	2.6		3/8	2.5Y8/1 灰白色		図23
276	2区	池160-1	土師器 ⅢN大	14.2	2.6		1/3	2.5Y7/2 灰黄色		図23
277	2区	池160-1 底中層	土師器 ⅢN大	15.0	2.5		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図23

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
278	2区	池160-1	土師器 皿N大	15.3	2.7		4/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図23
279	2区	池160-1 底中層	土師器 皿N大	15.8	3.2		1/4	7.5YR7/2 明褐灰色		図23
280	2区	池160-1 底上層	瓦器 羽釜	17.8	5.2		1/8	5YR7/4 にぶい橙色		図23
281	2区	池160-1 底上層	須恵器 鉢	-	2.8		破片	N6/0 灰色		図23
282	2区	池160-1 中層	須恵器 鉢	-	5.4		破片	5Y6/1 灰色		図23
283	2区	池160-1	須恵器 甕	42.4	残28.0		1/3	10Y7/21灰白色		図23
284	2区	池160-1	輸入 青白磁 合子蓋	7.8	1.9		1/4	N8/0 灰白色 釉10GY8/1 明緑灰色		図23
285	2区	池160-1 底中層	輸入 青白磁 合子蓋	3.7	1.3		1/2	10BG7/1 明青灰色 釉10GY8/1 明緑灰色		図23
286	2区	池160-1 上層	輸入 青白磁 皿	8.4	3.9		1/5	N6/0 灰色 釉10GY8/1 明緑灰色		図23
287	2区	池160-2	土師器 皿Ac	9.1	1.4		2/5	10YR7/4 にぶい黄橙色		図23
288	2区	池160-2	土師器 皿Ac	9.5	1.0		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図23
289	2区	池160-2	土師器 皿N小	9.5	1.8		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図23
290	2区	池160-2	土師器 皿N小	9.6	1.4		5/8	2.5Y7/1 灰白色		図23
291	2区	池160-2	土師器 皿N大	12.9	2.4		完形	2.5Y7/3 浅黄色		図23
292	2区	池160-2	土師器 皿N大	13.8	2.6		4/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図23
293	2区	池160-2	土師器 皿N大	14.3	2.4		4/7	10YR7/4 にぶい黄橙色		図23
294	2区	池160-2	土師器 皿N大	14.6	2.8		1/2	10YR8/3 浅黄橙色		図23
295	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.4	1.4		1/2	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版59
296	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.4	1.4		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
297	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.6	1.6		4/5	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
298	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.7	1.2		1/2	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
299	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.8	1.3		9/10	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
300	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.8	1.3		完形	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版59
301	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.8	1.5		4/5	10YR8/2 灰白色		図版59
302	1区	土坑52	土師器 皿N小	8.8	1.6		9/10	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
303	1区	土坑52	土師器 皿N大	12.5	2.4		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
304	1区	土坑52	土師器 皿N大	12.8	2.6		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
305	1区	土坑52	土師器 皿N大	12.8	2.3		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
306	1区	土坑52	土師器 皿N大	12.8	2.4		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
307	1区	土坑52	土師器 皿N大	12.8	2.8		4/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版59
308	1区	土坑52	白色土器 椀	-	残1.2	3.2	3/5	5Y8/1 灰白色	糸切り	図版59
309	1区	土坑52	須恵器 椀	4.3	1.3		3/5	10YR8/1 灰白色	ミニチュア。山茶椀系。 底部糸切り	図版59
310	1区	土坑52	瓦器 鍋	28.2	12.3		2/5	N4/0 灰色		図版59
311	1区	土坑52	須恵器 鉢	27.6	10.7		1/5	N5/0 灰色	東播系。底部糸切り	図版59
312	1区	土坑100	土師器 皿N大	13.0	2.6		4/5	10YR8/4 浅黄橙色		図版59
313	1区	土坑100	土師器 皿Sn	8.6	1.6		1/2	2.5Y8/1 灰白色		図版59
314	1区	土坑100	土師器 皿S小	8.3	2.0		1/2	5Y8/1 灰白色		図版59
315	1区	土坑100	土師器 皿S大	13.0	3.1		1/4	5Y8/1 灰白色		図版59
316	1区	土坑101	土師器 皿N小	8.2	1.4		4/7	10YR7/3 にぶい黄橙		図版59
317	1区	土坑101	土師器 皿N小	8.7	1.2		3/5	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版59
318	1区	土坑101	土師器 皿N小	8.6	1.2		1/3	色10YR6/3 にぶい黄橙		図版59
319	1区	土坑101	土師器 皿N小	8.8	1.5		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
320	1区	土坑101	土師器 皿N小	8.9	1.4		完形	2.5Y7/3 浅黄色		図版59
321	1区	土坑101	土師器 皿Sn	8.4	1.6		3/5	2.5Y7/2 灰黄色		図版59
322	1区	土坑101	土師器 皿Sn	9.0	1.6		2/3	10YR8/1 灰白色		図版59
323	1区	土坑101	土師器 皿Sn	9.1	1.7		4/5	10YR8/2 灰白色		図版59
324	1区	土坑101	土師器 皿Sn	9.2	1.5		完形	10YR8/1 灰白色		図版59
325	1区	土坑101	土師器 皿Sn	9.3	1.5		完形	10YR8/1 灰白色		図版59
326	1区	土坑101	土師器 皿N大	12.2	2.1		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
327	1区	土坑101	土師器 皿N大	12.2	2.1		2/5	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
328	1区	土坑101	土師器 皿N大	12.6	1.8		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
329	1区	土坑101	土師器 皿N大	12.9	2.4		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版59
330	1区	土坑101	土師器 皿Sc	6.6	1.2		完形	10YR8/2 灰白色		図版59
331	1区	土坑101	土師器 皿Sc	6.6	1.4		1/5	10YR8/1 灰白色		図版59
332	1区	土坑101	土師器 皿S小	8.0	2.0		完形	10YR8/1 灰白色		図版59
333	1区	土坑101	土師器 皿S大	12.6	3.5		完形	10YR8/2 灰白色		図版59

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
334	1区	土坑101	土師器 皿S大	12.8	3.3		3/7	10YR8/2 灰白色		図版59
335	1区	土坑101	土師器 皿S大	13.4	3.6		1/4	10YR8/1 灰白色		図版59
336	1区	土坑271	土師器 皿N小	8.6	1.3		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
337	1区	土坑271	土師器 皿N小	9.3	1.4		完形	10YR8/2 灰白色		図版59
338	1区	土坑271	土師器 皿N大	13.8	2.2		1/4	10YR6/2 灰黄褐色		図版59
339	1区	土坑271	土師器 鉢	21.6	残14.3		1/6	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
340	1区	土坑271	瓦器 椀	14.9	4.6	5.2	2/5	N5/0 灰色		図版59
341	1区	土坑271	瓦器 鍋	22.0	残9.0		1/4	N4/0 灰色		図版59
342	3区	井戸196	土師器 皿Sc	6.0	1.0		完形	2.5Y7/3 浅黄色		図版59
343	4区	土坑122 上層	土師器 皿N小	8.4	1.7		3/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版59
344	4区	土坑122 上層	土師器 皿N小	8.5	1.4		完形	10YR7/4 にぶい黄橙		図版59
345	4区	土坑122 上層	土師器 皿N小	8.6	1.4		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版59
346	4区	土坑122 上層	土師器 皿N大	12.6	2.7		4/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版59
347	1区	土坑400	土師器 皿N小	9.6	1.6		2/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版59
348	3区	井戸89	土師器 皿N小	8.0	1.7		完形	10YR5/2 灰黄褐色		図24
349	3区	井戸89	土師器 皿N小	8.2	1.6		1/2	7.5YR7/3 にぶい黄橙色		図24
350	3区	井戸89 掘形	土師器 皿N小	8.3	1.4		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図24
351	3区	井戸89 木枠内	土師器 皿N小	8.4	1.1		1/4	10YR7/2 にぶい黄褐色		図24
352	3区	井戸89	土師器 皿N小	8.4	1.0		1/3	7.5YR7/3 にぶい黄橙色		図24
353	3区	井戸89	土師器 皿N小	8.4	1.4		1/2	10YR8/3 浅黄褐色		図24
354	3区	井戸89	土師器 皿N小	8.6	1.4		1/2	7.5YR7/4 にぶい橙色		図24
355	3区	井戸89	瓦器 皿	9.0	1.5		3/4	N8/0 灰白色		図24
356	3区	井戸89	土師器 皿Sc	6.2	1.1		1/4	10YR8/3 浅黄褐色		図24
357	3区	井戸89	土師器 皿N大	10.8	1.9		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図24
358	3区	井戸89	土師器 皿N大	11.4	2.1		1/3	10YR7/3 にぶい黄褐色		図24
359	3区	井戸89	土師器 皿N大	11.8	2.1		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図24
360	3区	井戸89 木枠内	土師器 皿N大	12.6	2.5		2/5	10YR7/3 にぶい黄褐色		図24
361	3区	井戸89	土師器 皿N大	12.8	2.3		2/3	10YR8/3 浅黄褐色		図24
362	3区	井戸89	土師器 皿Nd	11.6	3.0		2/3	10YR8/2 灰白		図24
363	3区	井戸89	土師器 皿S大	12.4	3.0		1/3	10YR8/2 灰白色		図24
364	3区	井戸89	瓦器 羽釜	20.6	残10.3		2/3	N6/0 灰色		図24
365	3区	井戸89	瓦器 火鉢	-	残5.9		破片	10YR6/3 にぶい黄褐色		図24
366	3区	井戸89	瓦器 火鉢	38.4	残5.0		1/3	7.5YR6/4 にぶい橙色		図24
367	3区	井戸89	須恵器 皿	12.8	2.8		2/5	7.5YR7/4 にぶい橙色	地方産	図24
368	3区	井戸89	須恵器 鉢	26.0	残8.1		1/5	5Y7/1 灰白色	東播系	図24
369	3区	井戸89	須恵器 鉢	-	残7.1		破片	N6/0 灰色	東播系	図24
370	4区	Pit92	土師器 皿N小	8.0	1.4		1/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図24
371	4区	Pit92	土師器 皿N小	8.2	1.2		1/3	7.5YR6/4 にぶい橙色		図24
372	4区	Pit92	土師器 皿Nd	11.6	2.8		3/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図24
373	4区	Pit92	土師器 皿N大	12.0	2.5		1/2	10YR7/3 にぶい黄褐色		図24
374	4区	Pit92	瓦器 羽釜	16.4	残9.7		1/3	N6/0 灰色		図24
375	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.1	1.3		1/4	10YR6/4 にぶい黄褐色		図24
376	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.2	1.2		1/4	10YR6/4 にぶい黄褐色		図24
377	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.2	1.3		完形	10YR7/4 にぶい黄褐色		図24
378	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.3	1.4		完形	10YR6/4 にぶい黄褐色		図24
379	4区	土坑99	土師器 皿N小	9.0	1.2		2/5	10YR6/4 にぶい黄褐色		図24
380	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.6	1.6		4/7	10YR6/4 にぶい黄褐色		図24
381	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.8	1.1		2/5	7.5YR6/4 にぶい橙色		図24
382	4区	土坑99	土師器 皿N小	8.8	1.3		1/4	10YR7/3 にぶい黄褐色		図24
383	4区	土坑99	土師器 皿N大	12.8	2.5		1/3	5YR7/6 橙色		図24
384	4区	土坑99	土師器 皿Sc	7.0	1.2		1/2	10YR8/2 灰白色		図24
385	4区	土坑99	土師器 皿Sn	8.8	1.5		完形	10YR8/2 灰白色		図24
386	4区	土坑99	土師器 皿Sn	8.8	1.6		4/9	10YR8/2 灰白色		図24
387	4区	土坑99	土師器 皿S大	13.2	3.4		4/7	10YR8/2 灰白色		図24
388	4区	土坑101	土師器 皿N小	7.6	1.3		1/2	10YR7/4 にぶい黄褐色		図24
389	4区	土坑101	土師器 皿N小	8.0	1.2		1/2	10YR7/3 にぶい黄褐色		図24
390	4区	土坑101	土師器 皿N小	8.2	1.5		3/8	10YR8/4 浅黄褐色		図24
391	4区	土坑101	土師器 皿N小	8.4	1.1		1/4	10YR7/2 にぶい黄褐色		図24

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色 調	備 考	図面番号
392	4区	土坑101	土師器 皿N小	8.4	1.3		1/2	10YR7/3 にぶい黄橙色		図24
393	4区	土坑101	土師器 皿N小	8.6	1.3		1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図24
394	4区	土坑101	土師器 皿N大	12.4	2.2		1/2	10YR8/3 浅黄橙色		図24
395	4区	土坑101	土師器 皿N大	12.4	2.2		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図24
396	4区	土坑101	土師器 皿N大	12.8	2.2		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図24
397	4区	土坑120	土師器 皿N小	8.8	1.3		1/3	7.5YR6/4 にぶい橙色		図版60
398	4区	土坑120	土師器 皿N大	12.9	2.2		2/5	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版60
399	4区	土坑120	土師器 皿N大	12.4	2.2		1/5	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版60
400	4区	土坑120	土師器 皿Sn	8.7	1.7		5/8	10YR8/1 灰白色		図版60
401	4区	土坑120	土師器 皿S中	10.8	3.5		1/4	2.5Y8/1 灰白色		図版60
402	4区	土坑120	輸入 緑釉陶器 盤			残3.2	破片	5Y6/1 灰色 釉 暗緑色	華南産	図版60
403	4区	土坑176	土師器 皿N小	8.1	1.3		9/10	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版60
404	4区	土坑176	土師器 皿N小	8.4	1.4		3/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版60
405	4区	土坑176	土師器 皿N小	8.5	1.4		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
406	4区	土坑176	土師器 皿N小	8.6	1.3		3/5	10YR6/4 にぶい黄橙色		図版60
407	4区	土坑176	土師器 皿N大	12.6	2.3		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
408	4区	整地層100	土師器 皿N小	8.2	1.3		1/3	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版60
409	4区	整地層100	土師器 皿N小	8.8	1.5		1/3	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版60
410	4区	整地層100	土師器 皿N小	8.4	1.4		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
411	4区	整地層100	土師器 皿N小	8.6	1.4		9/10	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版60
412	4区	整地層100	土師器 皿N大	11.6	2.0		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
413	4区	整地層100	土師器 皿N大	12.8	2.0		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
414	4区	整地層100	土師器 皿N大	12.8	2.2		1/2	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
415	4区	整地層100	土師器 皿Sc	6.6	0.9		1/4	10YR8/2 灰白色		図版60
416	4区	整地層100	土師器 皿Sc	7.6	1.0		1/5	10YR8/2 灰白色		図版60
417	4区	整地層100	土師器 皿S小	8.4	1.9		1/3	10YR8/2 灰白色		図版60
418	4区	整地層100	土師器 皿S大	13.0	3.3		1/4	10YR8/2 灰白色		図版60
419	4区	整地層100	瓦器 鍋			残3.9	1/10	N8/0 灰白色		図版60
420	4区	整地層100	瓦器 羽釜			残5.5	1/10	N7/0 灰白色		図版60
421	4区	整地層100	瓦器 火鉢			残4.0	破片	2.5Y6/2 灰黄色		図版60
422	4区	整地層100	須恵器 鉢			残4.7	破片	5Y7/1 灰白色		図版60
423	4区	整地層100	須恵器 鉢			残4.1	破片	N6/0 灰色		図版60
424	4区	整地層100	輸入 黄釉褐彩陶器 盤			残13.0	23.5	1/5 2.5Y7/1 灰白色 釉7.5Y6/3 オリーブ黄色	華南産	図版60
425	4区	整地層112	土師器 皿N小	8.2	1.3		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
426	4区	整地層112	土師器 皿N小	8.4	1.3		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
427	4区	整地層112	土師器 皿N小	8.6	1.5		3/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
428	4区	整地層112	土師器 皿N小	8.6	1.8		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
429	4区	整地層112	土師器 皿N小	8.9	1.2		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
430	4区	整地層112	土師器 皿N小	9.0	1.3		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版60
431	4区	整地層112	土師器 皿N大	12.2	2.0		1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版60
432	4区	整地層112	土師器 皿N大	12.0	1.7		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
433	4区	整地層112	土師器 皿N大	12.4	2.5		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
434	4区	整地層112	土師器 皿Sc	6.1	1.4		1/2	10YR8/2 灰白色		図版60
435	4区	整地層112	土師器 皿Sc	7.0	1.4		1/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版60
436	4区	整地層112	土師器 皿Sn	8.0	1.4		1/5	10YR8/2 灰白色		図版60
437	4区	整地層112	土師器 皿Sn	9.0	1.3		1/5	10YR8/2 灰白色		図版60
438	4区	整地層112	土師器 皿S大	13.8	2.9		1/5	10YR8/2 灰白色		図版60
439	4区	整地層112	瓦器 羽釜	24.5		残4.6	破片	5Y7/1 灰白色		図版60
440	4区	整地層112	輸入 黄釉褐彩陶器 盤			残3.6	破片	2.5Y7/1 灰白色	華南産	図版60
441	4区	整地層112	輸入 黄釉褐彩陶器 盤			残5.3	破片	5Y7/1 灰白色 釉7.5Y6/3 オリーブ黄色	華南産	図版60
442	2区	泉100 甕掘形	土師器 皿N小	8.0	1.4		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版60
443	2区	泉100 木枠内	土師器 皿N大	13.0	2.3		1/10	2.5Y8/3 淡黄色		図版60
444	2区	泉100 甕掘形	土師器 皿Sc	5.1	1.4		1/4	10YR8/2 灰白色		図版60
445	2区	泉100	土師器皿 加工品	-	-		1/2	7.5YR7/4 にぶい橙色	径2.25、厚0.35	図版60
446	2区	泉100	瓦器 羽釜	24.4	4.3		1/10	2.5Y7/1 灰白色		図版60
447	2区	泉100 木枠内	瓦器 羽釜	15.6	7.4		1/8	2.5Y3/2 黒褐色		図版60
448	2区	泉100 甕掘形	須恵器 鉢	-	9.2		破片	N5/0 灰色	東播系	図版60

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
449	2区	泉100	焼締陶器 甗	47.4	13.6		口縁部 完存	2.5Y5/1 黄灰色	常滑産	図版60
450	2区	泉100 木枠内	輸入 青磁 椀	-	残2.6	3.4	1/4	N6/0 灰色 釉2.5GY6/1 オリーブ灰色		図版60
451	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.3	1.4		4/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
452	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.4	1.5		完形	10YR8/4 浅黄橙色		図版61
453	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.6	1.4		4/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
454	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.6	1.3		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
455	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.7	1.2		2/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
456	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.7	1.5		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
457	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.8	1.5		完形	2.5Y7/3 浅黄色		図版61
458	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.8	1.5		完形	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版61
459	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.8	1.6		5/6	2.5Y7/3 浅黄色		図版61
460	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.8	1.6		11/12	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
461	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.9	1.6		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
462	1区	土坑108	土師器 皿N小	8.9	1.8		完形	7.5YR8/3 浅黄橙色		図版61
463	1区	土坑108	土師器 皿N小	9.3	1.7		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版61
464	1区	土坑108	土師器 皿N大	12.4	2.4		3/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
465	1区	土坑108	土師器 皿N大	12.7	2.1		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
466	1区	土坑108	土師器 皿N大	12.8	2.6		5/8	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
467	1区	土坑108	土師器 皿N大	12.6	2.3		4/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
468	1区	土坑108	土師器 皿N大	13.0	2.4		2/5	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版61
469	1区	土坑108	土師器 皿N大	13.2	2.0		1/4	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版61
470	1区	土坑108	土師器 皿N大	13.2	2.1		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
471	1区	土坑108	土師器 皿N大	13.4	2.6		4/7	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
472	1区	土坑108	土師器 皿Sn	10.0	1.6		1/4	2.5Y8/2 灰白色		図版61
473	1区	土坑108	土師器 皿Sc	6.9	1.2		完形	10YR8/2 灰白色		図版61
474	1区	土坑108	土師器 皿Ac	7.8	1.2		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
475	1区	土坑108	土師器 皿S中	11.0	3.2		5/8	2.5Y8/2 灰白色		図版61
476	1区	土坑108	土師器 皿S中	11.6	3.1		完形	2.5Y8/2 灰白色		図版61
477	1区	土坑108	土師器 鉢	25.0	10.3		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土紐巻き上げ	図版61
478	1区	土坑108	土師器 鉢	26.0	7.4		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土紐巻き上げ	図版61
479	1区	土坑108	瓦器 火鉢	33.0	7.5		1/8	10YR4/1 褐灰色		図版61
480	1区	土坑108	瓦器 鍋	28.0	5.2		1/8	N5/0 灰色		図版61
481	1区	土坑108	須恵器 甗	25.6	5.5		1/6	N4/0 灰色	外面にタタキあり	図版61
482	1区	土坑108	輸入 青磁 皿	11.0	2.0		2/5	N8/0 灰白色	龍泉窯系。草花文	図版61
483	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.2	1.4		完形	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版61
484	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.2	1.5		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
485	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.3	1.6		4/5	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
486	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.6	1.6		3/5	2.5Y7/2 灰黄色		図版61
487	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.8	1.3		3/5	10YR8/2 灰白色		図版61
488	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.8	1.5		1/2	10YR8/3 浅黄橙色		図版61
489	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.9	1.6		9/10	10YR7/4 にぶい黄橙色		図版61
490	1区	土坑153	土師器 皿N小	8.9	1.7		4/5	2.5Y7/3 浅黄色		図版61
491	1区	土坑153	土師器 皿N小	9.0	1.7		4/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
492	1区	土坑153	土師器 皿N小	9.1	1.5		4/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
493	1区	土坑153	土師器 皿N大	12.4	2.5		1/3	7.5YR7/3 にぶい橙色		図版61
494	1区	土坑153	土師器 皿N大	12.5	2.5		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
495	1区	土坑153	土師器 皿N大	12.7	2.3		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
496	1区	土坑153	土師器 皿N大	12.7	2.3		4/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
497	1区	土坑153	土師器 皿N大	12.7	2.4		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
498	1区	土坑153	土師器 皿N大	13.3	2.5		2/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版61
499	1区	土坑153	土師器 皿N大	13.4	2.3		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
500	1区	土坑153	土師器 皿N大	13.5	2.4		1/3	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
501	1区	土坑153	土師器 皿N大	13.7	2.3		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版61
502	1区	土坑153	土師器 皿S中	10.9	3.0		2/3	2.5Y8/1 灰白色		図版61
503	1区	土坑153	土師器 皿S中	11.5	3.2		2/3	2.5Y8/1 灰白色		図版61
504	1区	土坑153	土師器 皿S中	11.8	2.9		5/6	10YR8/1 灰白色		図版61
505	1区	土坑153	瓦器 火鉢	35.0	残7.7		1/5	5YR6/4 にぶい橙色	内面ミガキ調整	図版61

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色 調	備 考	図面番号
506	2区	溝159	土師器 皿N小	7.8	1.5		5/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図版61
507	2区	溝159	土師器 皿N小	8.1	1.6		3/7	7.5YR6/4 にぶい橙色		図版61
508	2区	溝159	瓦器 羽釜	-	4.4		破片	N8/0 灰白色		図版61
509	2区	溝159	須恵器 鉢	-	3.3		破片	N4/0 灰色	東播系	図版61
510	1区	土坑333	土師器 皿N小	8.2	1.5		完形	10YR6/4 にぶい黄橙色		図版61
511	1区	土坑333	土師器 皿N小	8.6	1.7		1/2	10YR6/3 にぶい黄橙色		図版61
512	1区	土坑333	土師器 皿N大	12.6	2.3		8/9	7.5YR6/4 にぶい橙色		図版61
513	1区	土坑333	土師器 皿Sn	9.8	1.9		1/2	10YR8/2 灰白色		図版61
514	1区	土坑333	土師器 皿S小	7.9	2.1		1/2	2.5Y8/2 灰白色		図版61
515	1区	土坑333	土師器 皿S大	13.0	3.7		9/10	10YR8/1 灰白色		図版61
516	1区	土坑333	土師器 皿S大	13.4	3.6		9/10	10YR8/2 灰白色		図版61
517	3区	溝63	土師器 皿N大	11.0	1.6		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図25
518	3区	溝63	土師器 皿N大	11.0	2.1		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図25
519	3区	溝63	須恵器 鉢	-	残3.8		破片	N6/0 灰	東播系	図25
520	3区	溝63	輸入 黄釉褐彩陶器 盤	-	残4.2		破片	5Y7/1 灰白色 釉7.5Y6/3 オリーブ黄色	華南産	図25
521	3区	溝63	輸入 白磁 椀	-	残4.5		破片	7.5YR7/1 明褐色 釉N8/0 灰白色	白化粧土に透明釉。磁州窯系か	図25
522	3区	溝63	輸入 白磁 皿	-	残0.8	4.4	1/4	N8/0 灰白色 釉10Y8/1 灰白色		図25
523	3区	溝63	輸入 白磁 椀	-	残2.5	6.4	2/3	N7/0 灰白色 釉7.5Y7/1 灰白色		図25
524	3区	溝63	輸入 褐釉 壺	-	8.6	7.1	破片	7.5YR4/2 灰褐色 釉10YR6/1 褐灰色		図25
525	3区	土坑324	輸入 黄釉褐彩陶器 盤	40.8	残3.9		破片	2.5Y6/3 にぶい黄色	華南産	図25
526	1区	井戸109	土師器 皿N小	8.4	1.2		1/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図25
527	1区	井戸109	土師器 皿Sc	4.6	1.1		3/5	5Y8/1 灰白色		図25
528	1区	井戸109	土師器 皿S小	10.8	3.0		完形	5Y8/1 灰白色		図25
529	1区	土坑269	土師器 皿N大	12.6	2.3		1/8	10YR7/3 にぶい黄橙色		図25
530	1区	土坑269	瓦器 椀	14.4	3.4	4.5	3/4	N4/0 灰色		図25
531	2区	井戸200	土師器 皿N大	12.4	2.4		完形	7.5YR7/4 にぶい橙		図25
532	4区	土坑124	土師器 皿N小	7.7	1.1		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
533	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.1	1.4		1/2	7.5YR6/4 にぶい橙色		図26
534	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.2	1.2		2/5	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
535	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.2	1.1		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図26
536	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.2	1.3		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図26
537	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.2	1.5		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図26
538	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.3	1.2		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図26
539	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.3	1.4		1/3	10YR7/4 にぶい黄橙色		図26
540	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.4	1.5		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図26
541	4区	土坑124	土師器 皿N小	8.7	1.6		2/5	10YR7/4 にぶい黄橙色		図26
542	4区	土坑124	土師器 皿N大	12.0	2.3		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
543	4区	土坑124	土師器 皿N大	12.2	2.2		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
544	4区	土坑124	土師器 皿N大	12.7	2.5		2/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
545	4区	土坑124	土師器 皿N大	12.8	2.3		完形	10YR8/2 灰白色		図26
546	4区	土坑124	土師器 皿N大	12.8	2.3		4/5	10YR8/2 灰白色		図26
547	4区	土坑124	土師器 皿N大	13.1	2.7		3/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
548	4区	土坑124	土師器 皿N大	13.2	2.3		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図26
549	4区	土坑124	土師器 皿Sc	7.0	1.1		1/3	2.5Y8/2 灰色		図26
550	4区	土坑124	土師器 皿S大	13.1	3.1		3/4	10YR8/2 灰白色		図26
551	4区	土坑124	土師器 皿S大	13.5	3.5		完形	2.5Y8/2 灰色		図26
552	4区	土坑124	瓦器 羽釜		残9.0		破片	N4/0 灰色	脚部	図26
553	4区	土坑124	瓦器 火鉢		残5.0		破片	7.5YR7/6 橙色		図26
554	4区	土坑124	須恵器 鉢		残6.4		破片	N5/0 灰色	東播系	図26
555	4区	土坑124	須恵器 甕		残4.6		破片	N5/0 灰色	頸部片	図26
556	4区	土坑124	輸入 黄釉褐彩陶器 盤		残3.8		破片	5Y6/2 灰オリーブ色 釉10Y6/2 オリーブ灰色		図26
557	3区	柱穴383 (建物161)	土師器 皿N小	8.6	1.4		完形	7.5YR8/4 浅黄橙色		図27
558	3区	柱穴383 (建物161)	土師器 皿Sh	6.9	1.8		完形	10YR8/1 灰白色		図27
559	1区	土坑367	土師器 皿N大	11.5	2.6		9/10	10YR8/3 浅黄橙色		図27
560	2区	土坑132	土師器 皿N小	8.0	1.5		1/3	2.5Y7/2 灰黄色		図27

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
561	2区	土坑132	土師器 皿N小	8.4	1.7		1/3	2.5Y7/2 灰黄色		図27
562	2区	土坑132	土師器 皿N小	8.5	1.5		1/3	10YR7/2 にぶい黄橙色		図27
563	2区	土坑132	土師器 皿N小	8.6	1.5		7/8	7.5YR7/4 にぶい橙色		図27
564	2区	土坑132	土師器 皿N小	8.6	1.5		3/4	10YR7/3 にぶい黄橙色		図27
565	2区	土坑132	土師器 皿S中	10.6	2.9		完形	2.5Y8/2 灰白色		図27
566	2区	土坑132	土師器 皿S中	10.2	2.9		1/3	2.5Y8/1 灰白色		図27
567	2区	土坑132	土師器 皿X	12.2	2.9		1/3	7.5YR7/2 明褐色	地方産。ロクロ成形	図27
568	1区	土坑76	土師器 皿N小	8.1	1.3		1/4	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
569	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.3	2.0		4/7	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
570	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.3	2.1		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
571	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.4	1.9		完形	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
572	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.4	2.1		1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
573	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.7	2.3		5/6	7.5YR7/4 にぶい橙色		図28
574	1区	土坑76	土師器 皿N大	11.4	2.0		1/4	10YR7/4 にぶい黄橙色		図28
575	1区	土坑76	土師器 皿S小	7.2	2.1		5/6	2.5Y8/1 灰白色		図28
576	1区	土坑76	土師器 皿S小	7.4	2.3		5/6	2.5Y8/1 灰白色		図28
577	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.0	3.0		7/8	2.5Y8/1 灰白色		図28
578	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.0	3.3		9/10	2.5Y8/1 灰白色		図28
579	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.1	2.9		1/7	10YR8/1 灰白色		図28
580	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.1	3.1		3/5	10YR8/1 灰白色		図28
581	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.1	2.9		3/5	10YR8/1 灰白色		図28
582	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.3	3.4		1/6	2.5Y8/1 灰白色		図28
583	1区	土坑76	土師器 皿S大	12.4	3.2		2/3	10YR8/1 灰白色		図28
584	2区	井戸316	土師器 皿S大	11.2	残2.9		3/10	7.5YR8/1 灰白色		図28
585	2区	井戸316	土師器 皿S大	12.4	2.7		3/10	7.5YR8/1 灰白色		図28
586	2区	井戸316	瓦器 鍋	24.0	残8.9		3/5	10YR6/1 褐色		図28
587	2区	井戸316	瓦器 鍋	26.0	残10.4		1/5	10YR4/1 褐色		図28
588	2区	井戸316	須恵器 鉢	27.0	9.4		3/5	5B64/1 暗青灰色	東播系	図28
589	2区	井戸356	土師器 皿S中	10.2	3.9		破片	7.5YR8/1 灰白色		図28
590	2区	井戸356	瓦器 小型羽釜	5.1	残4.9		3/5	N4/1 灰色		図28
591	3区	土坑459	土師器 皿S小	7.0	1.8		3/4	10YR8/2 灰白色		図28
592	3区	土坑459	土師器 皿S小	7.0	1.8		1/3	10YR8/2 灰白色		図28
593	3区	土坑459	土師器 皿S大	12.0	2.6		1/4	10YR8/1 灰白色		図28
594	3区	土坑459	瓦器 羽釜	24.6	残3.5		1/5	10YR8/2 灰白色		図28
595	3区	土坑459	瓦器 盤	30.0	残6.6		破片	7.5YR6/2 灰褐色		図28
596	3区	土坑459	須恵器 鉢	28.0	残8.6		破片	2.5Y7/1 灰白色	東播系	図28
597	3区	土坑296	土師器 皿N小	7.6	1.6		完形	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
598	3区	土坑296	土師器 皿N小	7.7	1.7		4/5	10YR6/1 褐色		図版62
599	3区	土坑296	土師器 皿N小	7.9	1.6		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
600	3区	土坑296	土師器 皿N小	8.1	1.7		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
601	3区	土坑296	土師器 皿N小	8.2	1.5		1/2	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
602	3区	土坑296	土師器 皿N小	8.2	1.8		2/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
603	3区	土坑296	土師器 皿N小	8.4	1.8		3/5	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
604	3区	土坑296	土師器 皿N中	10.8	2.5		9/10	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
605	3区	土坑296	土師器 皿N大	11.5	2.3		完形	10YR8/3 浅黄橙色		図版62
606	3区	土坑296	土師器 皿N大	11.6	2.6		7/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
607	3区	土坑296	土師器 皿N大	12.1	2.1		9/10	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
608	3区	土坑296	土師器 皿N大	12.1	2.7		9/10	10YR7/2 にぶい黄橙色		図版62
609	3区	土坑296	土師器 皿N大	12.2	2.8		3/5	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
610	3区	土坑296	土師器 皿N大	12.2	2.9		完形	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
611	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.6	1.7		完形	10YR8/2 灰白色		図版62
612	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.7	1.8		完形	10YR8/2 灰白色		図版62
613	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.8	1.7		完形	10YR8/1 灰白色		図版62
614	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.8	1.7		9/10	10YR8/2 灰白色		図版62
615	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.8	1.8		3/5	7.5YR8/1 灰白色		図版62
616	3区	土坑296	土師器 皿Sh	6.9	1.8		完形	10YR8/1 灰白色		図版62
617	3区	土坑296	土師器 皿S大	11.7	3.0		完形	10YR8/2 灰白色		図版62
618	3区	土坑296	土師器 皿S大	11.8	2.8		完形	10YR8/1 灰白色		図版62

番号	地区	遺構名	資料名	口径	器高	底径	残存	色調	備考	図面番号
619	3区	土坑296	土師器 皿S大	11.8	3.0		完形	10YR8/1 灰白色		図版62
620	3区	土坑296	土師器 皿S大	11.8	3.2		完形	10YR8/2 灰白色		図版62
621	3区	土坑296	土師器 皿S大	11.8	3.3		完形	10YR8/2 灰白色		図版62
622	3区	土坑296	土師器 ミニチュア 片口鉢	5.0	1.9		9/10	10YR8/3 浅黄橙色		図版62
623	3区	土坑296	瓦器 片口鉢	20.0	6.2		1/2	N7/0 灰白色		図版62
624	3区	土坑58	土師器 皿N小	8.2	1.8		5/8	2.5Y7/3 浅黄色		図版62
625	3区	土坑58	輸入 緑釉陶器 盤	-	残3.2		破片	5Y7/2 灰白色 釉 暗緑色	華南産	図版62
626	4区	土坑35	土師器 皿N大	11.5	2.7		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色		図版62
627	2区	第1層-2 (路面150-1)	土師器 皿Sh	6.8	2.0		9/10	10YR8/2 灰白色		図版62
628	2区	第1層-2 (路面150-1)	瓦器 火鉢	40.0	残6.9		1/10	N5/0 灰色		図版62
629	2区	路面150-1	瓦器 鍋	25.0	残7.8		1/5	5Y8/1 灰白色		図版62
630	2区	路面150-1	瓦器 鍋	25.4	残4.2		1/8	N7/0 灰白色		図版62
631	2区	第1層-2 (路面150-1)	瓦器 鍋	27.0	残9.7		1/5	2.5Y7/3 浅黄色		図版62
632	2区	第1層-2 (路面150-1)	瓦器 羽釜	26.2	残5.2		1/10	2.5Y7/2 灰黄色		図版62
633	2区	路面150-1	須恵器 鉢	31.0	残10.3		2/5	5BG4/1 暗青灰色	東播系	図版62
634	2区	第1層-3 (路面150-1)	須恵器 鉢	-	残4.0		破片	N7/0 灰白色	東播系	図版62
635	2区	路面150-1	焼締陶器 鉢	12.9	9.0	12.0	3/5	2.5YR3/4 暗赤褐色	丹波産	図版62
636	2区	路面150-1	焼締陶器 甕	-	残6.5		破片	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	備前産	図版62
637	2区	第1層-2 (路面150-1)	輸入 青白磁 水注	-	残4.2		破片	N8/0 灰白色 釉10GY8/1 明緑灰色		図版62
638	2区	井戸348	土師器 皿Sh	6.6	1.9		2/5	10YR8/1 灰白色		図版62
639	2区	井戸348	土師器 皿S大	12.6	3.1		2/5	7.5YR8/1 灰白色		図版62
640	2区	井戸348	瓦器 羽釜	33.6	残12.1		1/10	N3/1 暗灰色		図版62
641	2区	井戸348	須恵器 鉢	25.8	残6.0		1/5	7.5Y5/1 灰色	東播系	図版62
642	3区	土坑162	土師器 皿Sh	6.4	2.8		完形	10YR8/2 灰白色		図29
643	3区	土坑162	土師器 皿S中	11.1	2.8		1/3	2.5Y8/1 灰白色		図29
644	3区	土坑162	須恵器 鉢	-	残7.8		破片	7.5Y5/1 灰色	東播系	図29
645	3区	土坑162	須恵器 鉢	-	残1.9		破片	N5/0 灰色	東播系	図29
646	3区	土坑173	土師器 皿S大	11.7	3.4		完形	2.5Y7/3 浅黄色		図29
647	2区	溝227	土師器 皿N大	11.1	2.7		3/5	7.5YR6/6 橙色		図29
648	2区	溝227	土師器 皿Sh	6.8	1.9		1/2	10YR8/2 灰白色		図29
649	2区	溝227	土師器 皿S大	13.6	残3.2		2/5	10YR8/2 灰白色		図29
650	2区	溝227	瓦器 鍋	19.0	残5.6		2/5	N7/1 灰白色		図29
651	2区	溝227	瓦器 鍋	26.0	11.8		3/5	5Y6/1 灰色		図29
652	2区	溝227	瓦器 鍋	31.8	残14.0		3/5	2.5Y8/1 灰白色		図29
653	2区	溝227	瓦器 鍋	33.0	残12.9		2/5	2.5Y8/1 灰白色		図29
654	2区	溝227	瓦器 羽釜	33.0	残13.8		1/5	2.5Y3/1 黒褐色		図29
655	2区	溝227	焼締陶器 甕	46.0	残6.4		破片	10YR3/3 暗褐色	常滑産	図29
656	2区	土坑297	瓦器 鍋	30.2	13.6		完形	2.5Y8/1 灰白色		図30
657	3区	第2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
658	3区	第2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
659	3区	第2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
660	3区	第1-2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
661	3区	井戸451	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
662	3区	第2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ
663	3区	第2層	輸入 黄釉褐彩陶器				破片		華南産	写真のみ

表9 掲載軒瓦観察表

軒丸瓦

() は復元数 単位は cm

番号	文 様	瓦当径	調 整	焼成	胎 土	色 調	出土遺構	備 考
瓦1	単弁蓮華文	13.0	裏面オサエとナデ	良	やや粗	2.5Y7/1 灰白色	3区泉241	
瓦2	単弁蓮華文	12.8~13.6	裏面オサエとナデ	やや 不良	やや粗	10YR7/1 灰白色	3区泉241 落ち込み	十二葉
瓦3	単弁八葉蓮華文	11.4~12.4	裏面オサエとナデ	良	密	N3/0 暗灰色	3区泉241 落ち込み	
瓦4	単弁八葉蓮華文	14.0	裏面オサエとナデ	良	密	N3/0 暗灰色	3区泉241	
瓦5	複弁蓮華文	/	裏面オサエとナデ	良	密	10G4/1 暗緑灰色	3区泉241	山城系
瓦6	複弁六葉蓮華文	13.7~14.0	丸瓦部凸面縄タタキ、 凹面布目。裏面オサエ とナデ	良~ やや 不良	密	N5/0 灰色	3区泉241 礫敷	
瓦7	三巴文	12.3~12.5	丸瓦部凸面縄タタキ、 凹面布目。裏面ナデ	良	やや粗。 小礫混	2.5Y6/1 黄灰色	3区泉241 礫敷	
瓦8	複弁八葉蓮華文	13.8~14.0	裏面オサエとナデ	良	密。径2~5 mm礫混	N3/0 暗灰色	3区井戸235	2次に火を受ける
瓦9	単弁(八)葉蓮華文	(13)	裏面オサエとナデ	良	粗。径1~5 mm礫混	10YR6/1 褐灰色	3区攪乱	
瓦10	複弁八葉蓮華文	14.5~14.8	丸瓦部凸面斜格子、凹 面布目。裏面ナデ	良	密。長石粒混	2.5Y6/1 黄灰色	1区建物146 内整地層	
瓦11	単弁十葉蓮華文	11.0~13.0	裏面オサエとナデ	やや 不良	密。径1~3 mm礫混	5G4/1 暗緑灰色	1区土坑393	
瓦12	単弁(十)葉蓮華文	(12~15)	丸瓦部凸面縄タタキと ナデ消し、凹面布目。 裏面ナデ	堅緻	密。径0.5~ 2mm礫混	N5/0 灰色	1区土坑290	
瓦13	単弁蓮華文	(14)	裏面オサエ	良	密	N4/0 灰色	1区建物160 上面3-2層	
瓦14	単弁蓮華文	/	裏面オサエとナデ	良~ やや 不良	密。長石粒混	2.5Y4/1 黄灰色	1区建物160 雨落溝	
瓦15	複弁(六)葉蓮華文	(15.5)	裏面ナデ	堅緻	やや粗。径 0.5~7mm礫 多く混	N4/0 灰色	1区柱穴283	2次に火を受け、表面に自然 釉あり。播磨系
瓦16	単弁八葉蓮華文	(12)	裏面オサエとナデ	良	密	N4/0 灰色	2区池160-1	
瓦17	巴文	/	丸瓦部凹面布目。裏面 オサエとナデ	やや 不良	やや粗。径1 ~2mm礫混	10YR7/1 灰白色	1区第4層	
瓦18	(三)巴文	(12)	丸瓦部凸面縄タタキと ナデ消し、凹面布目。 裏面ナデ	堅緻	密。径0.5~ 3mm礫混	N4/0 灰色	1区柱穴286 (柱列1)	右巻き
瓦19	三巴文	11.1~12.2	丸瓦部凸面縄タタキと ナデ消し、凹面布目。 裏面ナデ	やや 軟	やや粗。径 0.5~6mm礫 混	10YR7/1 灰白色	1区柱穴286 (柱列1)	
瓦20	三巴文	(13.5)	裏面オサエとケズリ	良	密	N5/0 灰色	1区建物146 雨落溝	
瓦21	三巴文	13.2~14.4	丸瓦部凸面縄タタキと ナデ。裏面指ナデ	良好	密	N4/0 灰色	2区池160-1	左巻き
瓦22	三巴文	12.2~13.2	裏面ナデ	軟	粗。径0.5~ 10mm礫多く混	10YR7/3 にぶい黄 橙色	2区池160-2	左巻き
瓦23	三巴文	14.5~14.8	裏面ナデ	堅緻	やや粗。径1 ~5mm礫混	2.5Y7/1 灰白色	2区池160-1	右巻き。播磨系
瓦24	三巴文	10.5	丸瓦部凸面縄タタキと ナデ消し、凹面布目。 裏面オサエとナデ	やや 不良	密。径1~3 mm礫混	2.5Y6/1 黄灰色	1区第3層	右巻き
瓦25	三巴文	11.1~11.5	裏面ナデ	やや 軟	密。径0.5~ 3mm礫混	N5/0 灰色	2区池160-1	右巻き

()は復元数 単位は cm

番号	文 様	瓦当径	調 整	焼成	胎 土	色 調	出土遺構	備 考
瓦26	三巴文	12.0~12.4	裏面オサエとナデ	やや不良	密	2.5Y8/2 灰白色	2区池160-1	右巻き
瓦27	巴文	14.5	裏面指ナデ	良	やや粗	N3/0 暗灰色	2区池160 セクション	右巻き
瓦28	三巴文	/	裏面指ナデ	堅緻	やや粗。径 0.5~2mm礫 多く混	10YR8/2 灰白色	2区池160-2	右巻き。播磨系 か
瓦29	巴文	(11)	丸瓦部凹面布目。裏面 ナデ	良~ やや 不良	やや粗	2.5Y6/1 黄灰色	1区建物146 上面	珠文あり。左巻 き。二巴か
瓦30	三巴文	11.0	裏面オサエとナデ	良~ やや 不良	密。長石粒混	2.5Y4/1 黄灰色	1区建物160 上面3-2層	珠文あり。右巻 き

軒平瓦

()は復元数 単位は cm

番号	文 様	瓦当 横幅	瓦当 縦幅	調 整	焼成	胎 土	色 調	出土遺構	備 考
瓦31	均整唐草文	19.0	(5)	平瓦部凹面布目、凸面 縦ナデ。裏面横ナデ	良	やや粗	N3/0 暗灰色	3区泉241 礫敷	
瓦32	均整唐草文	/	4.9	平瓦部凹面布目、凸面 ナデ。裏面ナデ	堅緻	密	2.5Y7/1 灰白色	3区泉241	左端部
瓦33	均整唐草文	/	5.1	平瓦部凹面布目。裏面 ナデ	やや 不良	密。径0.5~ 2mm礫混	10YR8/2 灰白色	3区泉241	右端部
瓦34	唐草文	/	5.6	平瓦部凹面縦ナデ、凸 面縄タタキ。裏面縄タ タキとナデ	堅緻	密	10Y6/1 灰色	3区泉241	左端部。瓦当面 に木目が顕著。 丹波系
瓦35	唐草文	/	4.8	平瓦部凹面布目、凸面 縄タタキ。裏面縄タタ キとナデ	堅緻	密	N3/0 暗灰色	3区泉241	軒平を意図的に 分割した隅軒平 瓦か。丹波系
瓦36	唐草文	/	4.8	平瓦部凹面布目。裏面 オサエとナデ	やや 不良	密。径3~5 mm礫混	2.5Y8/2 灰白色	3区第3層	右端部。折り曲 げか
瓦37	唐草文	/	4.6	平瓦部凹面縦ナデ、凸 面縄タタキ。裏面縄タ タキと横ナデ	良	密	N6/0 灰色	3区第3層	飾り瓦か。円成 寺跡(1992~19 93年調査)から 同形の軒平瓦が 出土
瓦38	唐草文	/	5.6	平瓦部凹面布目。裏面 縄タタキ	堅緻	密	N4/0 灰色	3区第3層	瓦当面に木目が 顕著。丹波系
瓦39	剣頭文	15.7	3.2	平瓦部凹面布目、凸面 縦ナデ。裏面オサエ	良~ やや 不良	やや粗	10YR7/3 にぶい黄 橙色	3区井戸89	
瓦40	剣頭文	/	3.6	平瓦部凹面布目。裏面 横ナデ	良	やや粗	N5/0 灰色	3区第2層	半折曲げ。
瓦41	唐草文	/	4.5	平瓦部凹面布目とナデ 消し、凸面ナデ。裏面 強いナデ	堅緻	密。径0.5~ 2mm礫混	N5/0 灰色	3区井戸451 木枠内	左部。播磨系。 時期は鎌倉時代 か
瓦42	均整唐草文	25.0	(4.8)	平瓦部凹面布目、凸面 斜格子タタキ。裏面と 横ナデ	やや 不良	粗。径1~5 mm礫混	N5/0 灰色	1区溝367	
瓦43	唐草文	/	3.6	平瓦部凹面布目。瓦当 裏面ナデ	やや 不良	粗。径1~3 mm礫混	2.5Y7/2 灰黄色	1区第4-1層	
瓦44	唐草文	/	3.9	平瓦部凹面布目。瓦当 裏面ナデ	良	密	N3/0 暗灰色	1区第4-3層	
瓦45	唐草文	19.1	4.0	平瓦部凹面布目、凸面 縦ナデ。裏面オサエと 横ナデ	良	密	N5/0 灰色	1区第4-3層	
瓦46	唐草文	/	3.6	平瓦部凹面布目。瓦当 裏面ナデと縄タタキ	良	やや粗。径1 ~3mm礫混	10YR8/2 灰白色	1区第4層	折曲げ

() は復元数 単位は cm

番号	文 様	瓦当 横幅	瓦当 縦幅	調 整	焼成	胎 土	色 調	出土遺構	備 考
瓦47	唐草文	/	3.5	平瓦部凹面布目。裏面縦ナデ	良～ やや 不良	粗。径1～3 mm礫混	N5/0 暗灰色	1区第4層	
瓦48	唐草文	/	3.5	平瓦部凹面布目。裏面横ナデ	やや 不良	やや粗。径1 ～5mm礫混	10YR7/1 灰白色	1区溝357	折曲げ
瓦49	宝相華唐草文	20.0	3.7	平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ消し。裏面オサエとナデ	良	密	N3/0 暗灰色	1区柱穴286 (柱列1)	
瓦50	雁巴文	/	3.7	平瓦部凹面布目。裏面横ナデ	良	密	N4/0 灰色	1区建物146 上面	栢杜遺跡八角円堂出土軒平瓦と同文か。山城系
瓦51	偏行唐草文	/	3.6	平瓦部凹面布目。裏面縦ナデ	やや 不良	粗。径1～3 mm礫混	N3/0 暗灰色	1区建物160 上面	折曲げ
瓦52	唐草文	16.8	3.2	平瓦部凹面布目、凸面ナデ。裏面横ナデ	やや 不良	やや粗。径 0.5～5mm礫多 く混	N4/0 灰色	2区池160-1	半折曲げ
瓦53	幾何学文	/	4.3	平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。裏面横ナデ	良	密。径0.5～ 2mm礫混	N3/0 暗灰色	2区池160 拡張	折曲げ
瓦54	斜格子文	/	4.9	平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。裏面横ナデ	良	密	N3/0 暗灰色	2区池160-1	半折曲げ
瓦55	斜格子文	/	3.6	平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。裏面ナデ	良	密	10YR7/1 灰白色	2区第2層	折曲げ
瓦56	斜格子文	19.1	3.8	平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。裏面横ナデ	良	密	2.5Y5/1 黄灰色	1区土坑108	
瓦57	斜格子文	/	/	裏面オサエと横ナデ	やや 不良	密	7.5Y8/1 灰白色	1区第3層	
瓦58	剣頭文	/	3.0	平瓦部凹面布目。裏面横ナデ	良	粗	5Y4/1 灰色	1区建物160 上面	上外区に珠文あり
瓦59	剣頭文	17.6	3.2	平瓦部凹面布目、凸面オサエとナデ。裏面横ナデ	良～ やや 不良	粗	5Y6/1 灰色	1区土坑93	
瓦60	剣頭文	18.6	3.6	平瓦部凹面布目、凸面ナデ消し。裏面オサエと横ナデ	やや 不良	やや粗。径1 ～2mm礫混	2.5Y5/1 黄灰色	1区柱穴286 (柱列1)	半折曲げ
瓦61	剣頭文	/	3.2	平瓦部凹面布目。瓦当裏面オサエと横ナデ	不良	やや粗	10YR6/1 褐灰色	2区泉100	半折曲げ
瓦62	剣頭文	17.0	3.0	平瓦部凹面布目、凸面ナデ。裏面ナデ	やや 不良	密。径0.5～ 4mm礫混	2.5Y7/1 灰白色	2区池160-1	折曲げ
瓦63	剣頭文	17.1	3.8	平瓦部凹面布目、凸面ナデ。裏面横ナデ	良	粗め。径0.5 ～5mm礫混	2.5Y7/1 灰白色	2区池160-1	折曲げ
瓦64	剣頭文	16.0	2.9	平瓦部凹面布目。裏面オサエとナデ	やや 不良	粗め。径1～ 5mm礫混	N4/0 灰色	1区溝367	折曲げ
瓦65	剣巴文	21.0	4.2	平瓦部凹面布目、凸面縄タキとナデ消し。裏面オサエと横ナデ	良	密	N4/0 灰色	2区池160-1	折曲げ
瓦66	連巴文	/	3.5	裏面ナデ	良	密。径0.5～ 3mm礫混	N4/0 灰色	2区土坑275	折曲げ
瓦67	巴文	/	4.2	裏面オサエとナデ	やや 不良	粗め。径1～ 3mm礫混	2.5Y4/1 黄灰色	1区柱穴286 (柱列1)	左端部。折曲げ

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうさんぼうよん・ごちょうあと							
書名	平安京左京八条三坊四・五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-7							
編著者名	辻 裕司・木下保明・長戸満男・大立目 一・布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうさんぼう 八条三坊 よん・ごちょうあと 四・五町跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 ひがしおこうじかまどのちょう 東塩小路釜殿町 ほかちない 他地内	26100		35度 00分 48秒	135度 47分 22秒	2008年5月 8日～2008 年9月8日 2008年11月 26日～2008 年12月26日 2009年2月 12日～2009 年5月11日	2,450㎡	ターミナル 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 八条三坊 四・五町跡	都城跡	平安時代	基壇建物、掘立柱 建物、泉、池、柱 穴、土坑、溝、井 戸	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦器、 丸瓦、平瓦、軒丸瓦、 軒平瓦、輸入陶磁器	四・五町における宅 地内の経緯を明らか にした。この2町を 含む当該地には平安 時代後期以降、政治 の中枢を担う人物の 御所・邸宅があった ことが文献史料から 窺われるが、それを 示す建物・泉・池跡 などを検出した。			
		鎌倉時代～ 室町時代	掘立柱建物、泉、 池、柱穴、土坑、 溝、井戸	土師器、瓦器、中世須 恵器、焼締陶器、輸入 陶磁器				
		江戸時代	耕作溝	土師器、国産陶磁器、 丸瓦、平瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7
平安京左京八条三坊四・五町跡

発行日 2009年12月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961